

令和2年度 かいじあむ古文書講座 第7回

おうちで古文書講座

「やまなしの食べものに
関する古文書」

山梨県立博物館 学芸員 中野 賢治

はじめに

みなさんどうもこんにちは、
学芸員の中野です。早いもので、
「おうちで古文書講座」も今回
で7回目となりました。

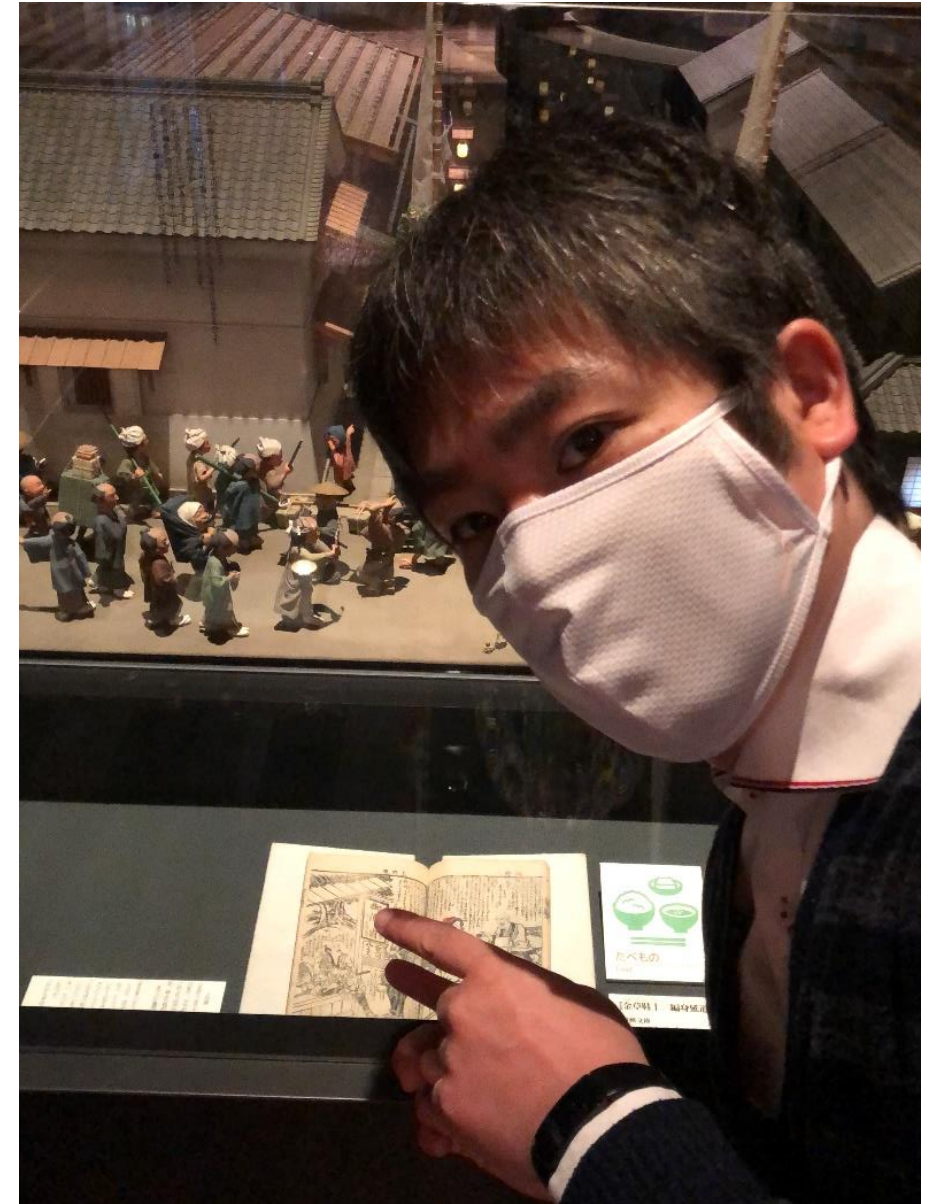
来年度はどうしようか、とい
う相談を同僚とする時期になり
ましたが、ここに来てまた状況
が怪しくなってきました。



はじめに

なお、今回は動画バージョンも用意しました。ご都合に合わせてご覧いただければと思います。

以下、ホームページに掲載している今回の課題資料を参照しながらご覧ください。





今回のテキストはこちら。
『金草鞋十二編 身延山道中ノ
記』（かねのわらじじゅうにへん みのぶさん
どうちゅうのき）の一場面を読んで
いきます。作者は十返舎一九
（じっぺんしゃいっく）、挿絵は歌川
豊国（うたがわとよくに）によります。
「金草鞋」は十返舎一九によ
る連作の紀行文で、絵入りの
読み物である「合巻（ごうか
ん）」に分類されます。



刊本によっては「身延道中記」などとなっているものもありますが、当館所蔵のものからタイトルをとりました。

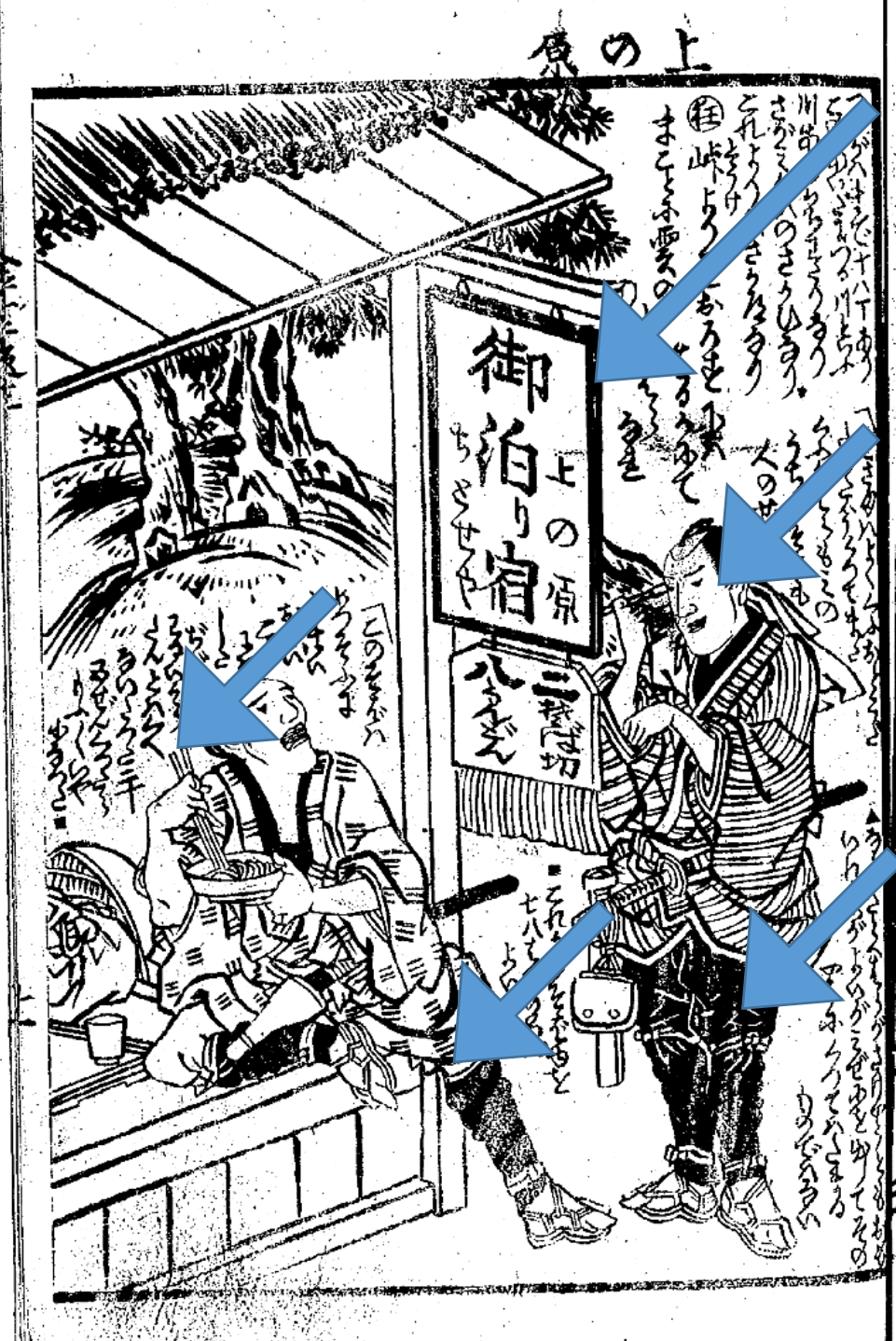


場所は甲州上野原宿（現上野原市）。店先に腰をかけて何やら食べている人に、右側の男が話しかけています。彼らの周りにびっしりと文字があります。今回はこれを読んでいます。



ご覧の通り、これまで扱ってきた古文書とは様子が異なります。その原因は、文字の大半が仮名文字（ひらがな・カタカナ）であることでしょう。

漢字に比べて仮名文字は、現在と字形が異なるいくつかの文字さえ押さええておけばある程度読めるようになります。

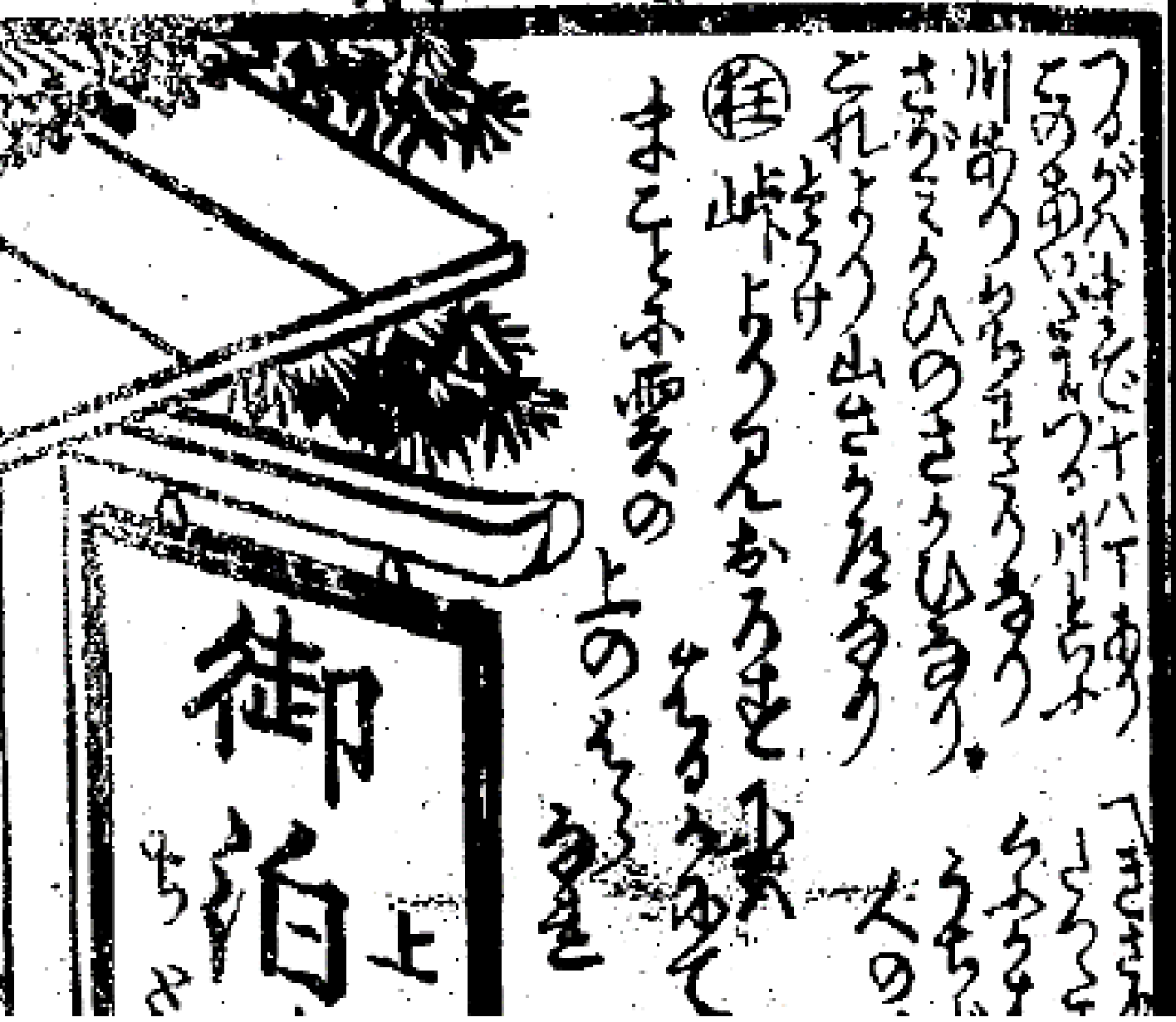


読む順番は、基本的に右上から左下に読み進めればよいのですが、離れた場所に書かれた記号でつながられているところもあります。それはまた後で解説します。



それでは、このあたりから
読み始めていきましょう。

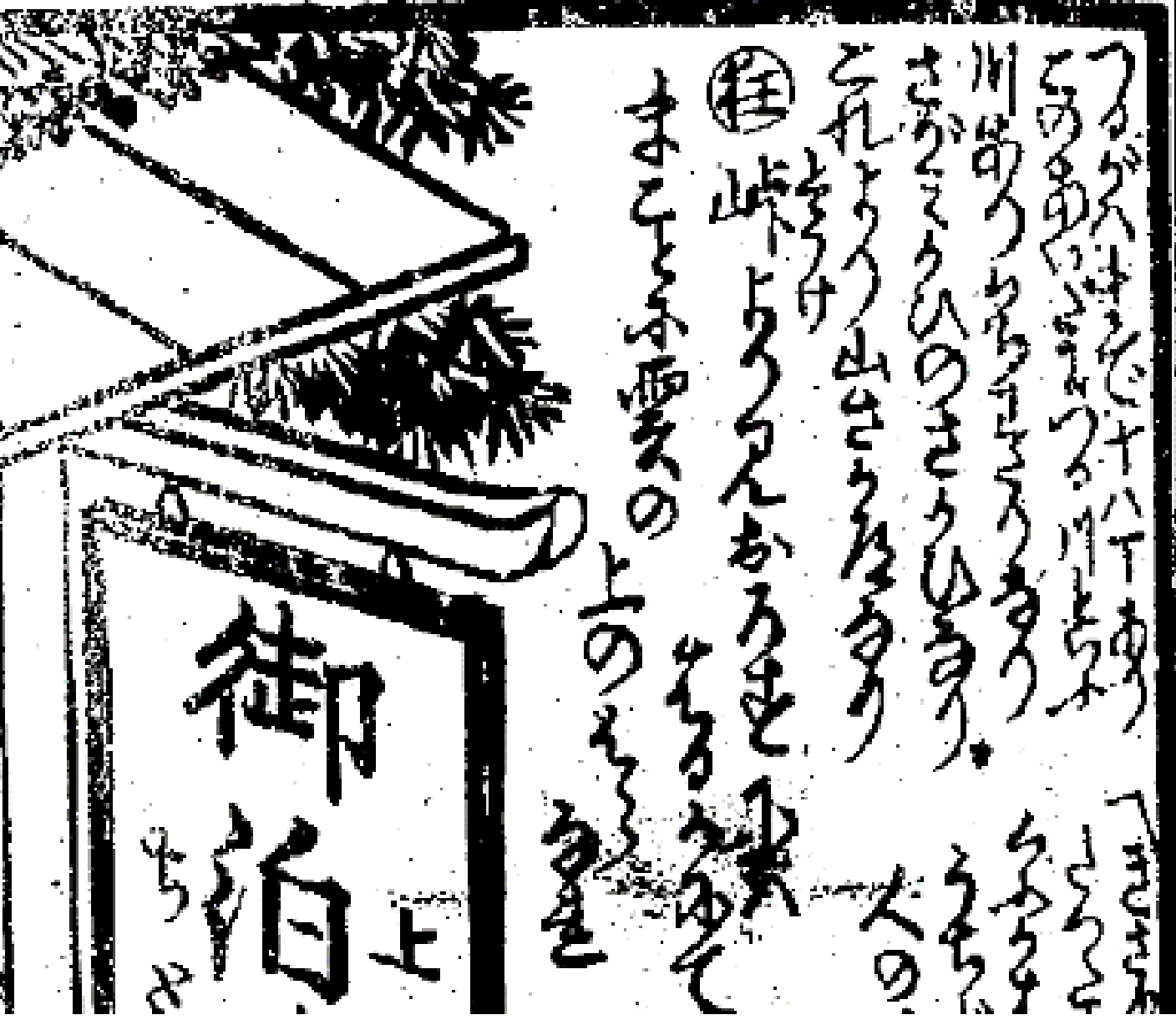
食の上



どんな古文書でもそうですが、私たちも最初から全文解読ができることはそんなにありません。まずは読めるところを拾い読みしていくのが普通です。

今回の資料では、大半が仮名文字です。現在のひらがなの知識も活用できるので、気軽にチャレンジしてみましょう。

食の上



さて、現在、みなさんはどのくらい左の画像の文字が読めているでしょうか。

次のページでは、現時点では読めなくてもよい場所を□で示してあります。

一通り左の画像の文字を読んでからご覧ください。

つ

で

この
☐ ☐
い
☐ ☐
つ
☐ ☐
といふ

□ □ □ □ □ □ □ □ □ □

せ ☐ ☐ ☐ ☐
 の ☐ ☐ ☐ ☐

これよ ☐ 山さ ☐ ☐ ☐ ☐

とうけ

① 狂
峠
よ

お
ろ

て

原の上

まこと ☐ 雲の

上の
☐
☐

つるがえはるを十八あり
このめいめいなる川とちよ
川あつちちちちちちちち
さかえくいのさくひちち
これよりいふさくちちちち

子

狂嶽よりんかろと云

まこと雲の

16

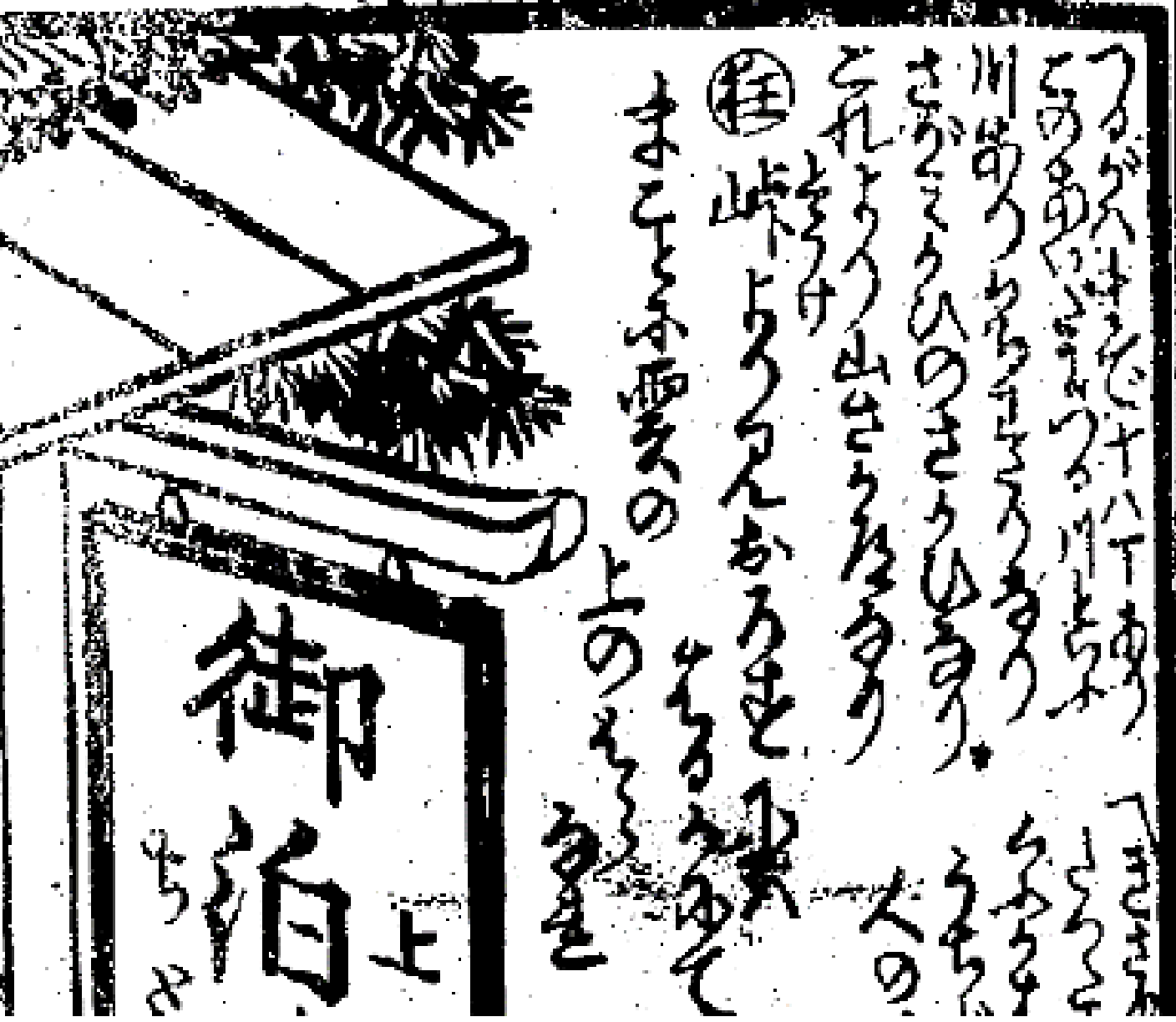
三

上 の 人

御伯

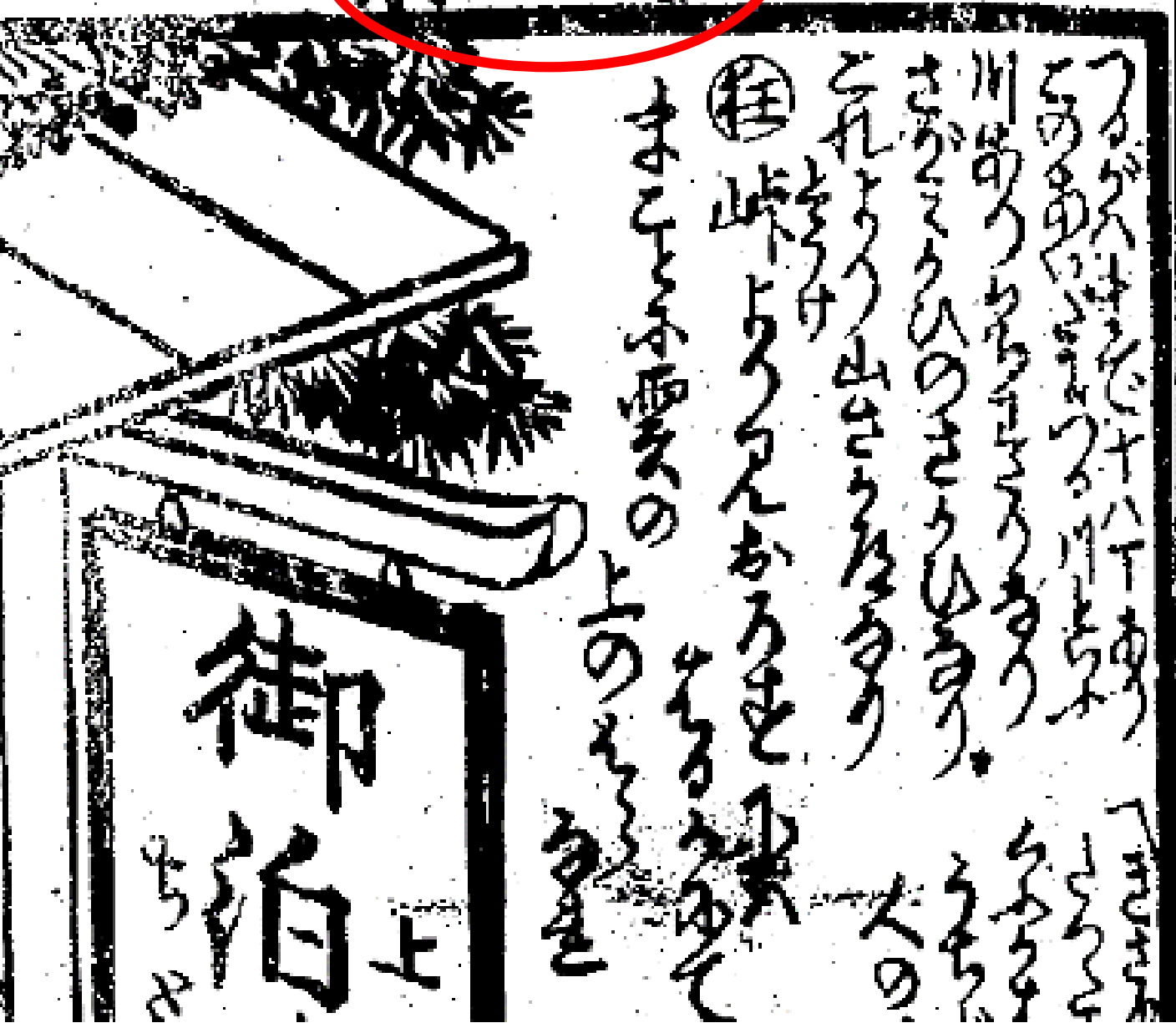
上

食の上



「おいおい、馬鹿にしすぎだろ」というみなさんのお怒りの声が聞こえるようですが、まずはここまでのところで少し説明を加えておきましょう。

原の上



「原の上」ではなく
「上の原」。

現在の上野原市にあった
上野原宿を指しています。

上
 御
 伯

仮名文字が大半、とは言
いましたが、この「山」
「峠」「雲」「上」などの
ように、唐突に漢字が現れ
ることも多いです。これが
なかなか難物で、もっと崩
れてくると漢字と仮名文字
の区別がつかなくなり、解
読が難しいこともあります。

食の上



「とうけ」とありますが、「峠」にふられた読みなので「とうげ」と読むようです。このように、仮名文字での表記の場合、濁点はあったりなかったりします。文脈から推定して、読む側で補完をする必要があります。

つ

で

この
☐ ☐
い
☐ ☐
つ
☐ ☐
といふ

[illegible]

せ ☐ ☐ ☐ ☐
 の ☐ ☐ ☐ ☐

これよ ☐ 山さ ☐ ☐ ☐ ☐

とうけ

① 狂
峠
よ

お
ろ

て

原の上

まこと ☐ 雲の

上の
☐
☐

つるがくはすて十八あり
このゆゑにまづ川をさへ
川あつちのうへまで
さがさくひのかうひきり
これよりつたかたなり

子

狂嶽よりんかろと云

まこと雲の

16

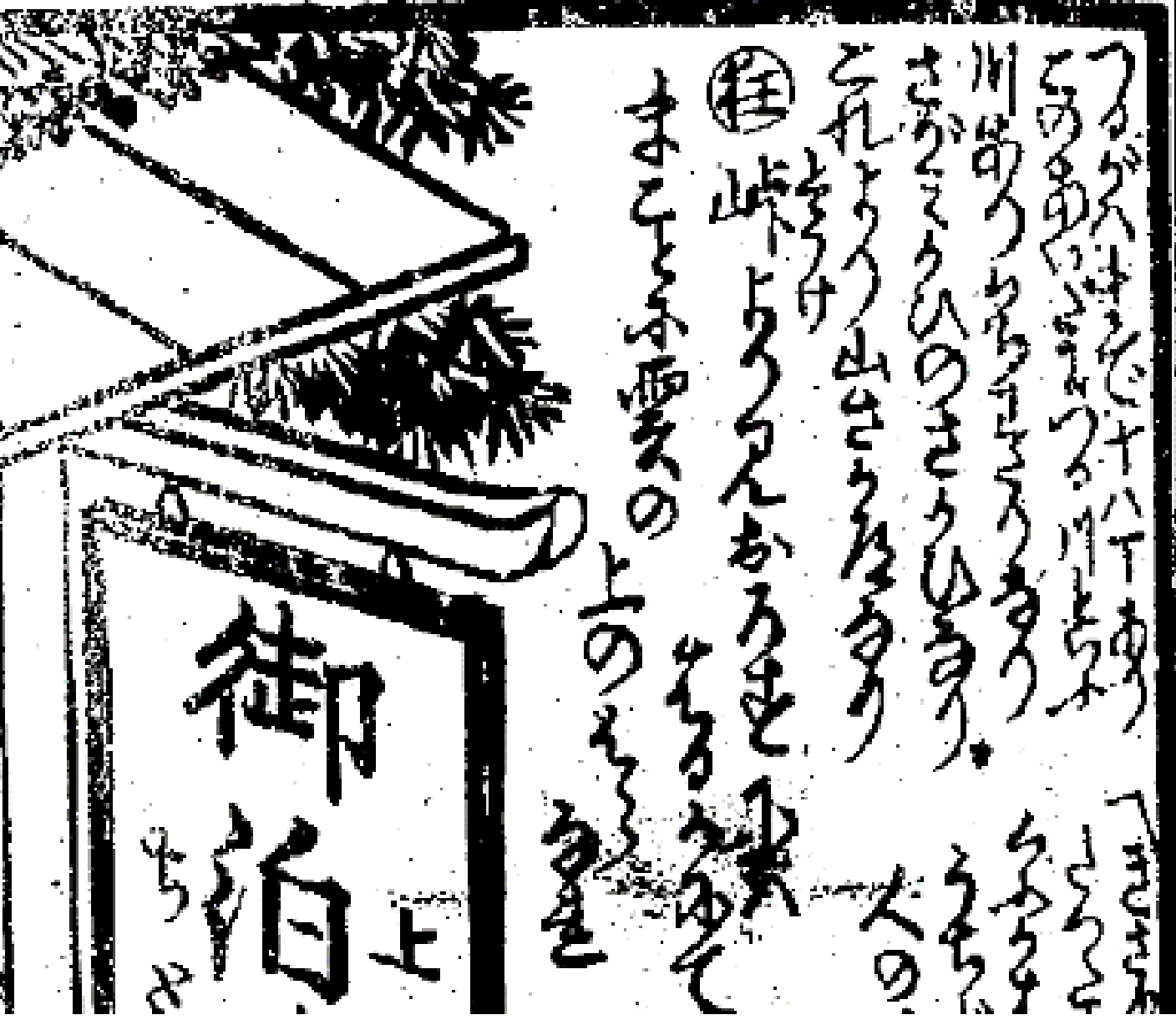


上 の 人

御伯

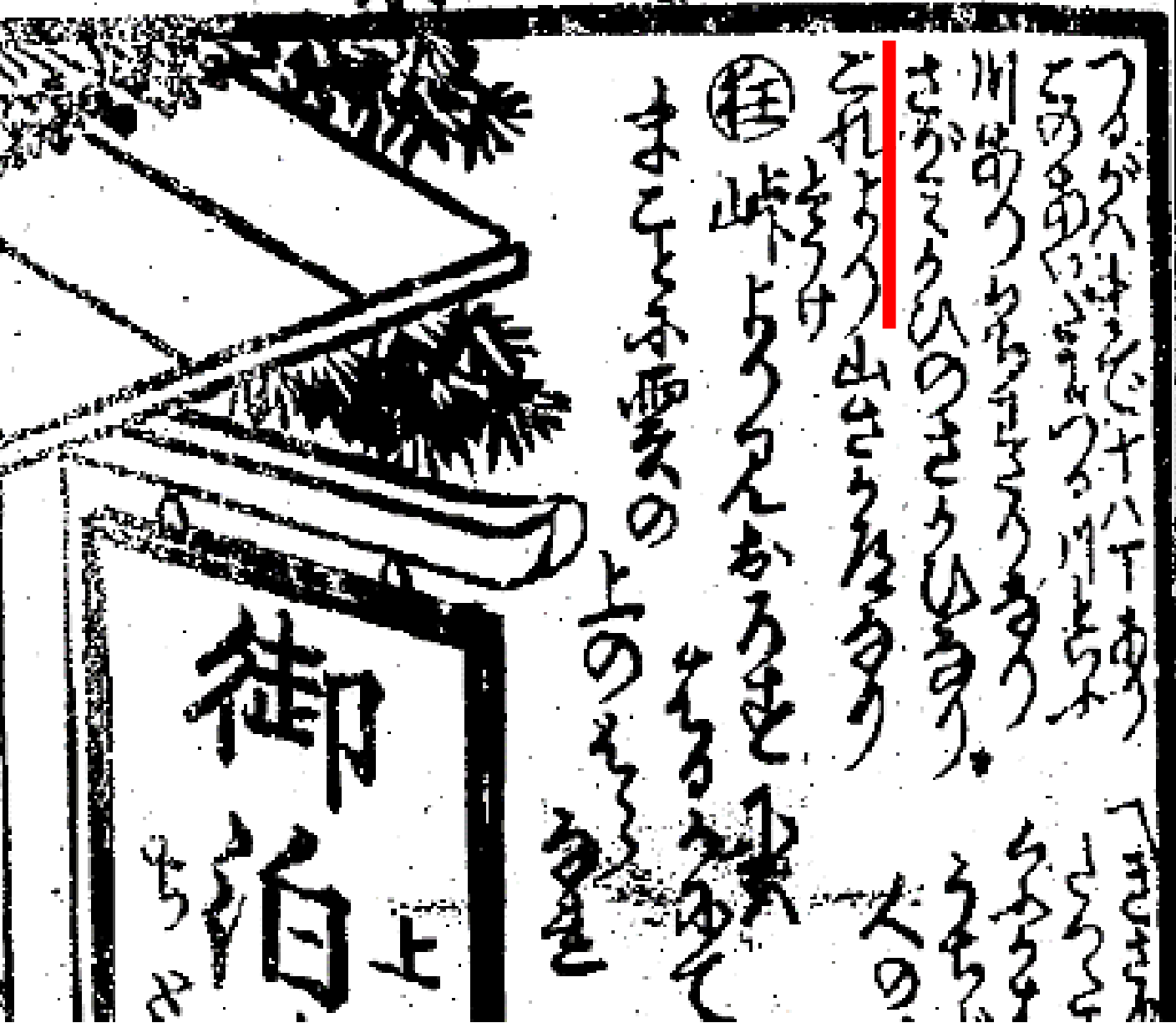
上

食の上



この後は、資料の最初
（右側）から順に読んで
いってもよいのですが、資
料全体を見渡して、読めそ
うなところから攻めるのが
よいと思います。

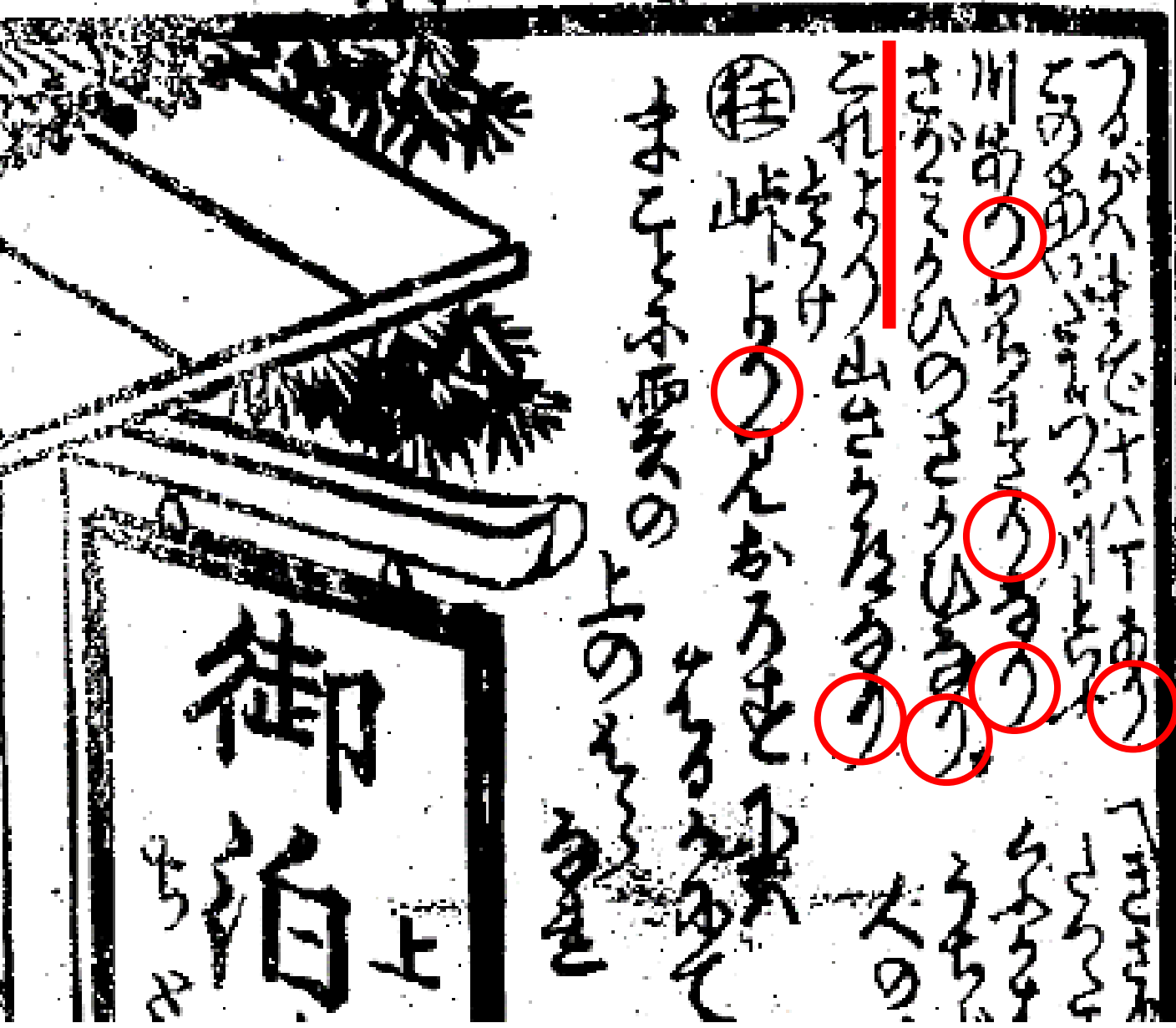
食の上



これよ ☐ 山さ ☐ ☐ ☐ ☐ ☐

このあたりはどうでしょう。「これよ□」ときて、この形…当てはまる文字の候補はそんなにはずです。

食の上



つるがへはすむに十八あり
さかえくひのさうひきり
これより山さうなるり
柱山よりんちり
まことふ雲の上のさう
御泊上

これより山さ

「り」でよさそうです。

この文字が「り」だとすると、他のところの文字がいくつか解決できそうですね。

原の上

つ
□
□
□
□
で
□
□
□
□
り

この
☐ ☐
い
☐ ☐
つ
☐ ☐
といふ

り	
り	
り	

さ の さ り

これより山さ□□□り

とうけ

① 狂
峠
より
り

お
ろ

まこと ☐ 雲の

上の□□

て

上 の 人

つるがくすはて十八あり
このゆゑにまづ川をあら
川をあらふにまづ川をあら
まづ川をあらふにまづ川
これよりつるがくすはて

① 峠より見たる山

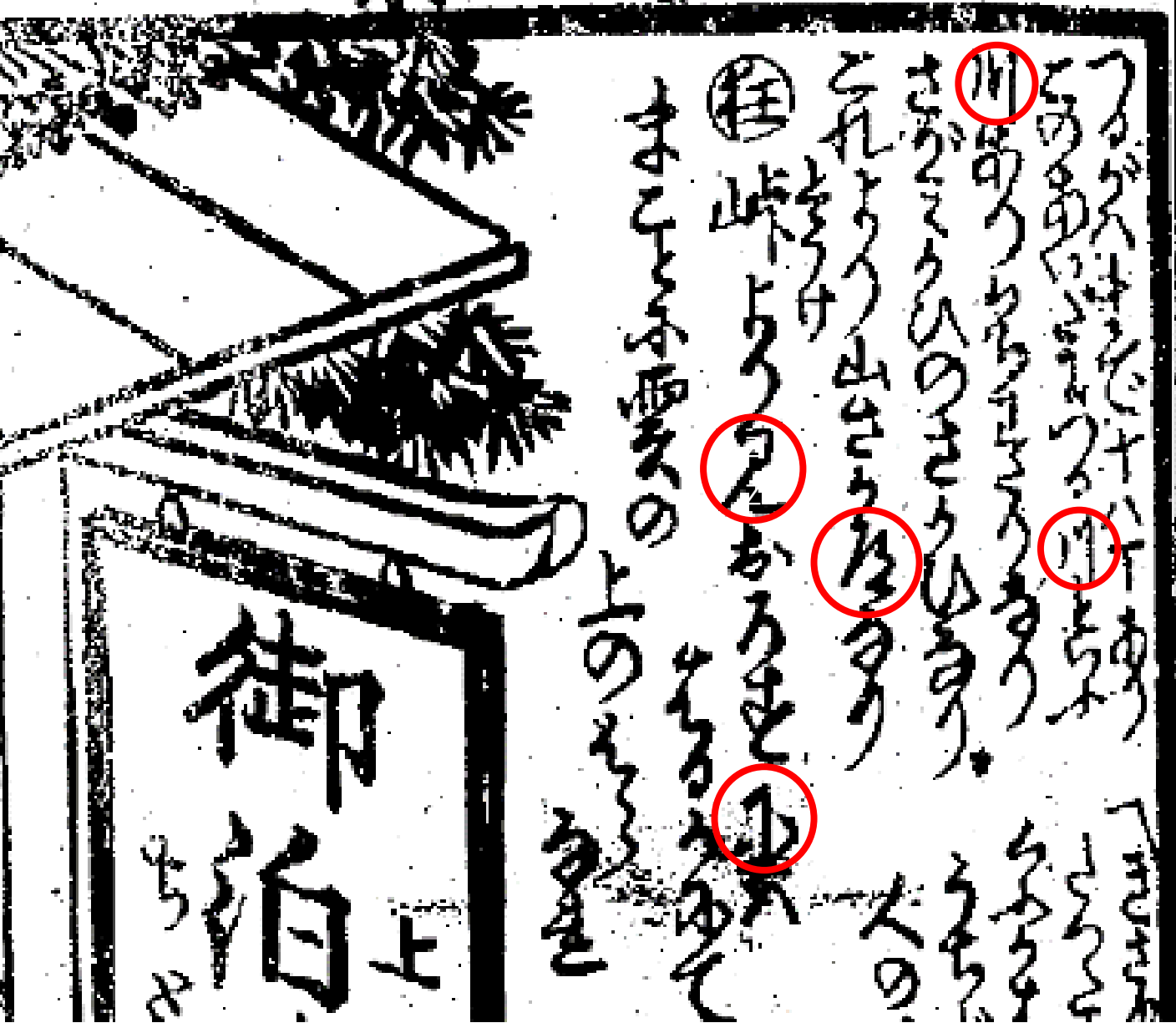
まこと雲の

上64

御伯

58

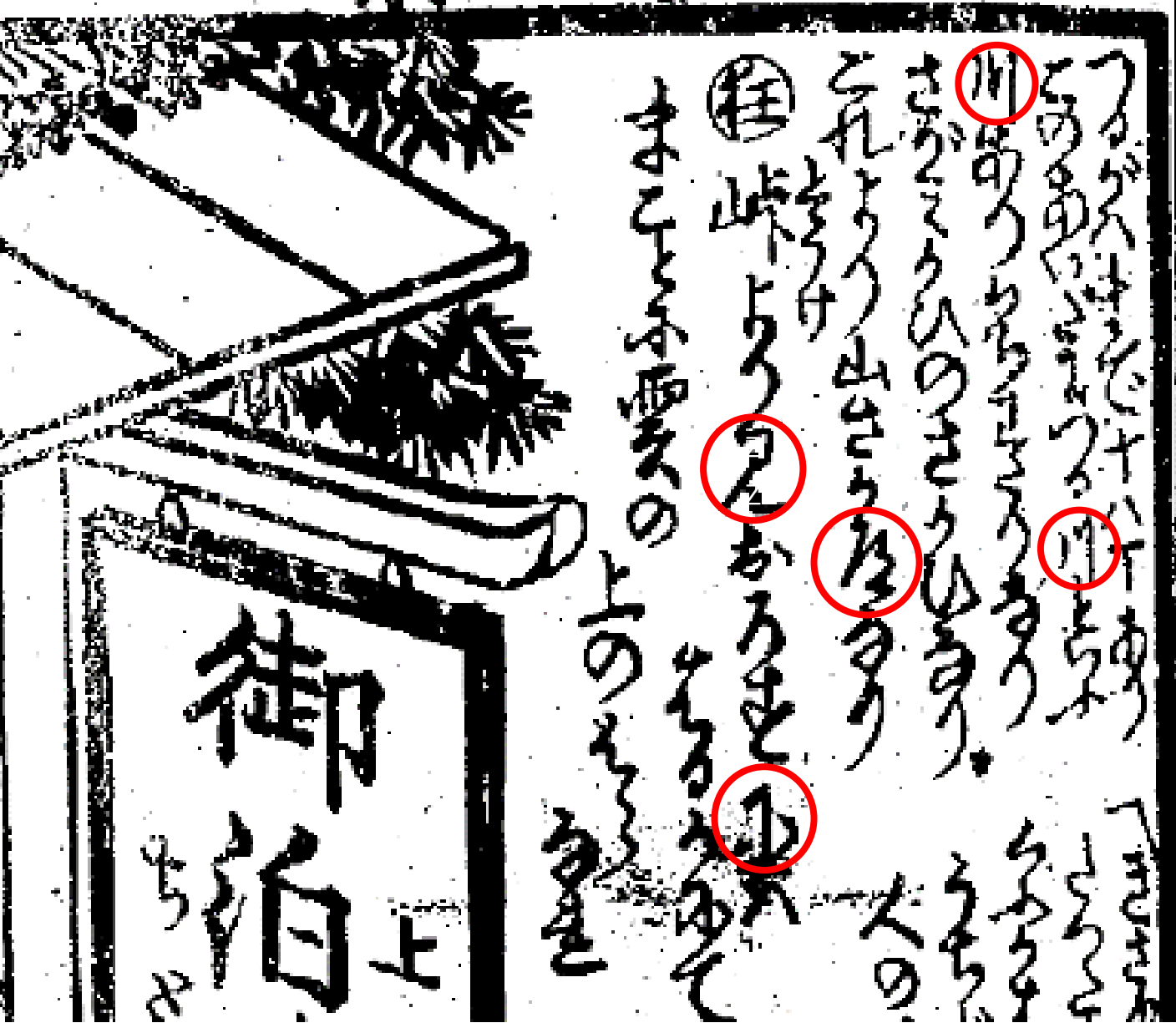
食の上



次は数少ない漢字を攻めてみましょう。

いくつか漢字らしき文字がありますね。さほど難しくないので、読めるという方も多いでしょう。

食の上



順に「川」「道」「見」「下」です。

「道」以外は見た目通りですよ。ね。「道」はちょっと難しいですが、よく出てくるくずし字ですので覚えておきましょう。

上
の
屋

つるがえはきで十八あり
このゆいはいづる川より
川あつちをさうりあり
さがくひのさうひまり
これより山さうりあり
柱山下よりかんかろと**山**
まことふ雲の上のももて

御泊上

なお「川」はこのまま、もしくはもう少し崩れてひらがなの「つ」と読む場合があります。ここでもそうかもしれません。とりあえず漢字をあてておいて、もし意味が通らないようなら「つ」の可能性を考えましょう。

原の上

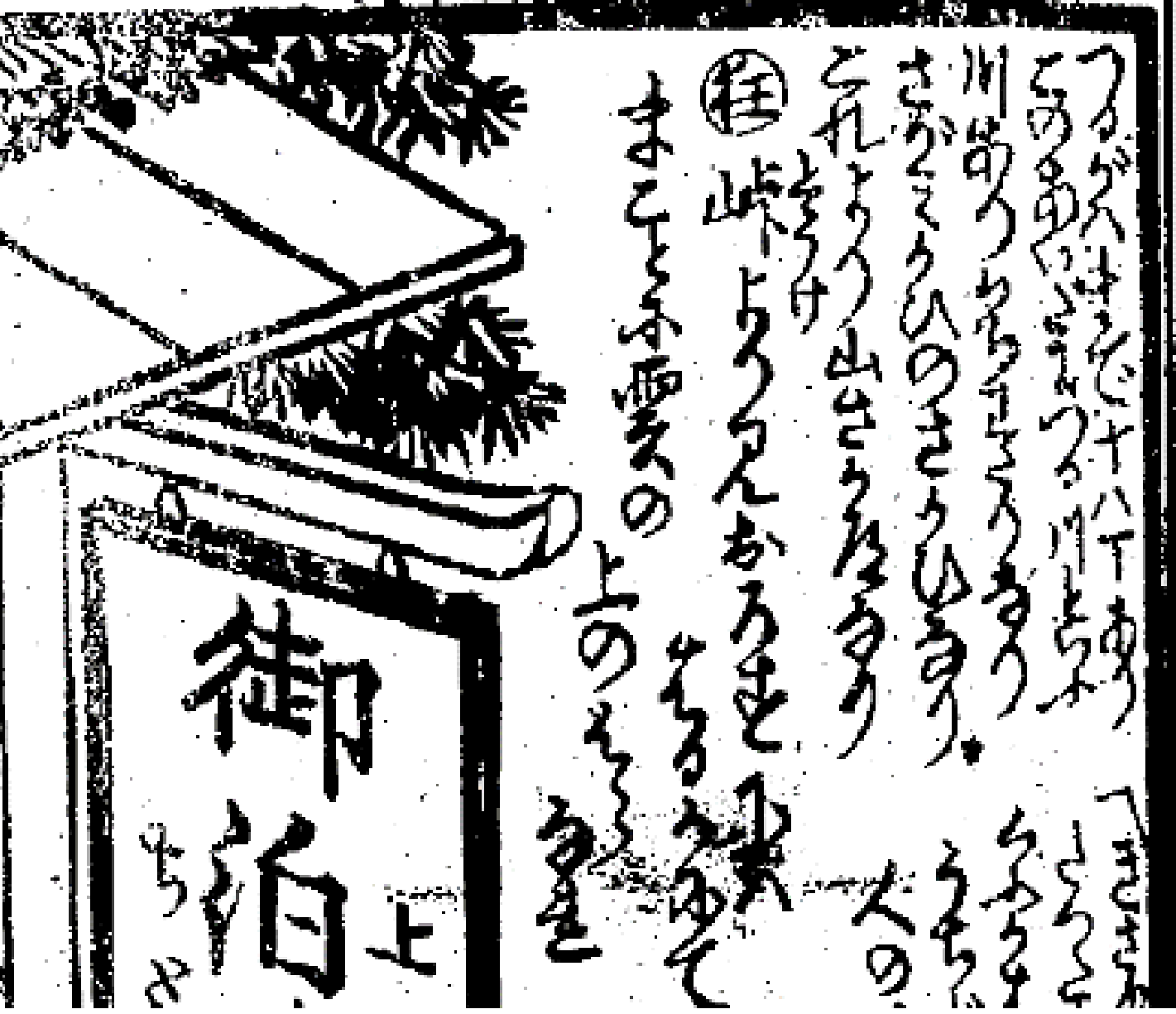
つ ☐☐☐☐☐☐☐☐☐☐
 この ☐☐☐☐☐☐☐☐☐☐
 川 ☐☐☐☐☐☐☐☐☐☐
 さ ☐☐☐☐☐☐☐☐☐☐
 これより山さ ☐☐☐☐☐☐☐☐
 どうけ ☐☐☐☐☐☐☐☐
 狂 ☐☐☐☐☐☐☐☐
 峠より見おろ ☐☐☐☐
 下 ☐☐☐☐☐☐
 て ☐☐☐☐☐☐
 川といふ

まこと ☐☐ 雲の

上の ☐☐☐☐☐☐

☐☐☐☐

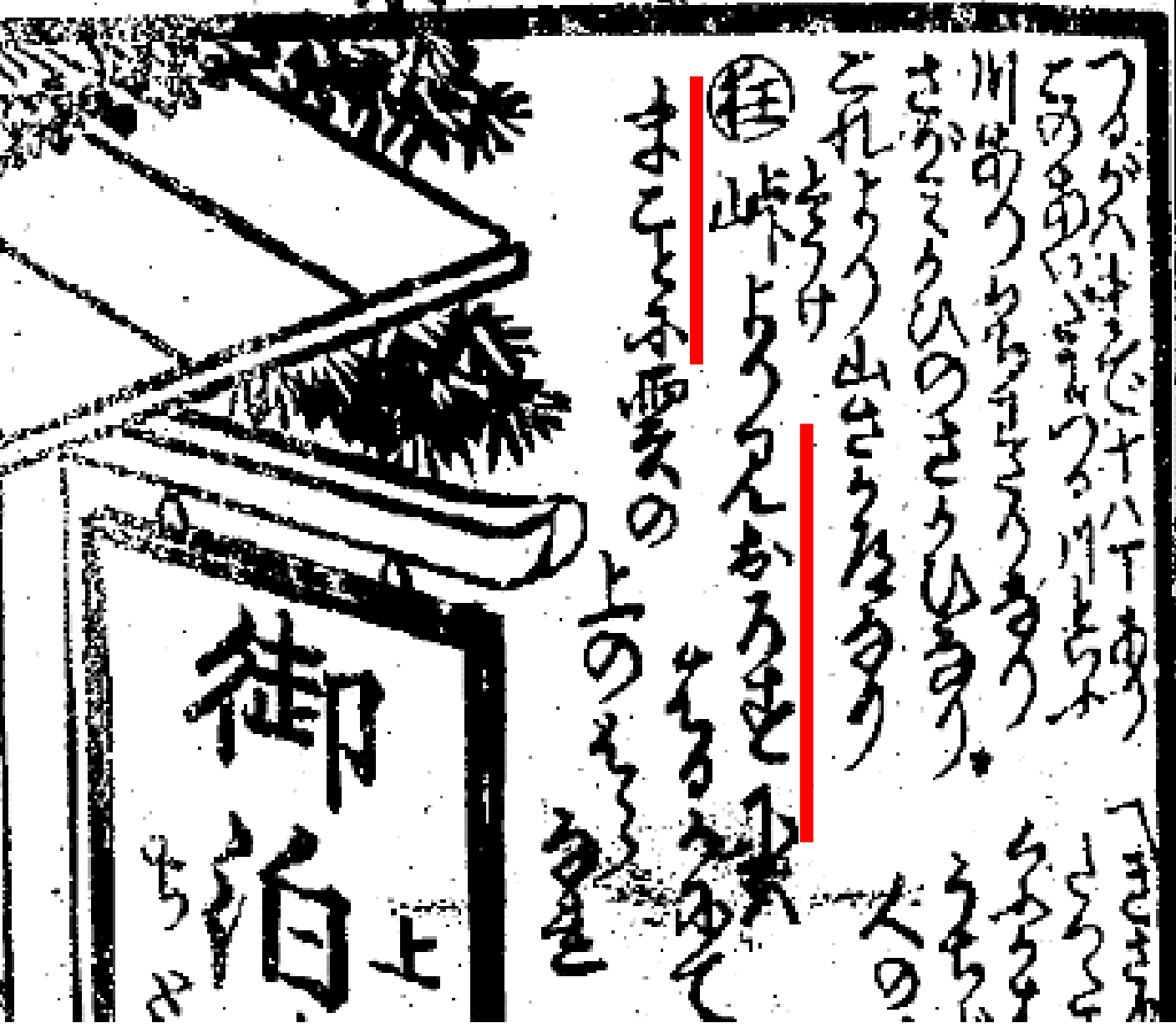
原の上



つるがへすをい十八
 川のつるがへすをい十八
 さかえくひのさくひさり
 どれより山さくひさり
 どうけ ☐☐☐☐☐☐
 狂 ☐☐☐☐☐☐
 峠より山さくひさり
 まこと ☐☐ 雲の

御泊 ☐☐☐☐☐☐
 上 ☐☐☐☐☐☐
 ち ☐☐☐☐☐☐
 ぬ ☐☐☐☐☐☐

食の上



次は2か所いっぺんにいきましょう。
「見おろ□」と「まこと□」…当てはまりそうな文字はなんでしょう。

まこと□雲の
見おろ□下□

「す」と「に」ではないか、と推測します。

くずし字辞典によっては「付録」として、かなのくずし方を並べているものがあります（児玉幸多編『くずし字用例辞典』など）。文字のあたりがつけば、そうした辞典で見るのが早いですね。

まことに雲の
見おろす下□



= 尔 → 「に」

まことに雲の

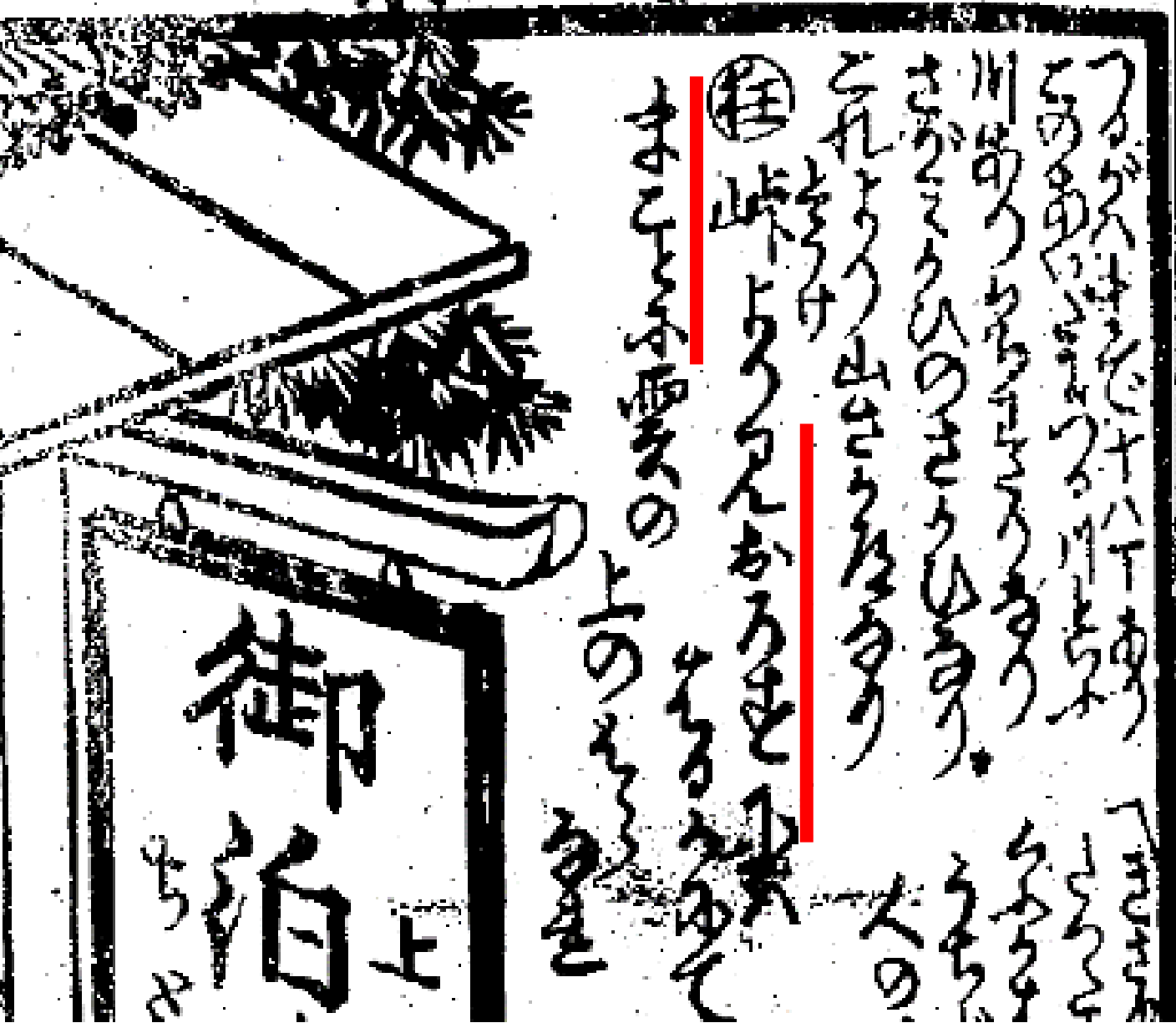
見おろす下



= 春 → 「す」

それぞれよさそうで
すね。いずれもよく使
われる文字です。辞書
で確認しておきましょ
う。

食の上



御泊

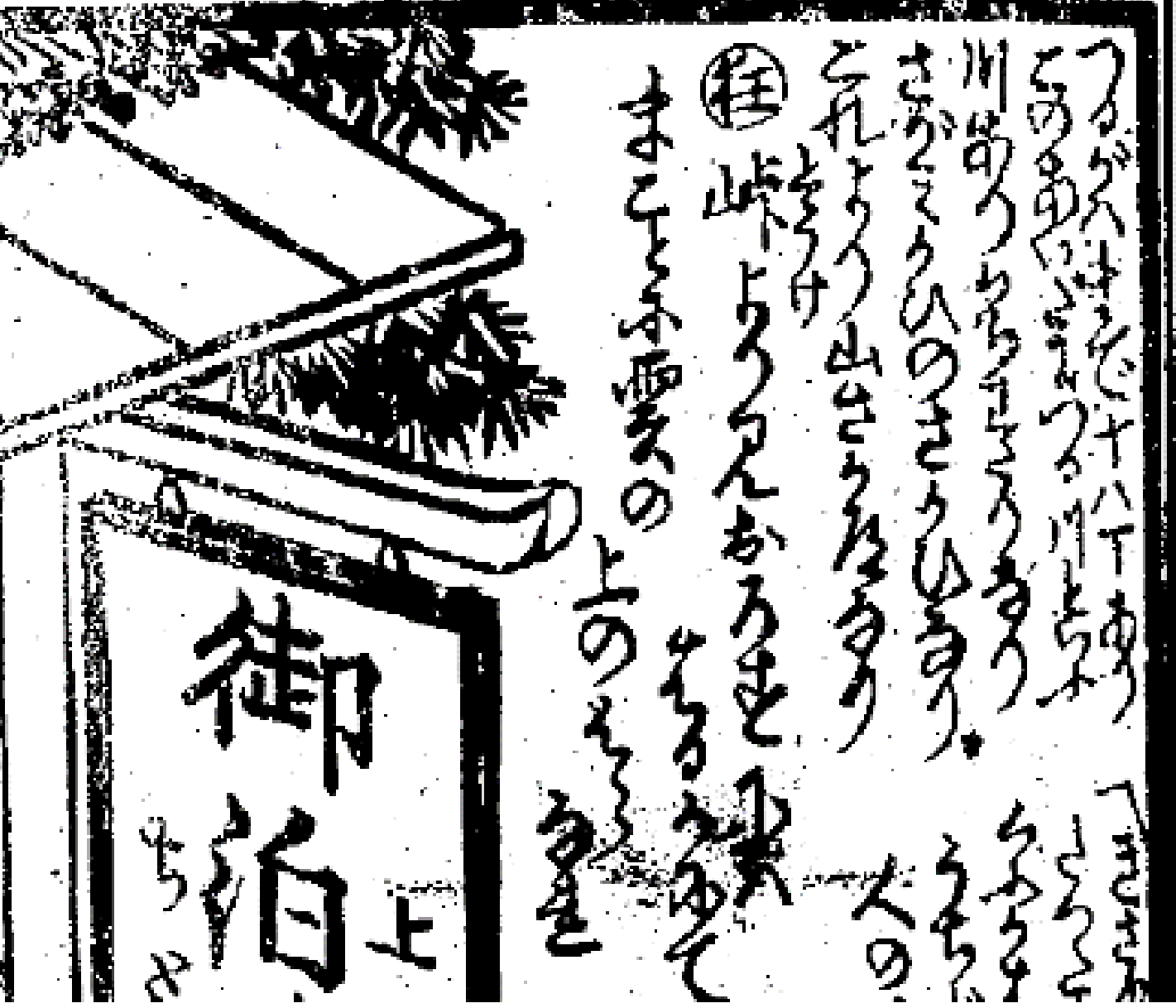
原の上

つ ☐☐☐☐☐☐☐☐☐☐
この ☐☐☐☐☐☐☐☐☐☐
川 ☐☐☐☐☐☐☐☐☐☐
さ ☐☐☐☐☐☐☐☐☐☐
これより山さ ☐☐☐☐☐☐☐☐
とうけ ☐☐☐☐☐☐☐☐
⑨ 峠より見おろす下 ☐☐☐☐☐☐
て

まことに雲の

上の ☐☐☐☐☐☐
☐☐☐☐☐☐

原の上



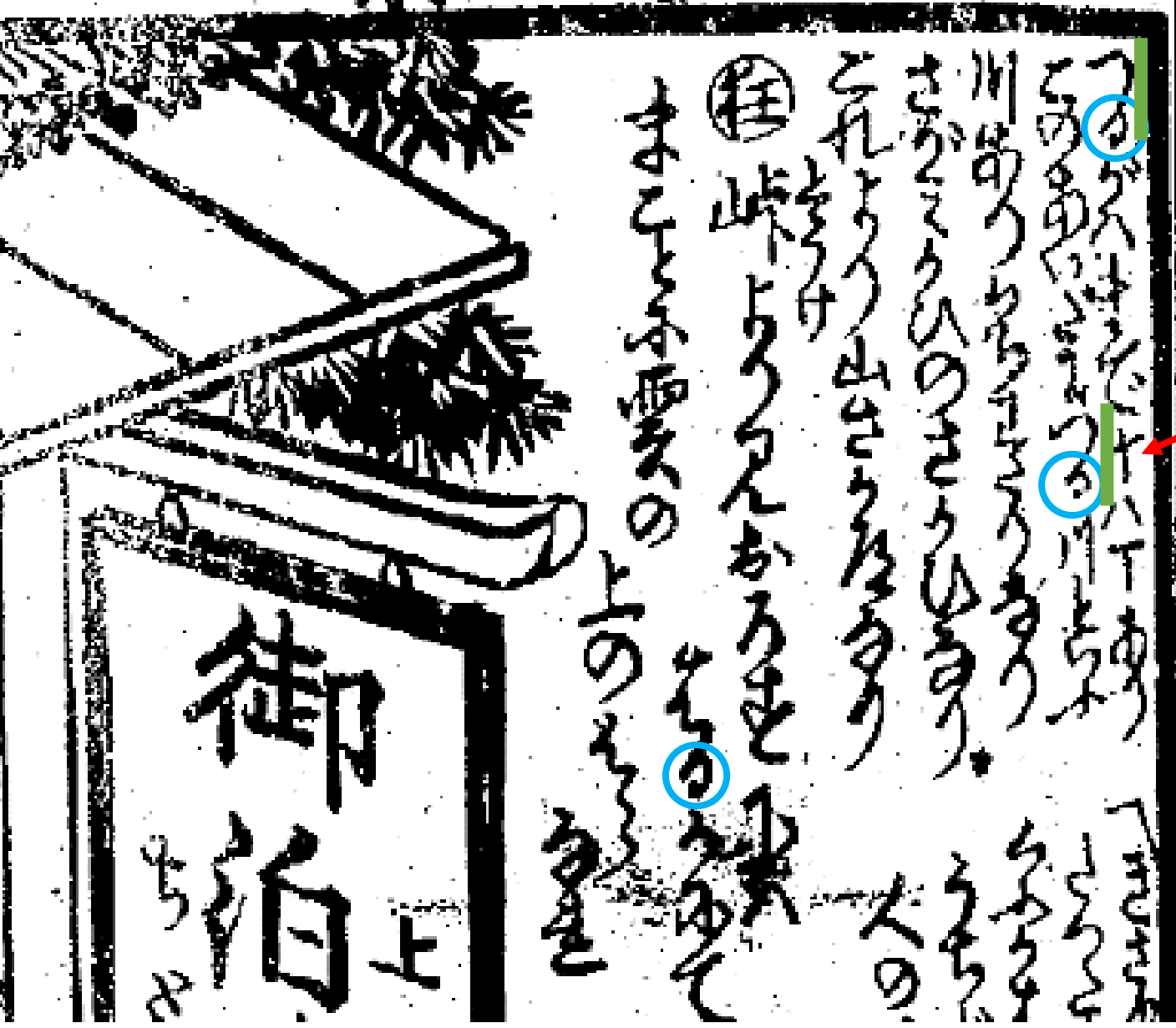
つるがへすをい十八あり
このまのいふはつるけさふ
川ありつるささるさふ
さかきくひのささるさふ
これより山ささるさふ
とうけ ☐☐☐☐☐☐
⑨ 峠より見おろす下 ☐☐☐☐☐☐
まことに雲の上のささるさふ

御泊 ☐☐☐☐☐☐
上

上
 上
 御
 伯

次は同じ文字の組み合わせを探してみましょう。単独の文字も手がかりになりますが、組み合わせの方が推定がしやすいです。

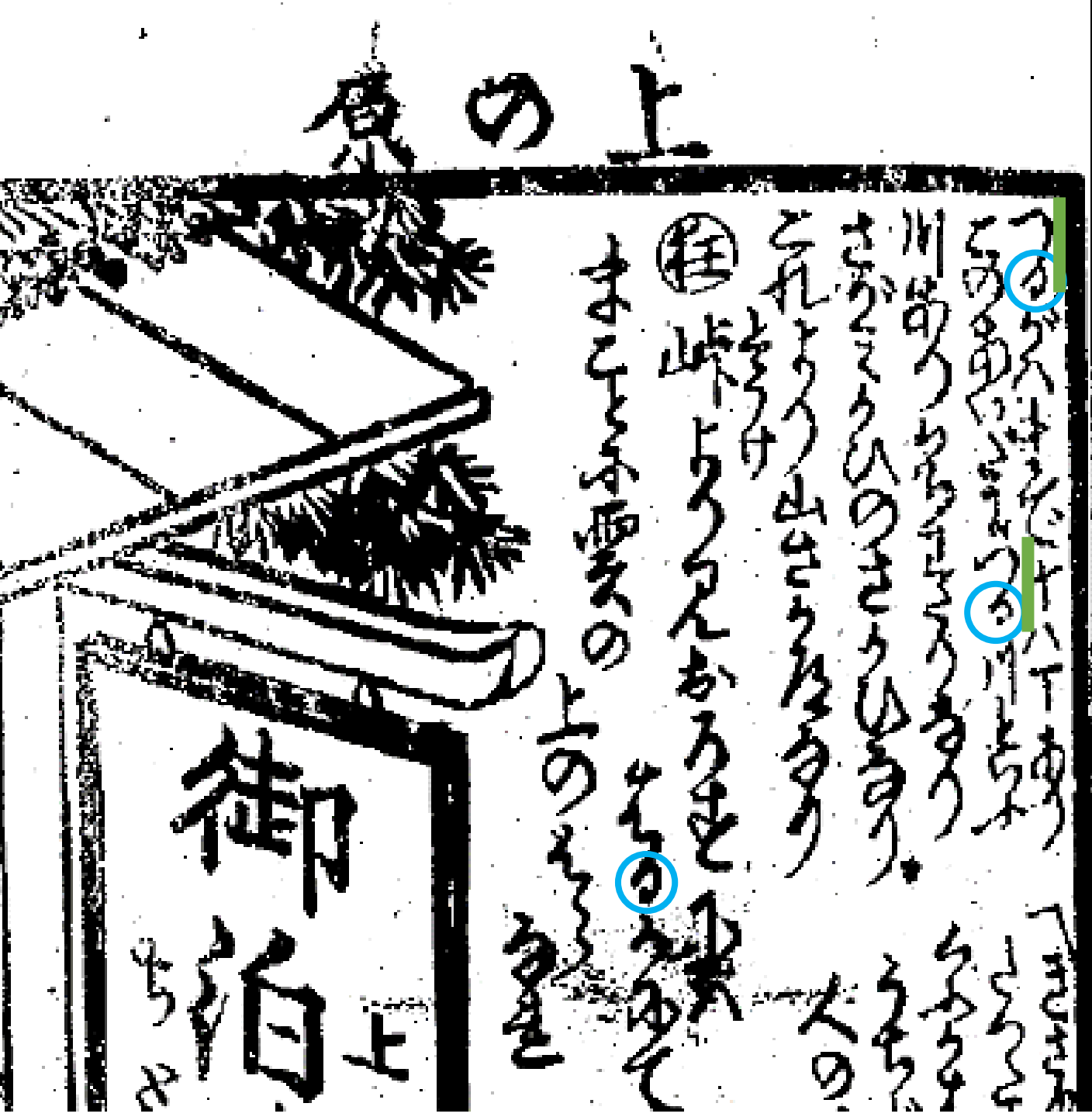
食の上



(気付くことができれば、という前提がありますが) 読めない箇所には地名が含まれていれば、大きな手掛かりになります。

ここだと「つ□川」が川の名前かもしれません。

現在の上野原市の地図を眺めると、「鶴川」という地名があり、同じ名前の川も流れています。これでいけそうですね。

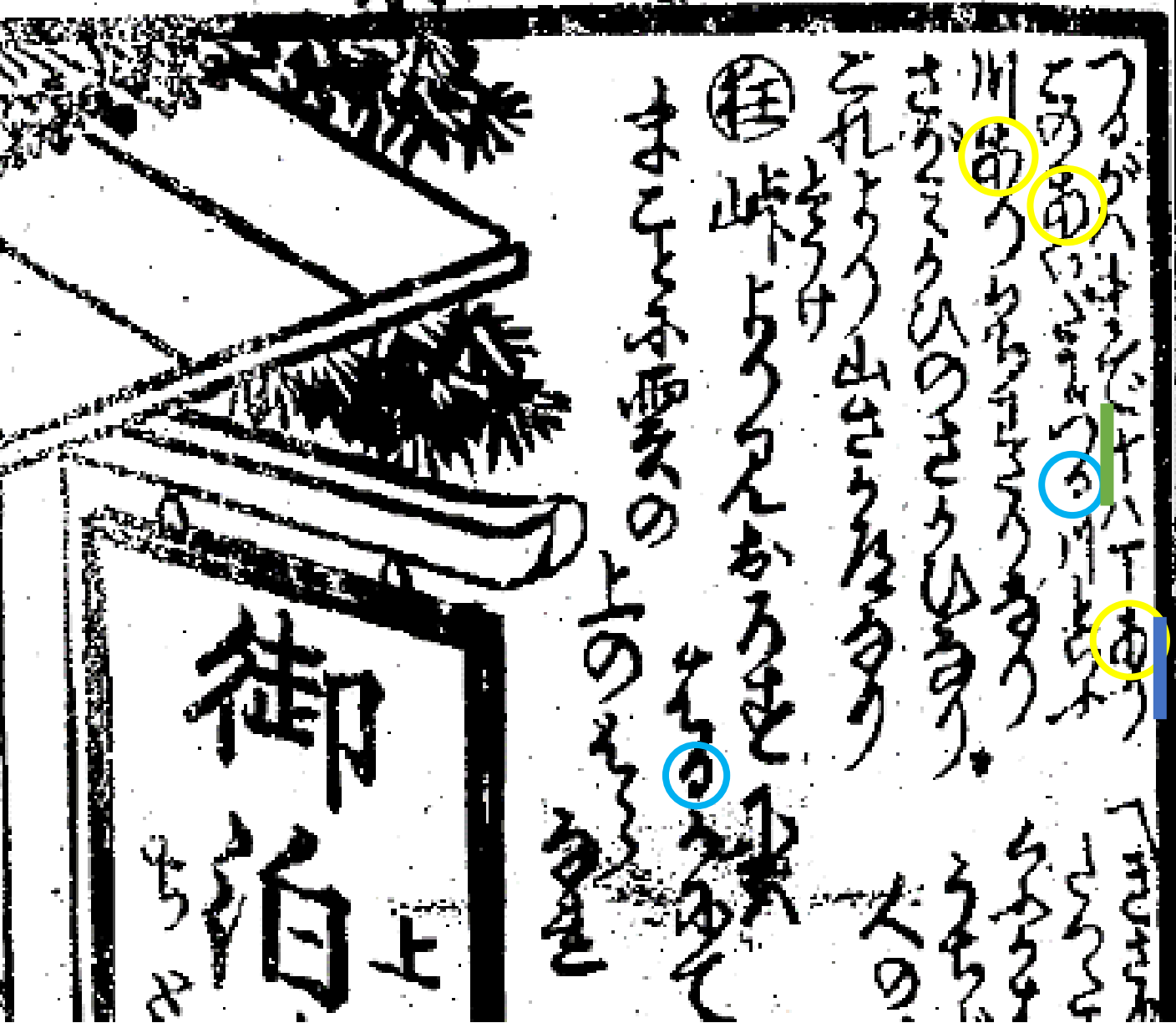


すると、冒頭の「つる
□□」も、地名の「鶴川」か
もしれません。

「る」の次の文字には濁点
が振られているので、「つる
がわ」と読むのだろう、と推
定します。

そうなると、四文字目は文
字の形からカタカナの「ハ」
であると推定できます。

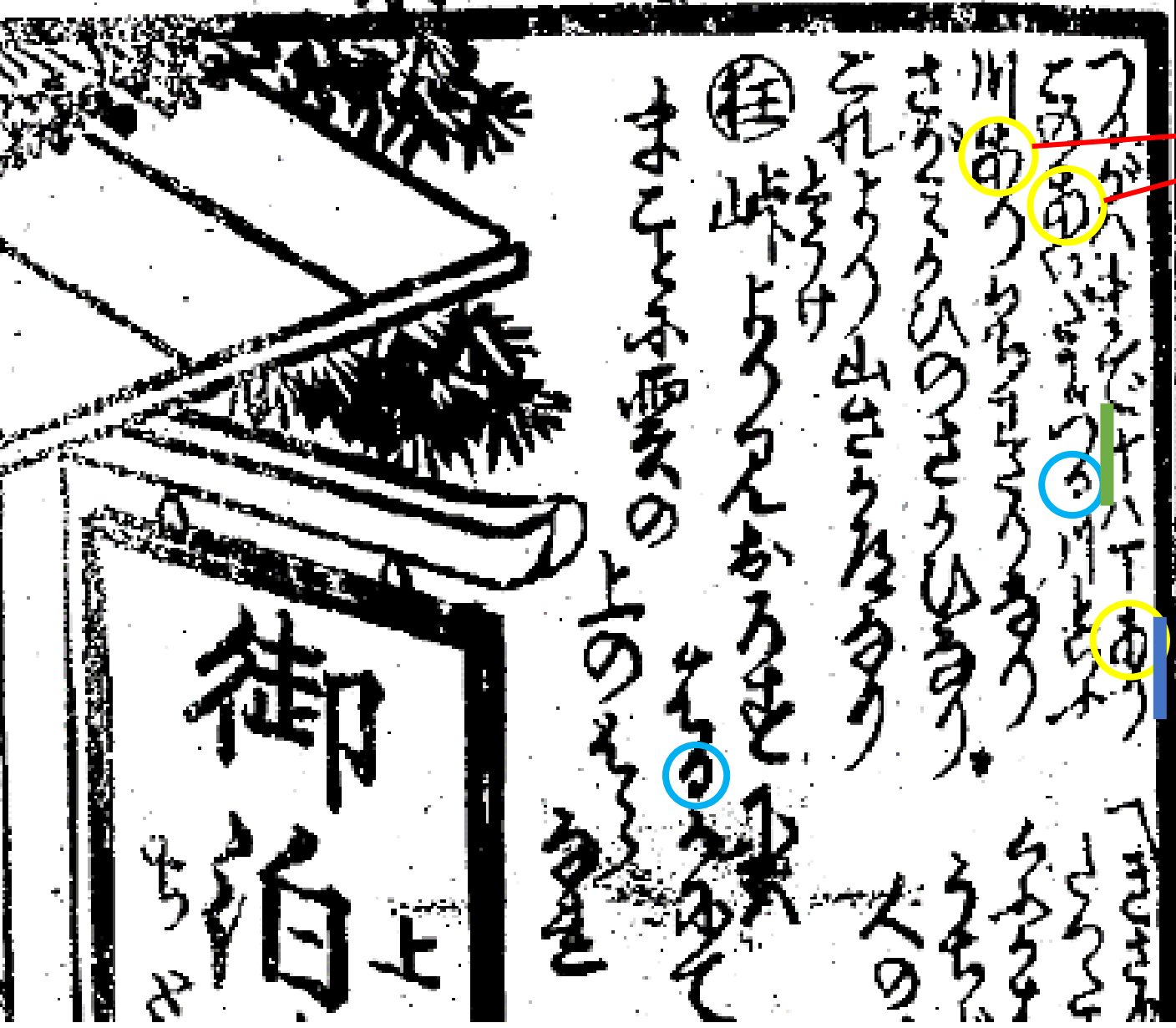
食の上



「鶴川」を手がかりに、こ
も考えてみましょう。

2行目の後半から3行目は
「つる川といふ川□り」であ
ることがわかったので、字形
を頼りに推定します。

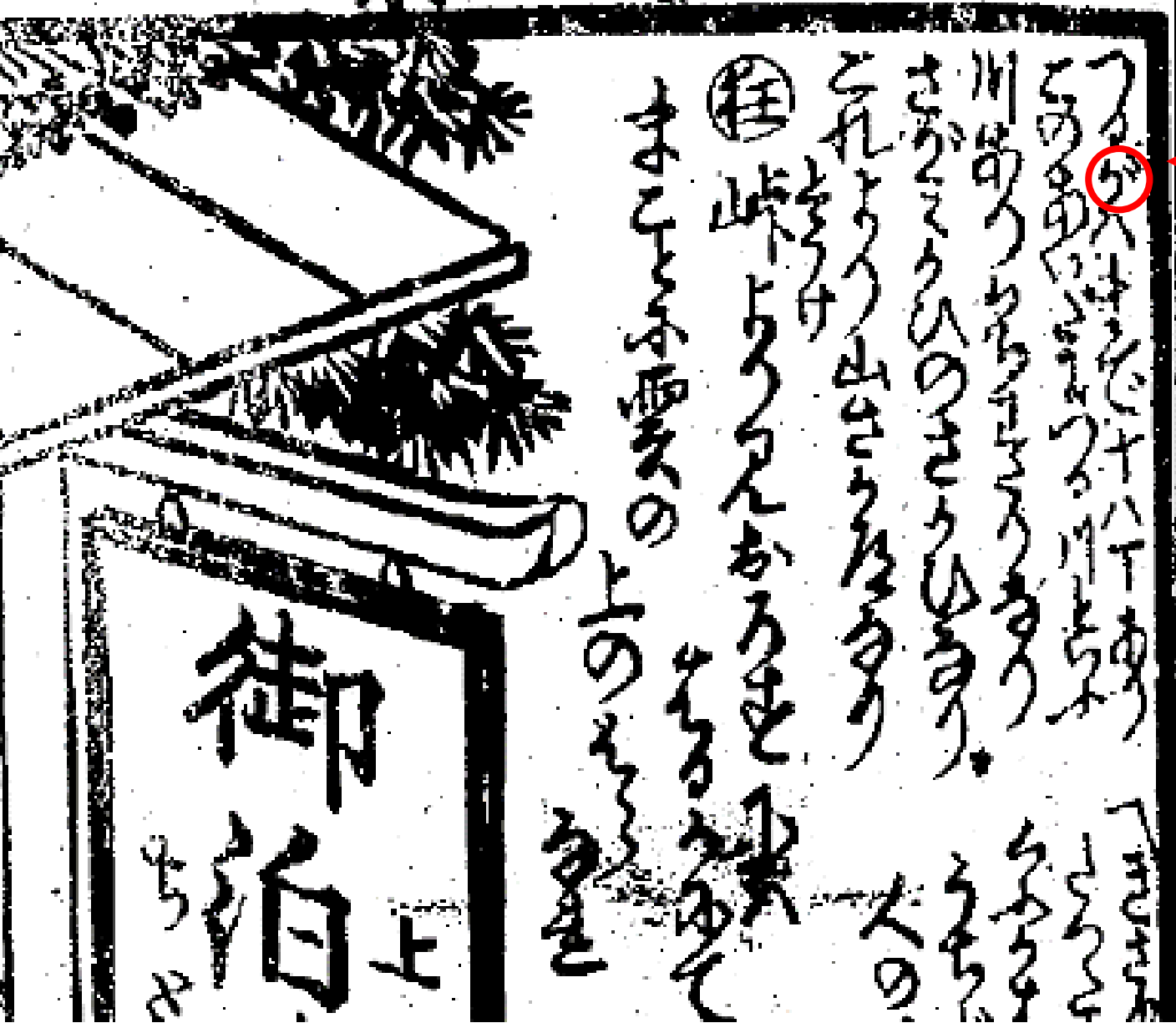
食の上



「お」のようにも見えますが、「安」のくずして「あ」でよさそうです。

「つる川といふ川あり」、意味も通りますね。

食の上

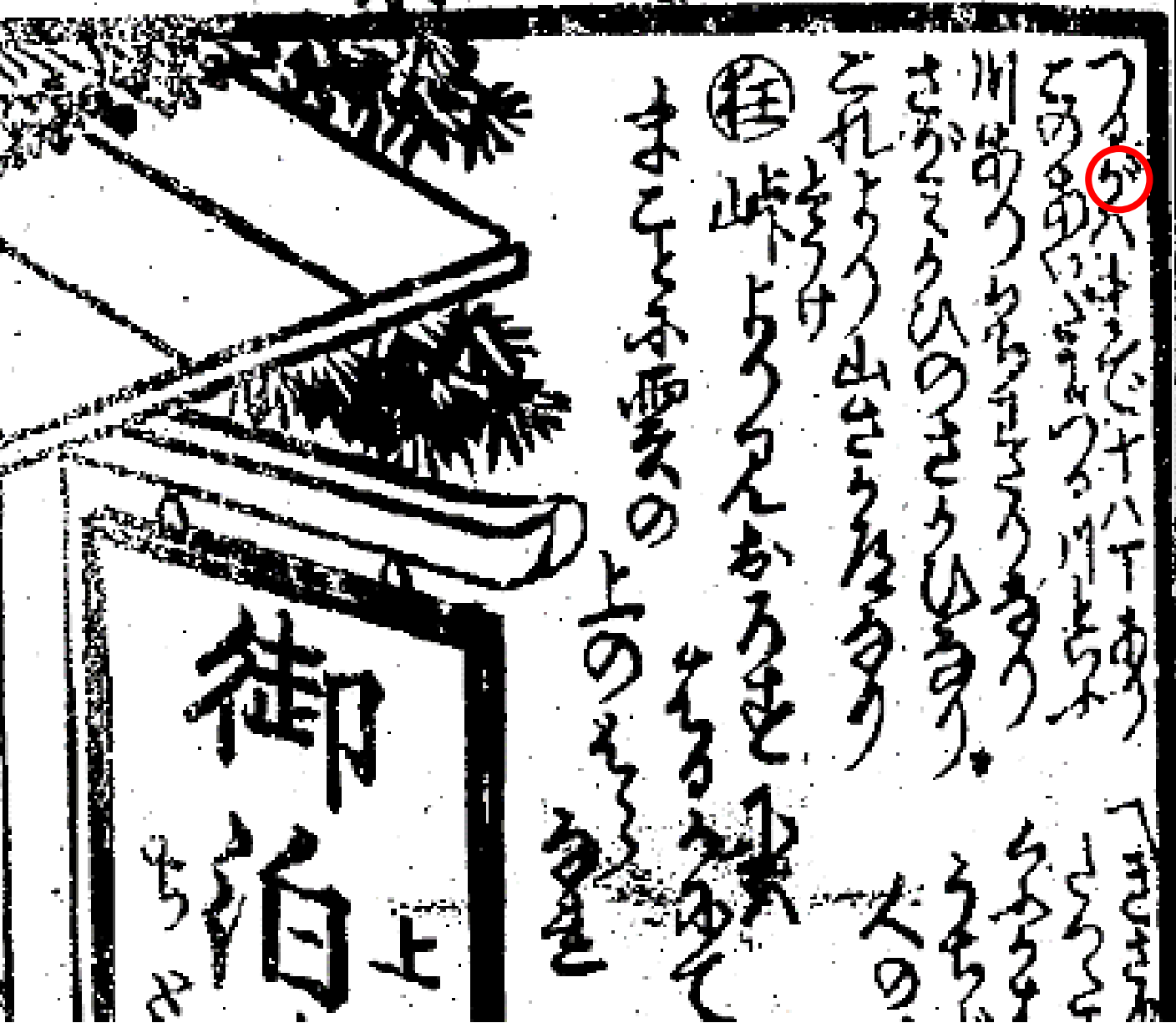


さて、「鶴川」を手がかり
として、これが「が」である
ことがわかりました。

すると、濁点がなければこ
れは「か」になります。

= 「可」

食の上



この「か（可）」は仮名文字の定番中の定番です。きちんとくずし方を確認しておきましょう。

場合によっては上に棒や点があることもあります。

食の上



これが「が」で、濁点がない
ければ「か」とすると、い
くつか解決できそうな文字が
ありますね。

これを踏まえて、ここまで
で読めた文字は次のとおりで
す。

原の上

つ
る
が
ハ
☐
で
☐
☐
☐
あ
り

このあい ☐ ☐ つる川といふ

川
あり

り

り

さ
□
□
か
□
の
さ
か
□
□
り

これより山さか道□り

とうけ

① 狂
峠より見おろす下

☐ **るか** ☐ **て**

まことに雲の

上の
☐
☐

上 的 人

つるがくはすむ十八あり
このあひまづの川もたふ
川あつちをさへうきつ
さがさくみのさうじり
これより山さくらなり

嶺（山）よりんかきとみ

未だ西風の

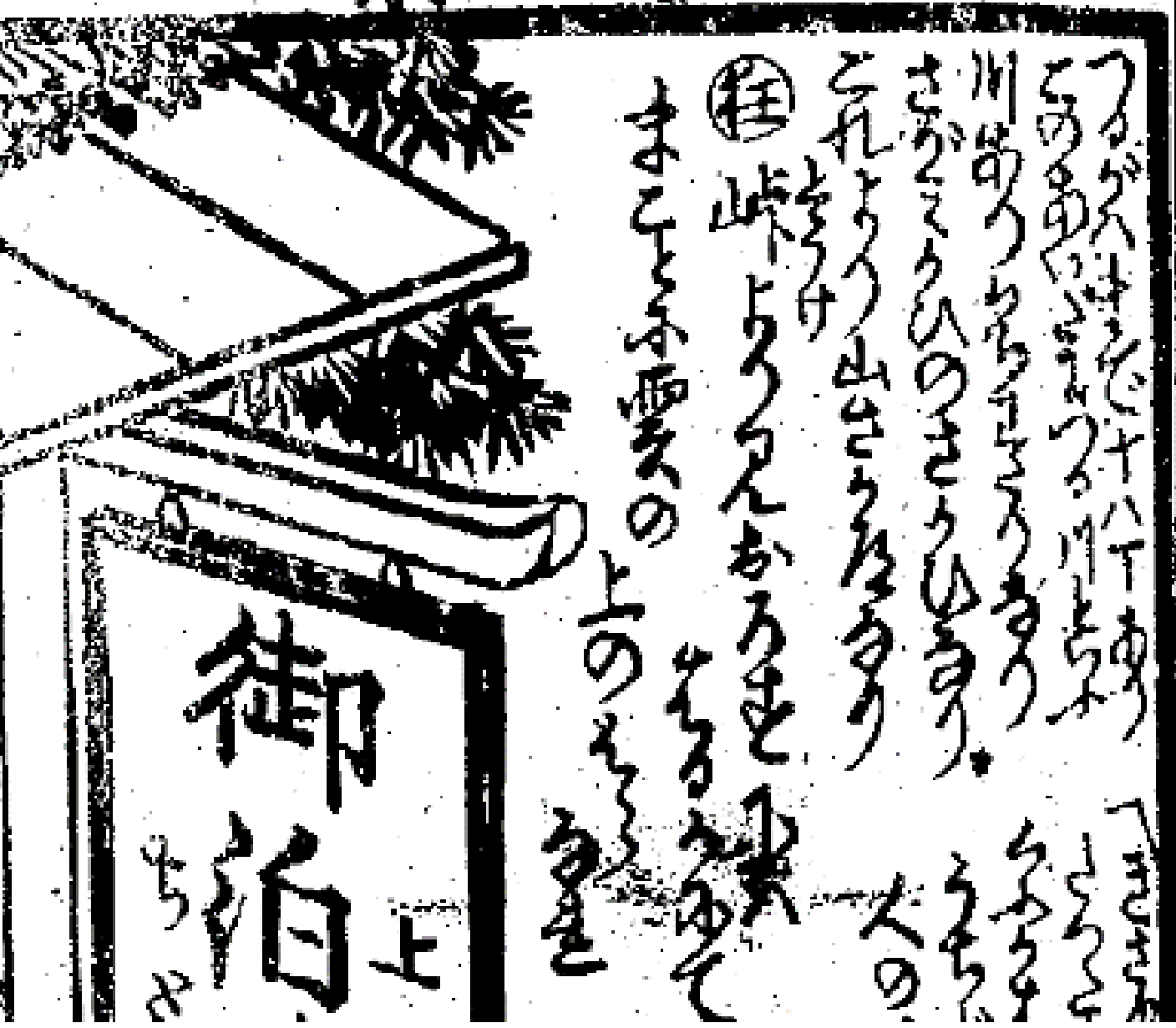
16

三

御伯

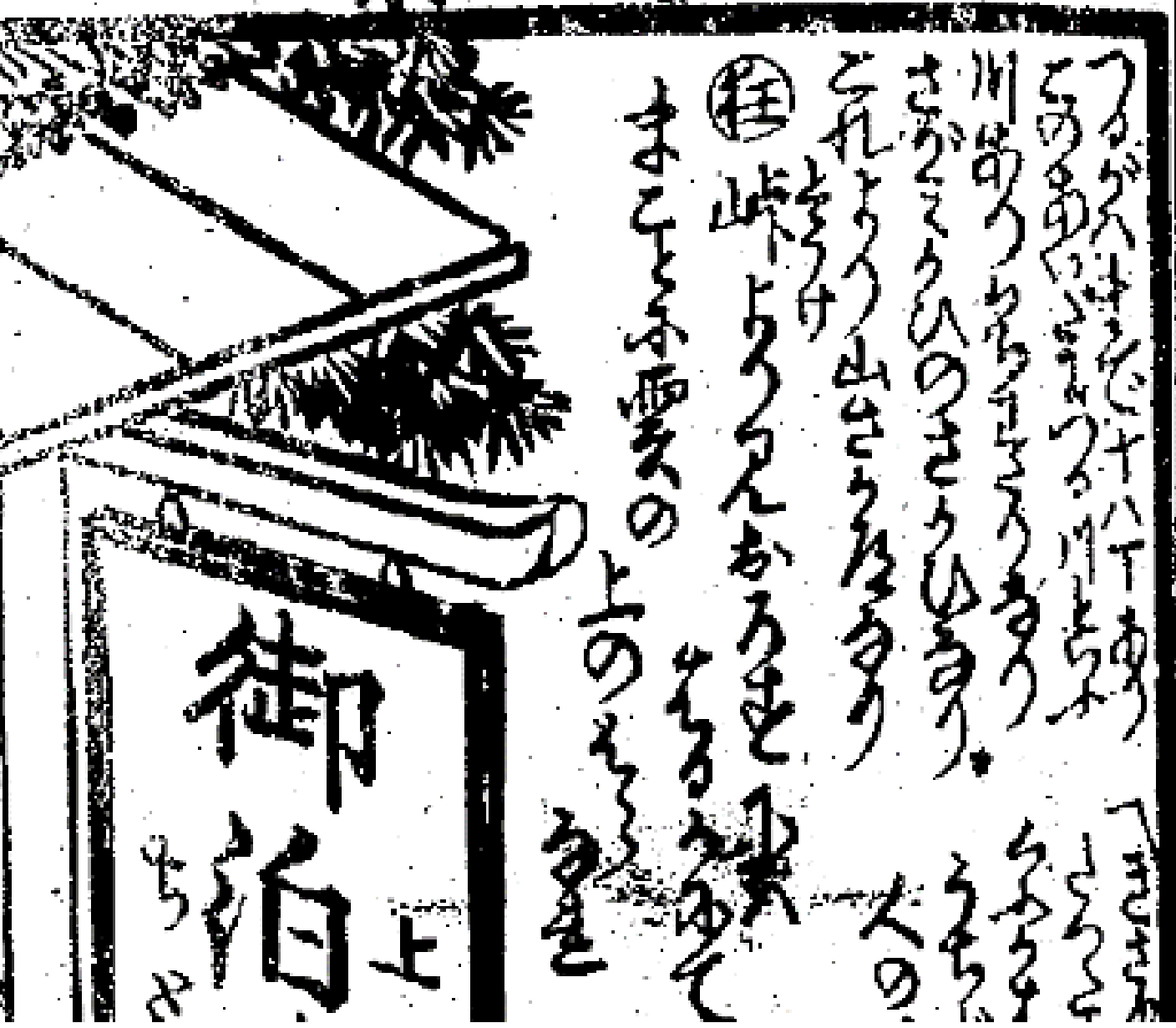


食の上

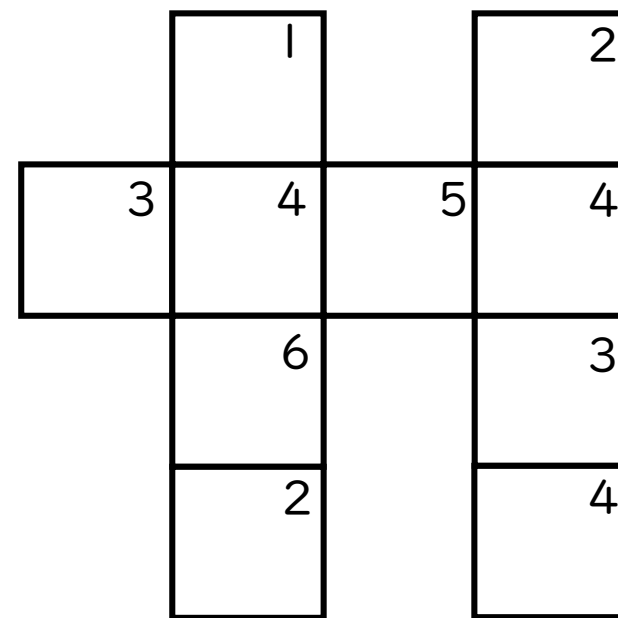


お気づきのように、こうした仮名文字の判読は、文字そのものの形も重要ですが、同じ形の文字がどう使われているかも重要です。

食の上

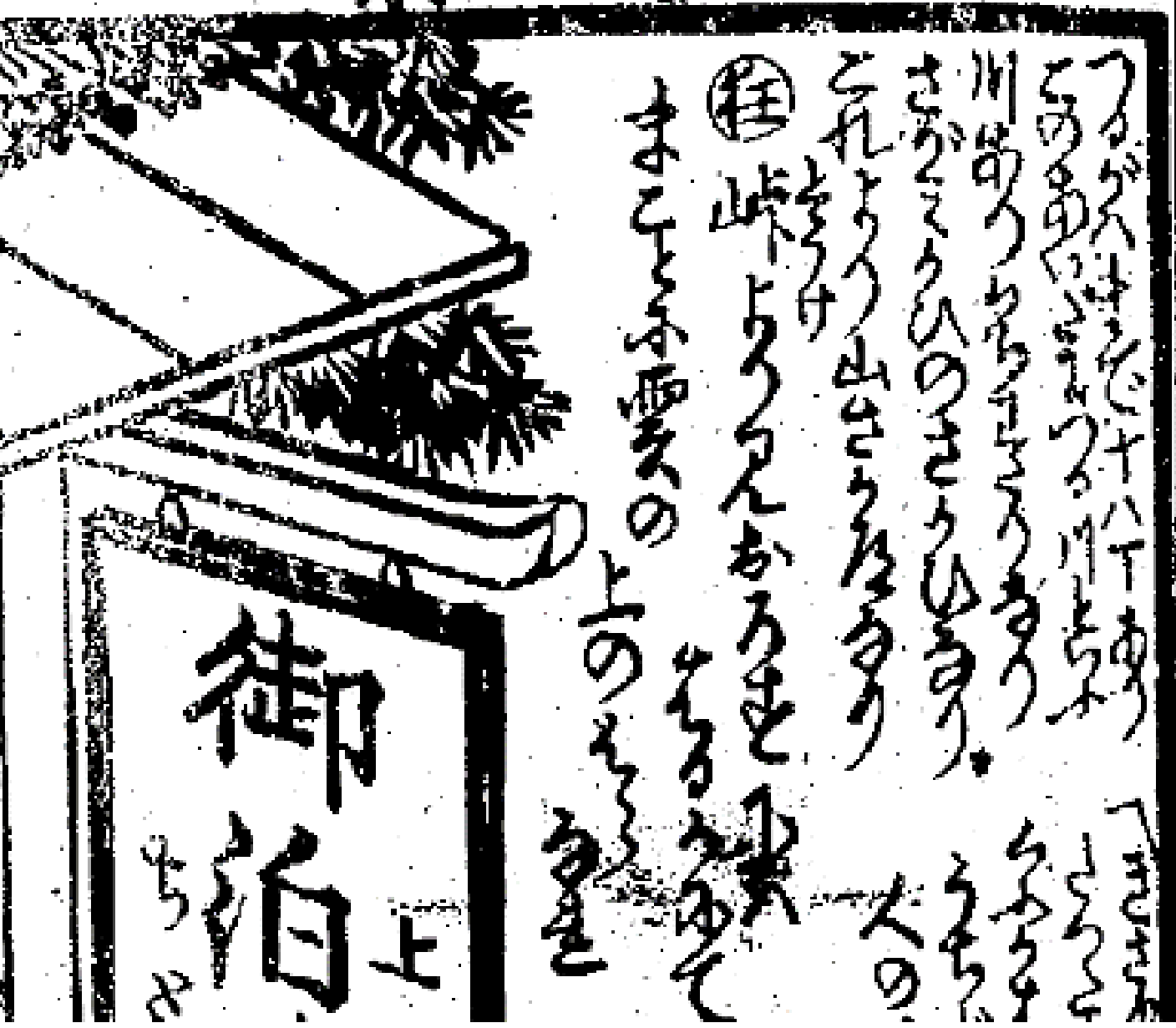


ちょうど同じ数字のマス
に同じ文字が入るクロス
ワードパズルのようですね。



縦1のカギ:横3の「軍師」、山本〇〇
縦2のカギ:横3のライバル、上杉〇〇
横3のカギ:「風林火山」で知られる甲斐の
戦国大名、武田〇〇

食の上

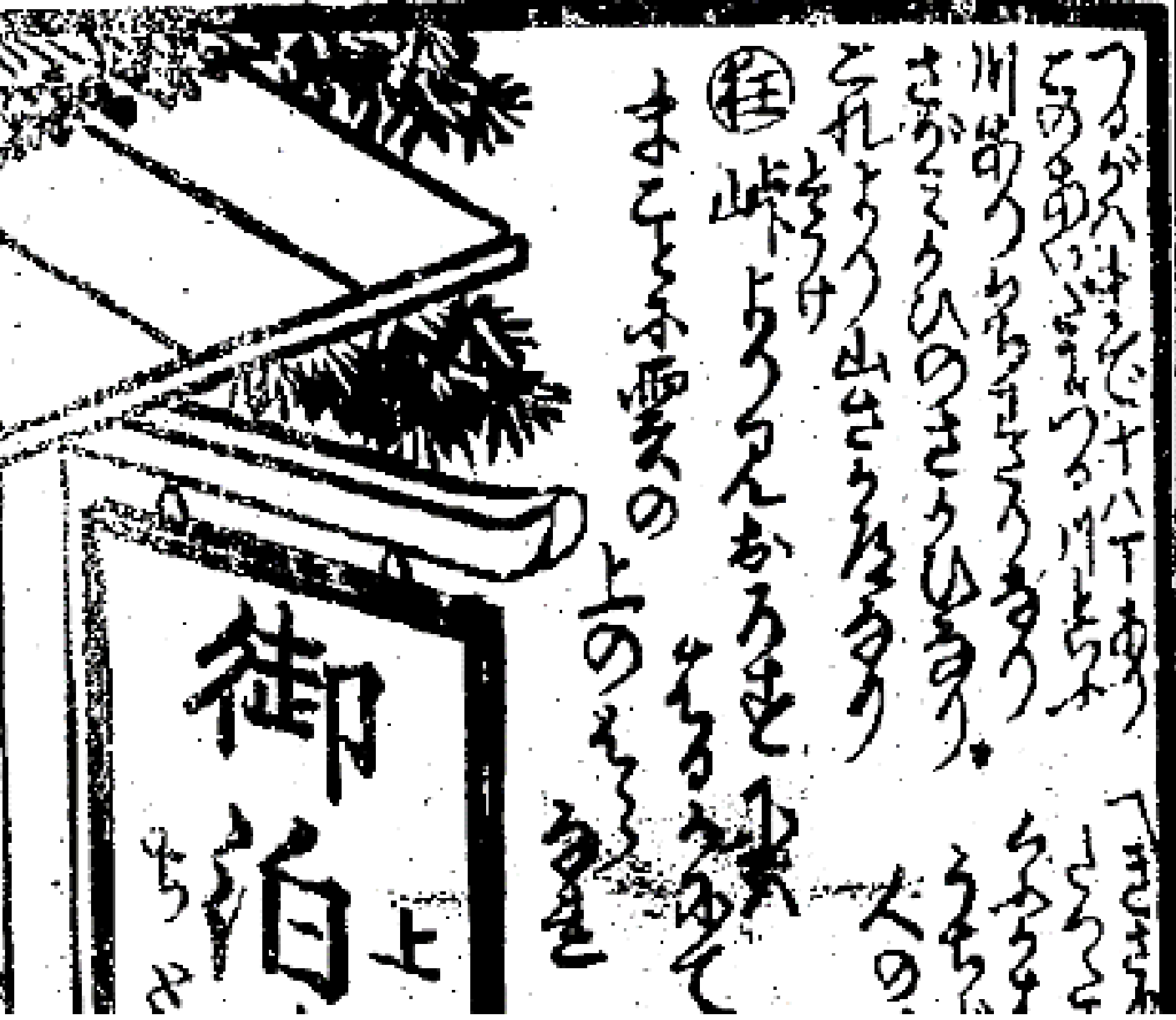


ちょうど同じ数字のマス
に同じ文字が入るクロス
ワードパズルのようですね。

	か ¹		け ²
し ³	ん ⁴	げ ⁵	ん ⁴
	す ⁶		し ³
	け ²		ん ⁴

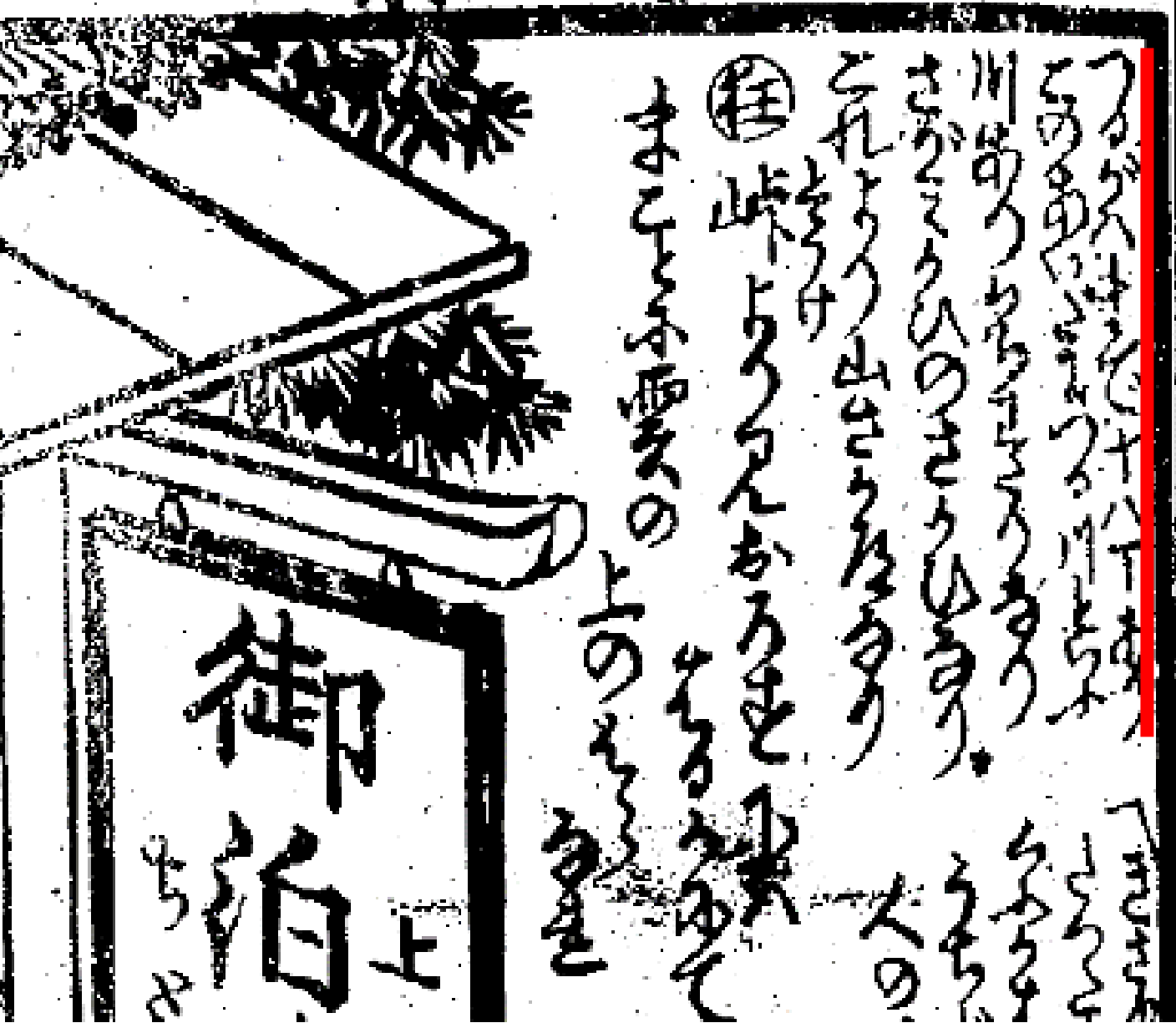
縦1のカギ:横3の「軍師」、山本〇〇
縦2のカギ:横3のライバル、上杉〇〇
横3のカギ:「風林火山」で知られる甲斐の
戦国大名、武田〇〇

食の上



さて、だいぶ空欄が埋
まってきました。そろそろ
最初から順に推定していき
ましょう。

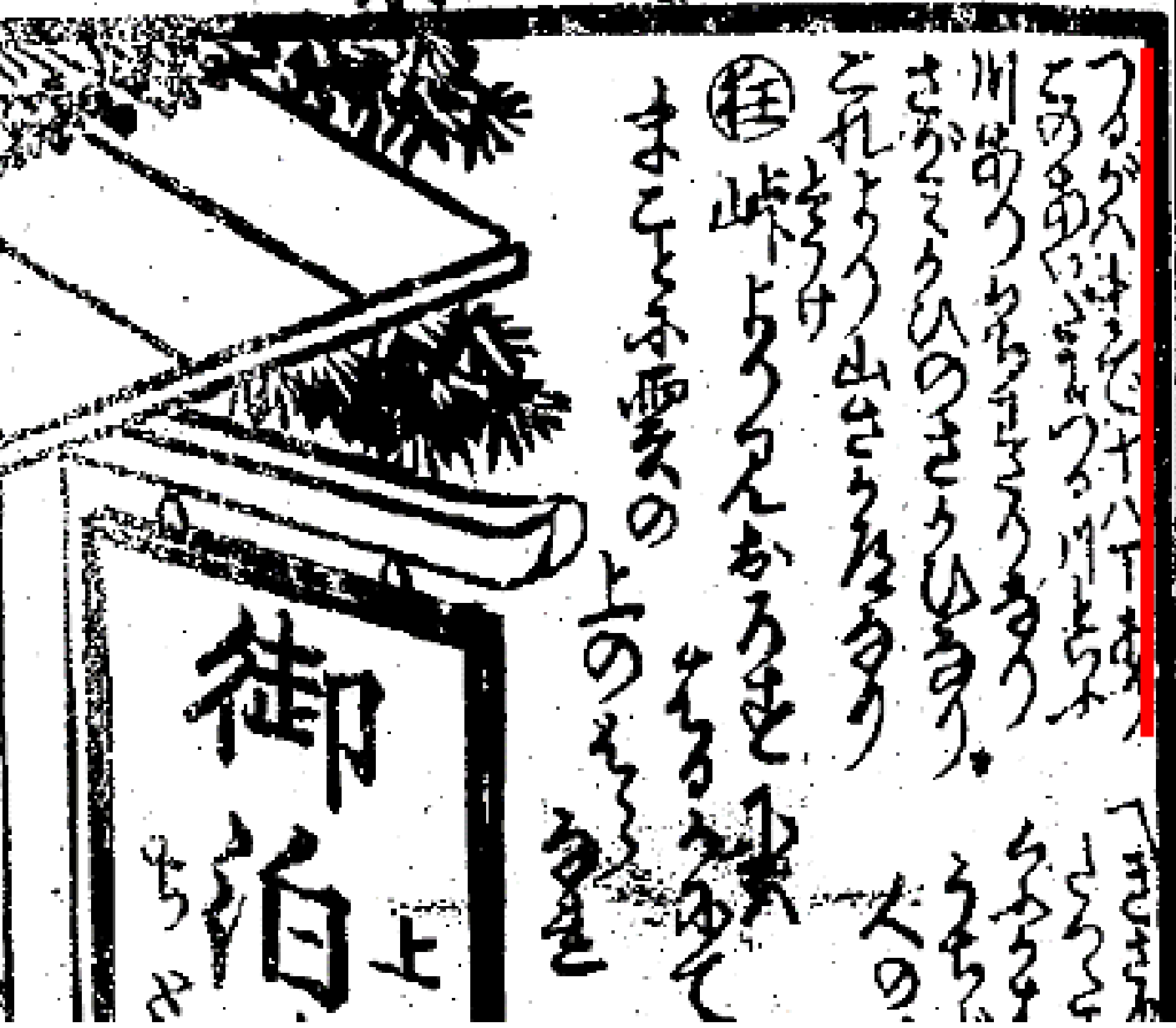
上野



つるがハ ☐ で ☐ ☐ ☐ あり

1行目、手がかりは
これが上野原について
書かれたものであることと、
鶴川が地名である
ことです。

食の上



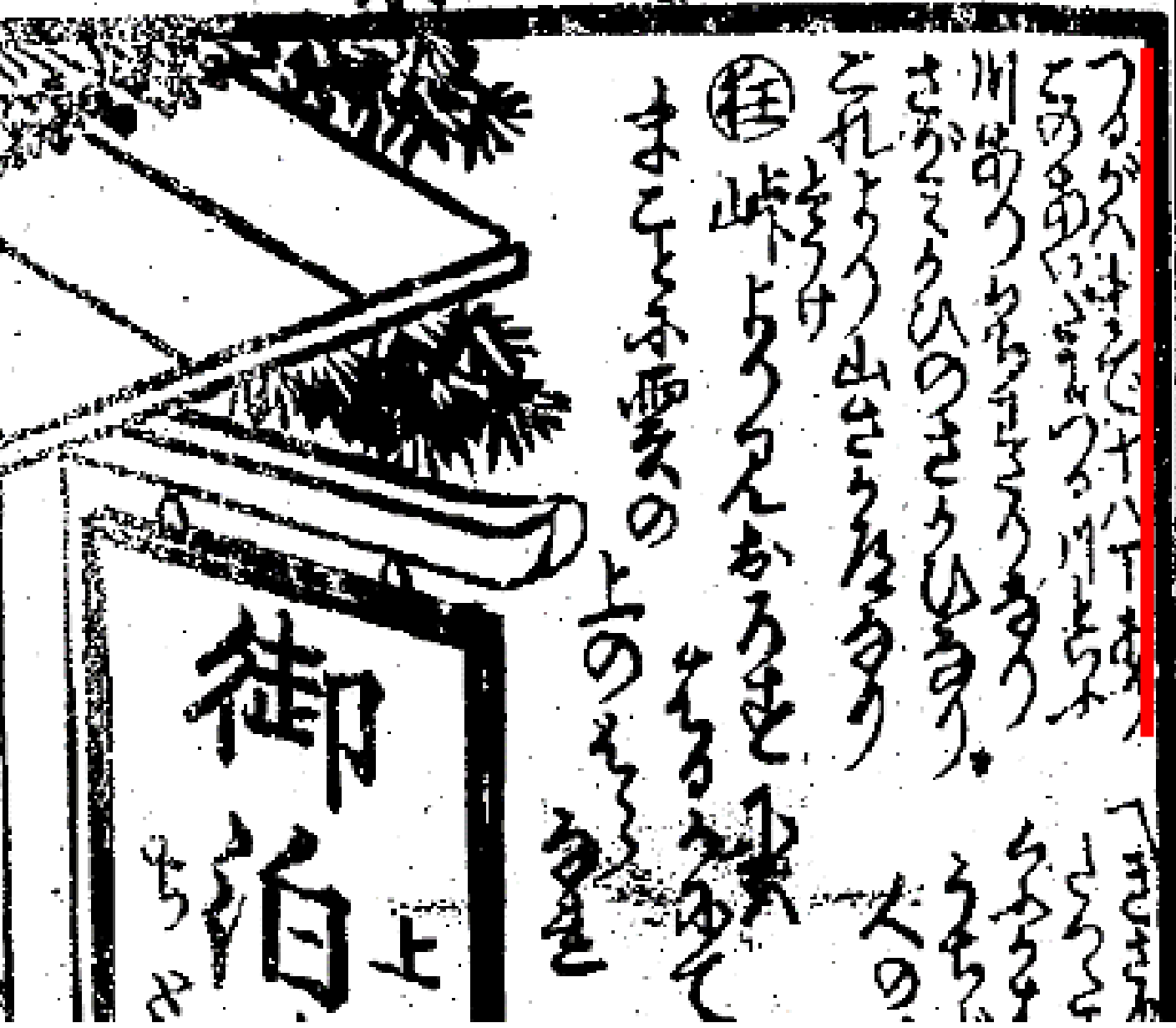
つるがハ□で十八□あり
さかきくひのさうひきり
これより山さうななり
まことふ雲の上のさう
まことふ雲の上のさう

上野原も鶴川も甲州
街道の宿場町です。間
の距離は2キロほど。

するとこれが「十
八」という宿場間の距
離を示す数字ではない
かと考えられます。

つるがハ□で十八□あり

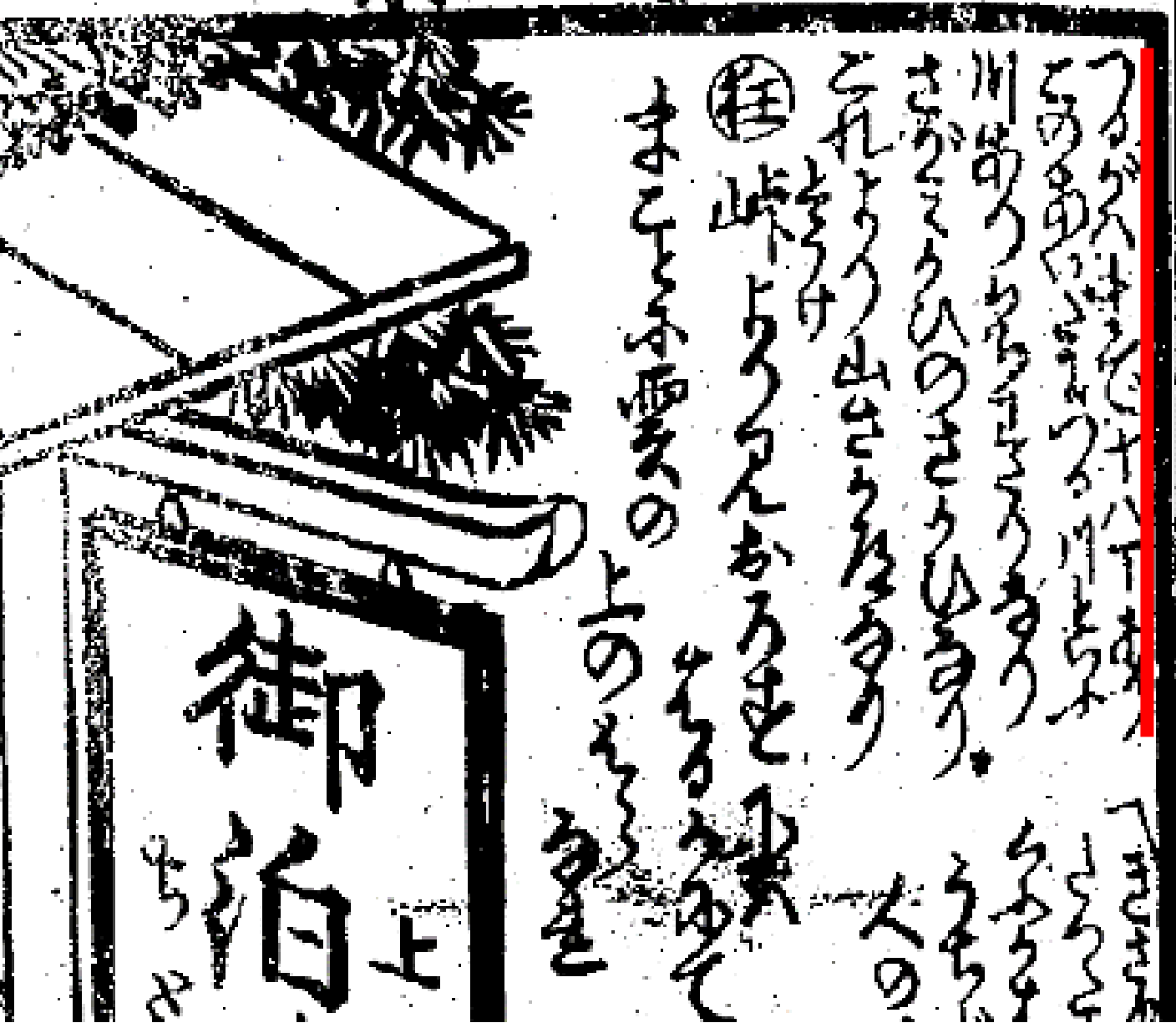
食の上



つるがハ□で十八町あり

江戸時代の距離・長さの単位は「里」「町」「間」などがありますが、十八「？」がおおよそ2キロであることから、「町」ではないかと推定します。
(1町=約109m)

食の上

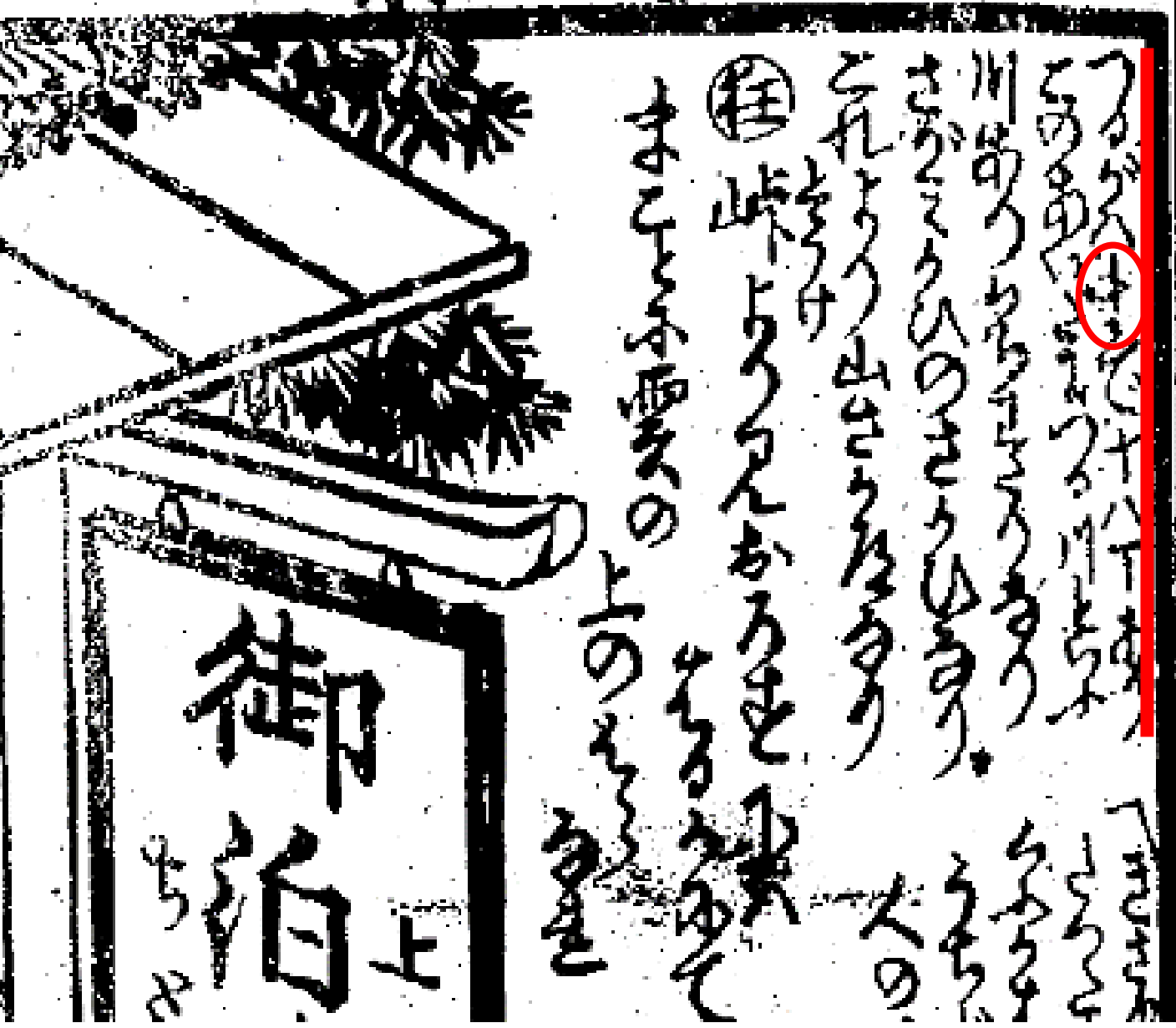


つるがハ□で十八丁あり

ただし、文字にはへんの「田」がなさそうです。ここでは「ちょう」という同じ読みの「丁」に置き換えられていると判断します。

「町」＝「丁」の置き換えはよくあります。

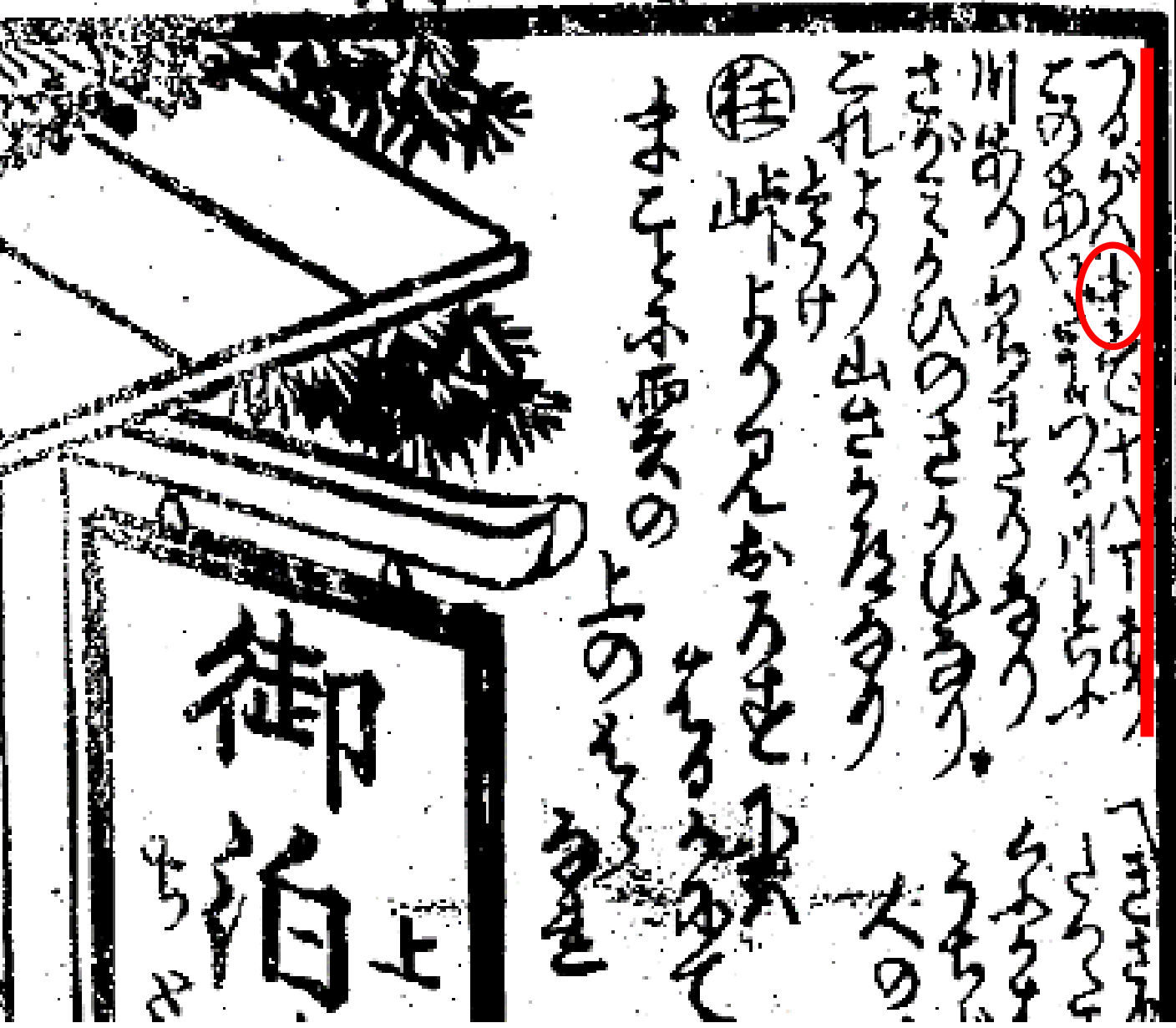
食の上



つるがハ ☐ で十八丁あり

これは仮名文字では
定番の文字です。くず
し方でぜひ判読してほ
しいところですが、こ
こでは前後からもしけ
そうですね。

食の上



つるがハ**ま**で十八丁あり

「ま」で大丈夫でしょう。「末」のくずしです。

「ま」には他に「萬」、「万」、「満」がくずれたものも当てられます。形を確認しておきましょう。

食の上



このあい ☐ ☐ つる川といふ

2行目、だいぶ読めてますね。残った2文字はいずれも現代のひらがなと大きく異なっており、あまり見慣れないので読みづらいかもしれません。慣れてしまえば大丈夫。

上 の 人


 御泊
 上

こちらは「た」に濁点がついて「だ」。

「多」のくずして、下の
のような形もよく出て
きます。

このあいだ□つる川といふ

食の上



このあいだ
つる川といふ

このあいだ
つる川といふ

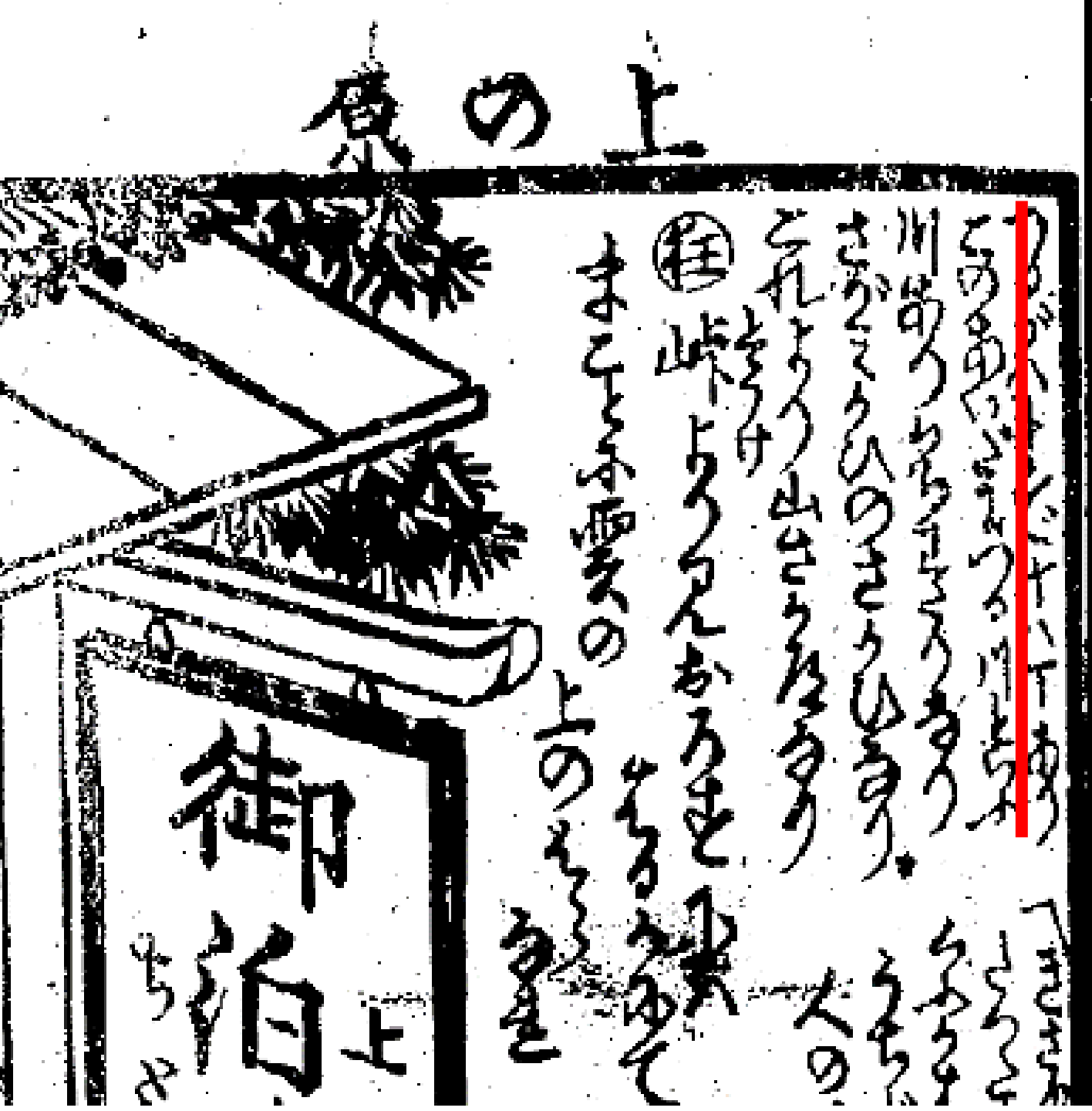
「た」は「太」、
「多」のほかに「堂」
や「當（当）」もよく
使われます。形を確認
しておきましょう。

= 「堂」

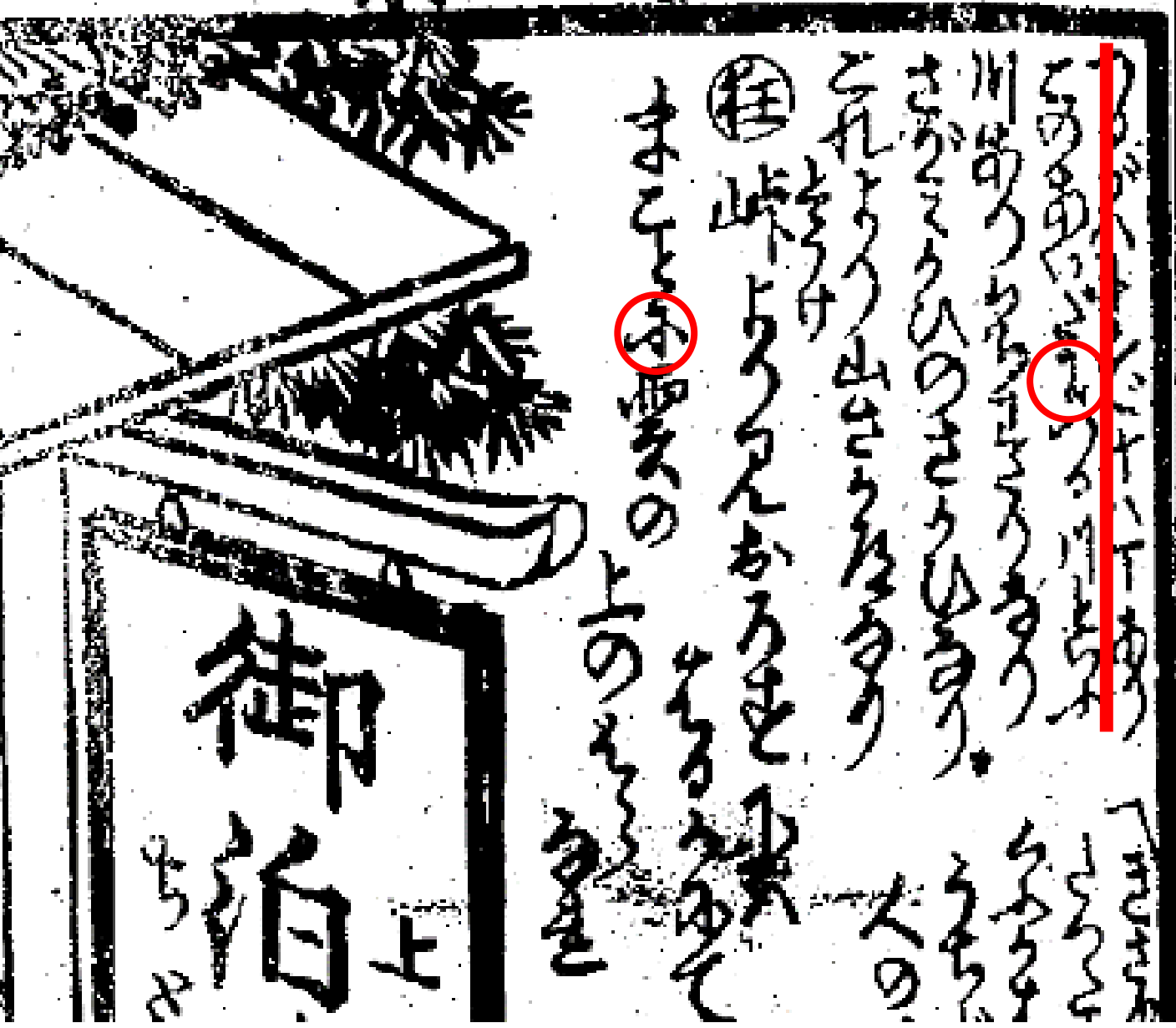
= 「當」

ここまで読めれば□
 に当てはまる文字の候
 補はそんなに多くはな
 いですね。あとはその
 文字が正しいかどうか、
 辞書と資料を見比べて
 確認するだけです。

このあいだ□つる川といふ



食の上

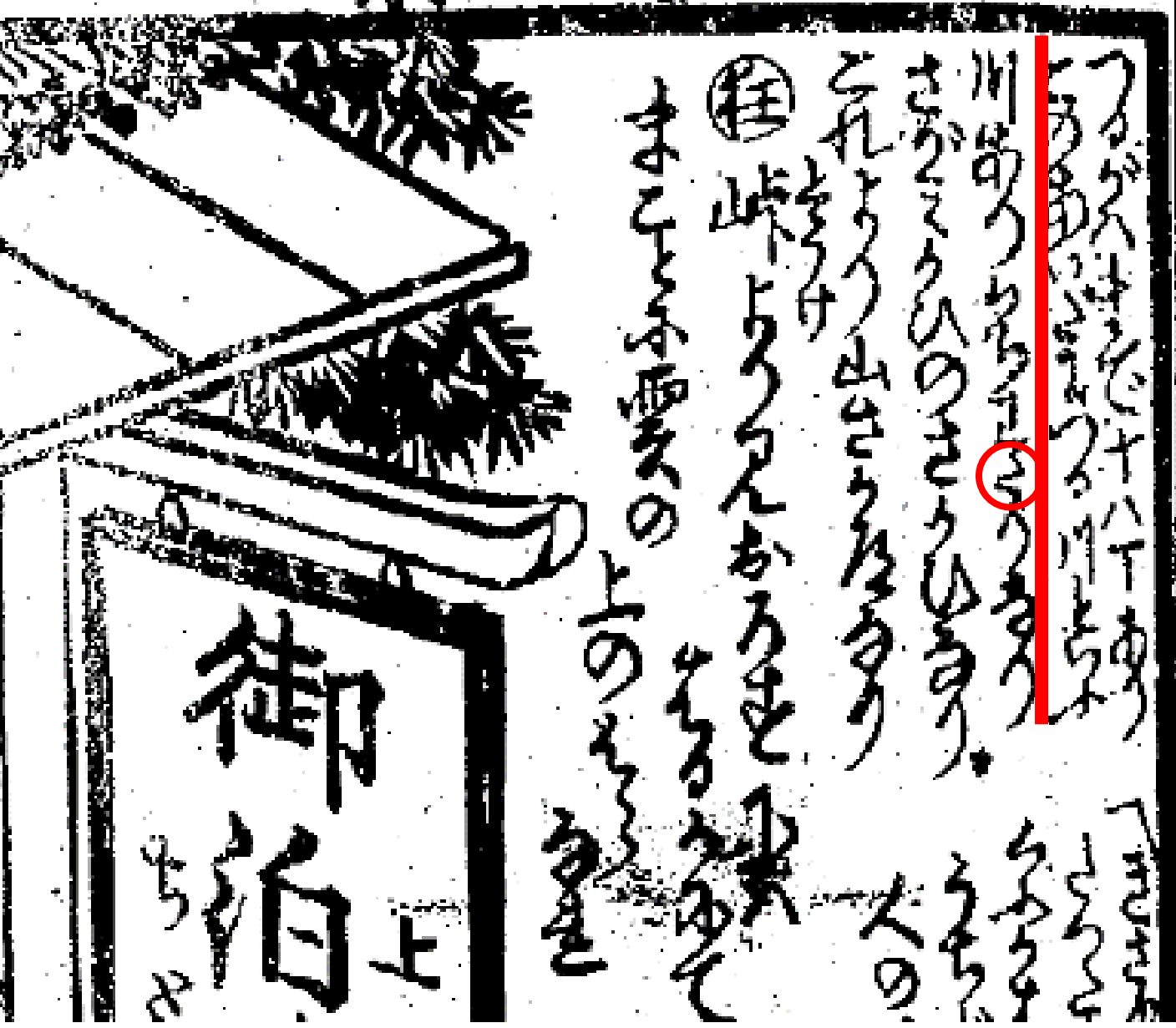


このあいだに つる川といふ

「に」でいけるでしょう。先ほどみた「まことに」の「に」と同じ「尔」のくずしです。

「に」は他に「丹」や「耳」のくずしもよく使われます。形を確認しておきましょう。

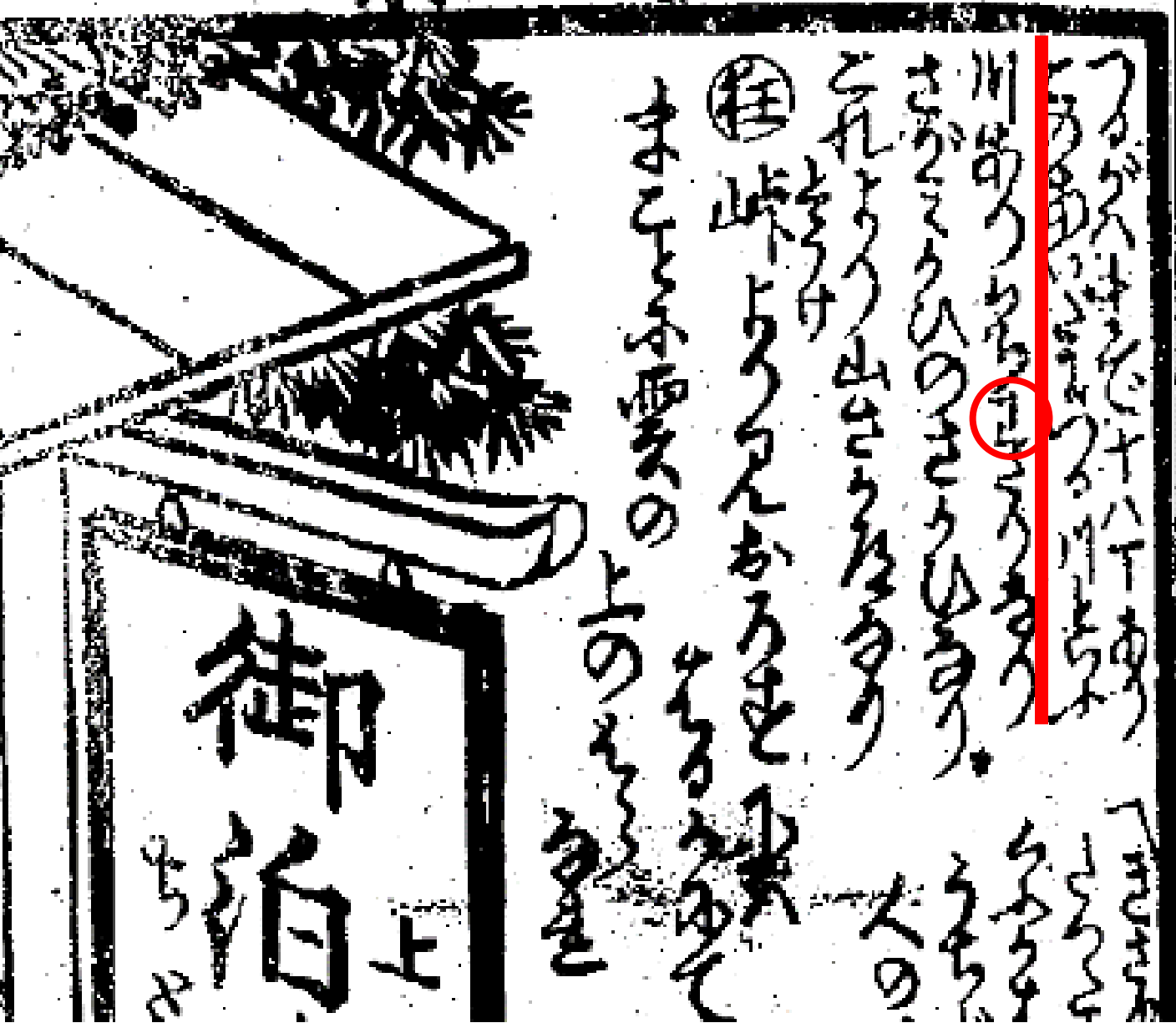
食の上



3行目、さっそく
「た」が入りそうです
ね。

川あり
☐
☐
☐
たり
☐
り

食の上

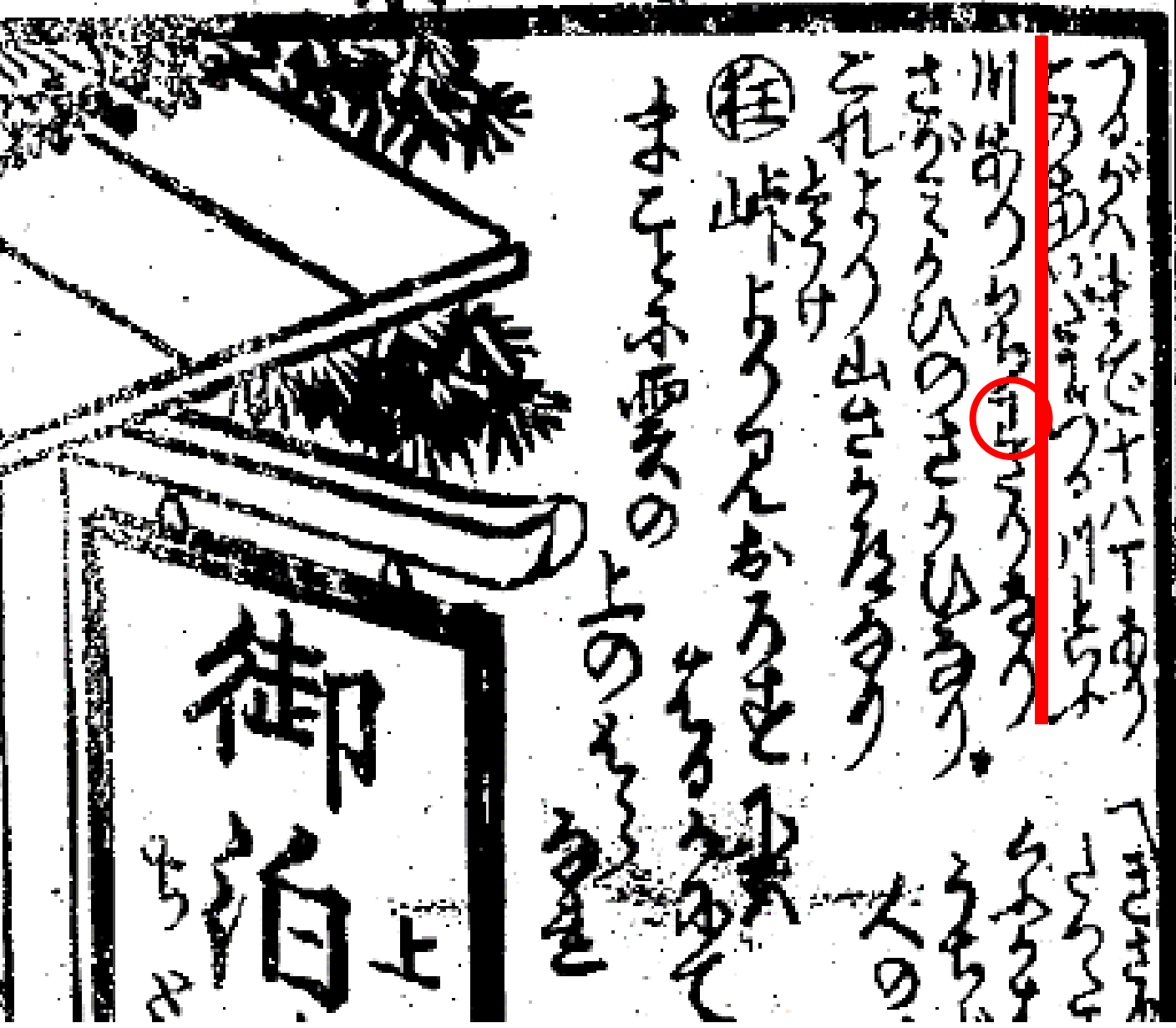


川あり ☐ ☐ わたり ☐ り

「た」の上はちょっと見慣れないのでわかりづらいかもしれません。「王」のくずしで、「わ」として用いられます。

= 「王」

食の上

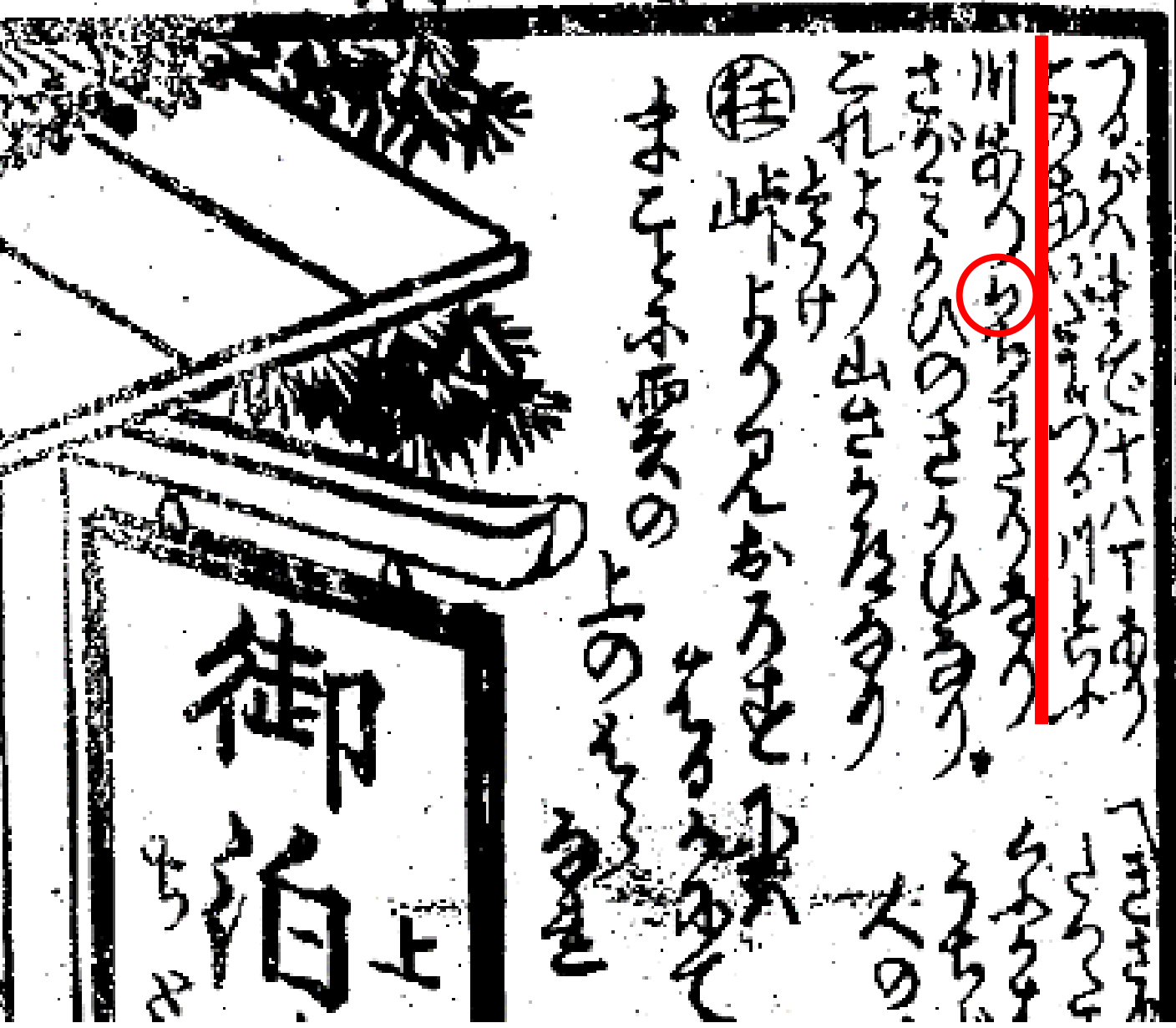


川あり
☐
☐
わたり
☐
り

「わ」は現在私たちが
使う文字のもとになっ
た「和」のくずしもよ
く使われます。

また「は」「ハ」
「ワ」とも置き換えら
れて出てきます。

食の上



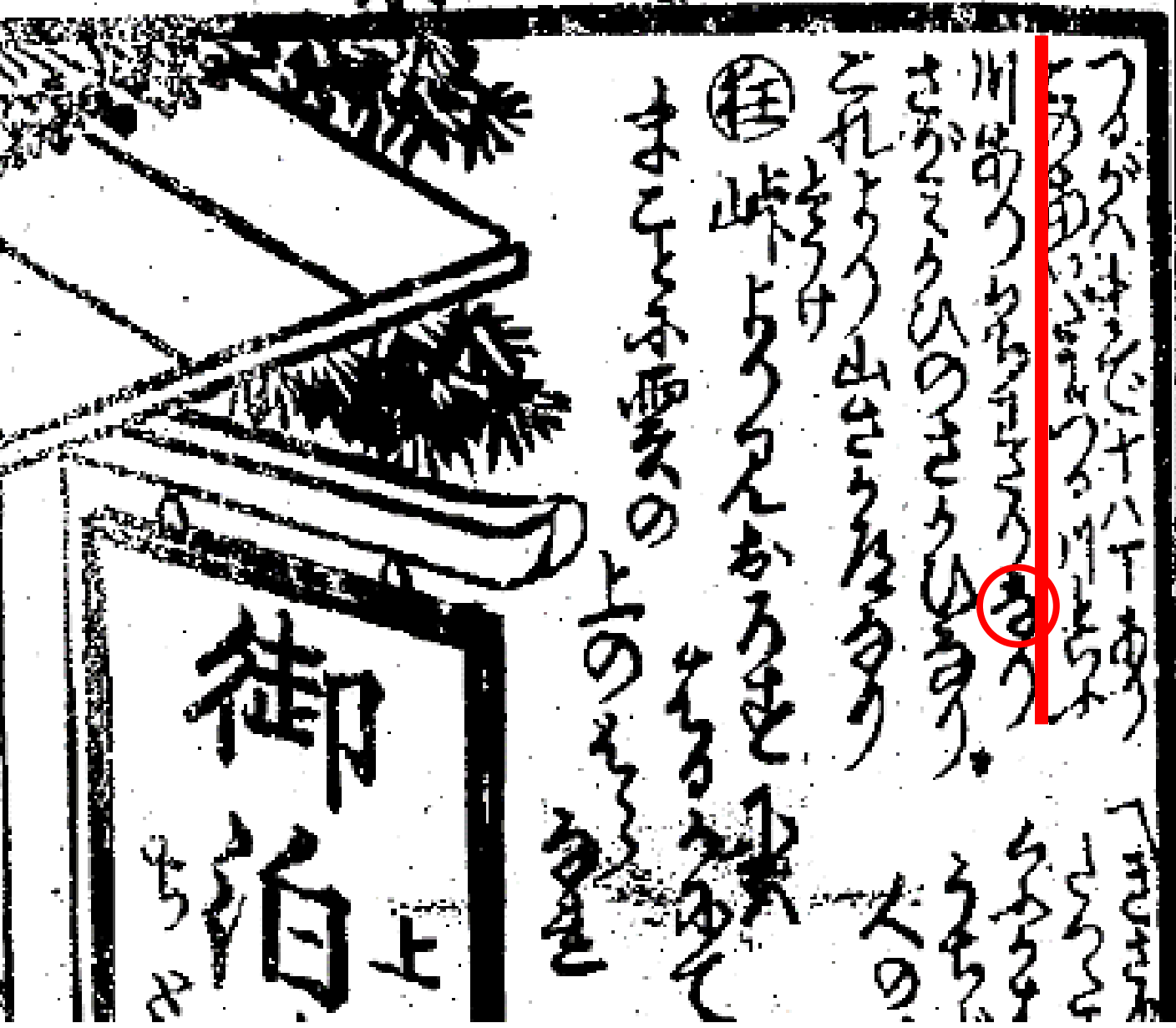
つるがへはすむに十八丁あり
川ありちちわたりきり
さかきくひのさうひきり
これより山さうななり
きりけ
① 峠よりかんちりきり
まことふ雲の上のさう
きり

川ありかちわたり□り

ここは「徒渡（かちわたり）」という言葉を知っていれば「か」ではないかと推定できます。逆に文字の形だけでは少々厳しいかもしれません。

「徒渡」は渡し舟などを使わずに、川を歩いて渡ることです。

食の上



つるがへは、さういふつるがへは、
川ありかつちをさういふ川あり
さかきくひのさういふさかきくひ
これよりつ山さういふ山あり
まことふ雲の
上のさういふ
まことふ雲の
上のさういふ

御泊

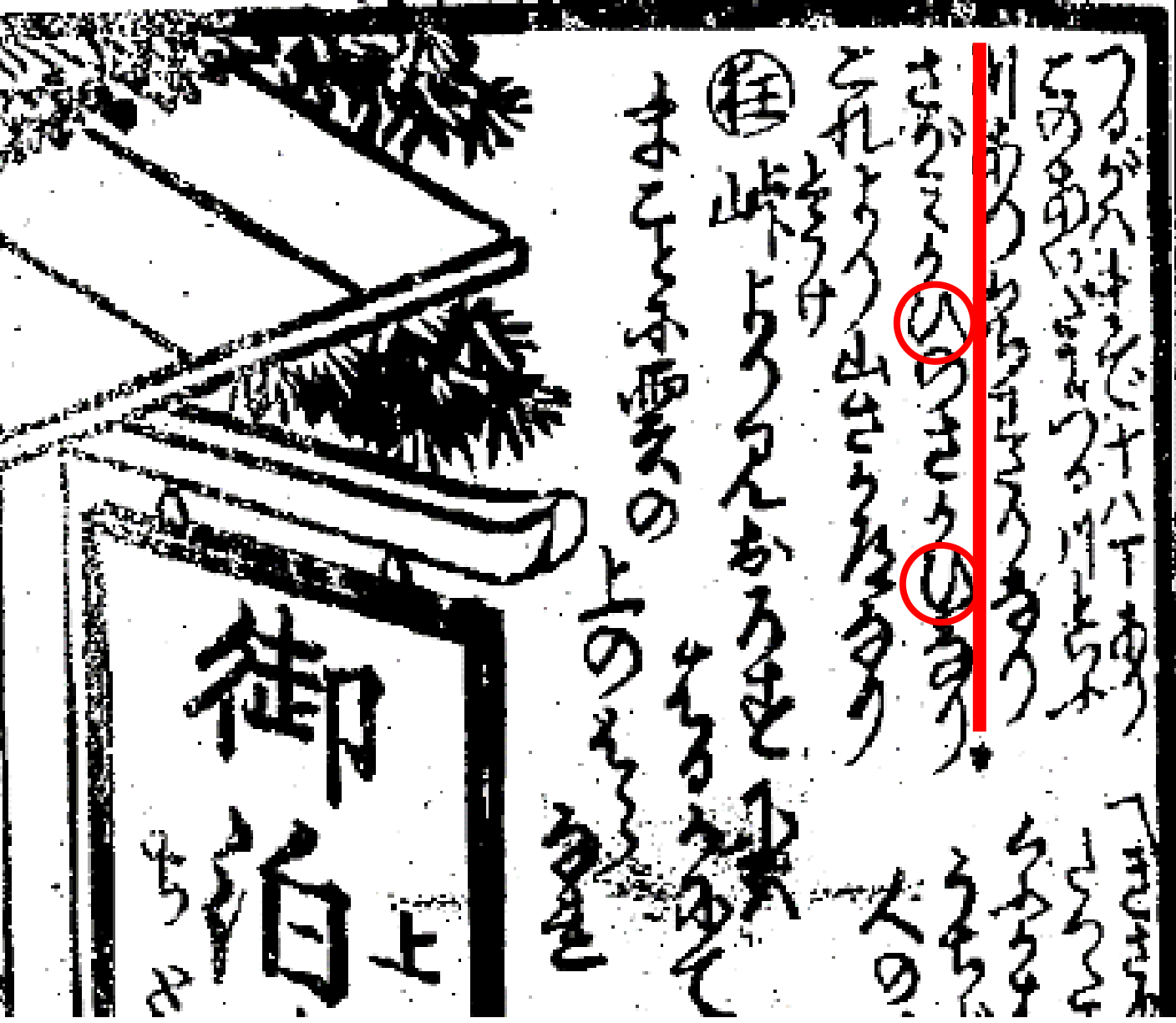
上

残ったここは、こ
いう文体に慣れていれ
ば候補が考えられるで
しょう。

断定の助動詞「な
り」ですね。ここでは
「奈」のくずしです。
ほかに「那」や「難」、
「南」などが用いられ
ます。

川ありかちわたりなり

食の上



さ
☐
☐
か
☐
の
さ
か
☐
なり

4行目、文末は「なり」でよさそうですね。

この2つは同じ文字です。ここから考えてみましょう。

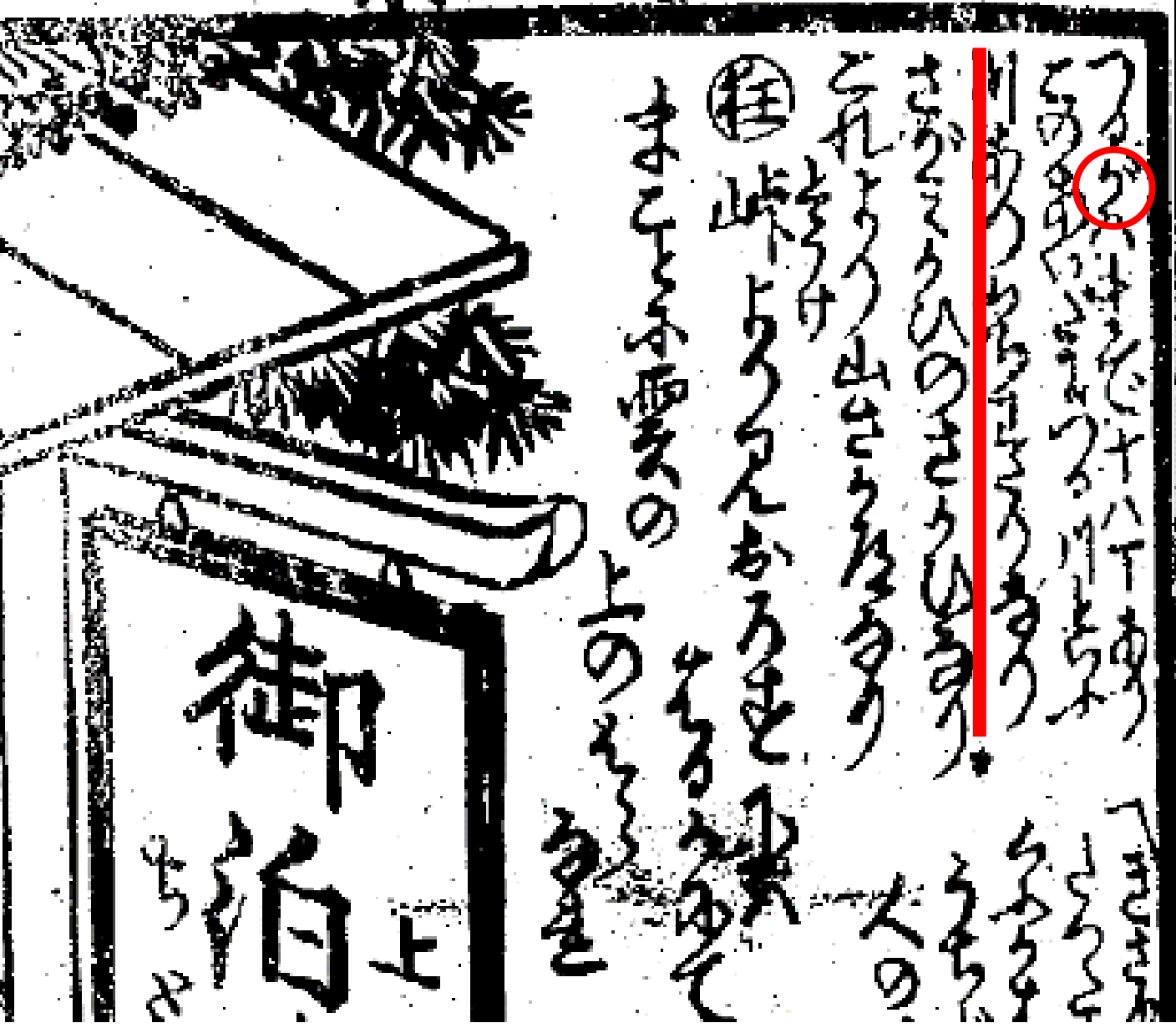


文字の形から「ひ」
で大丈夫そうですね。
「比」のくずしです。

「ひ」は他に「飛」も
よく使われます。形を
確認しておきましょう。

さ
□
□
か
ひ
の
さ
か
ひ
なり

食の上



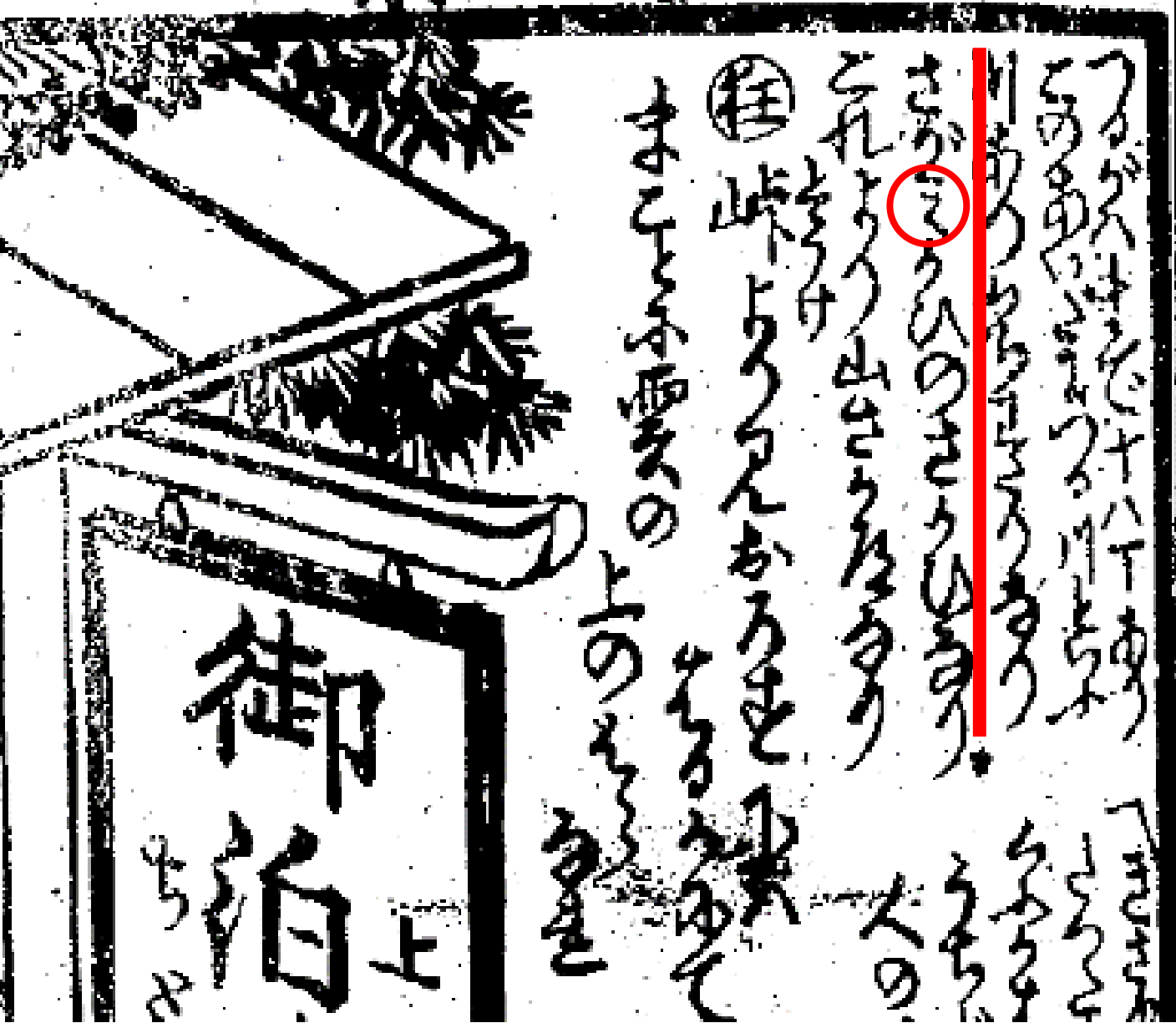
さが



かひのさかひなり

4行目の2文字目は
1行目の3文字目とよ
く似ていますね。
「が」で大丈夫でしょ
う。

食の上

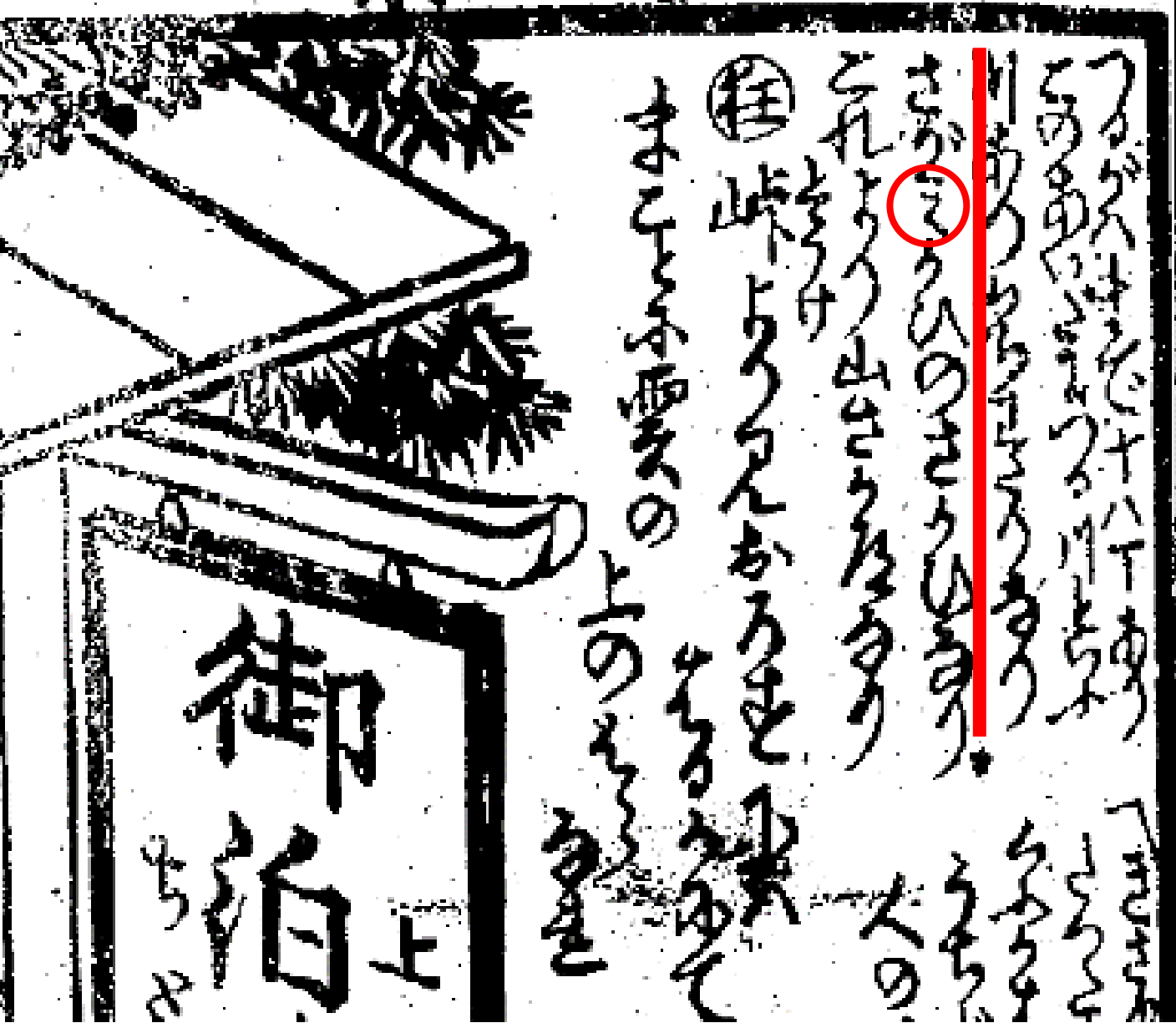


さが□かひのさかひなり

残りの1文字は見た目からでも行けますが、文脈から考えてみましょう。

この文章は上野原宿の説明で、上野原は「さが□かひ」の境、だということです。すると...

食の上

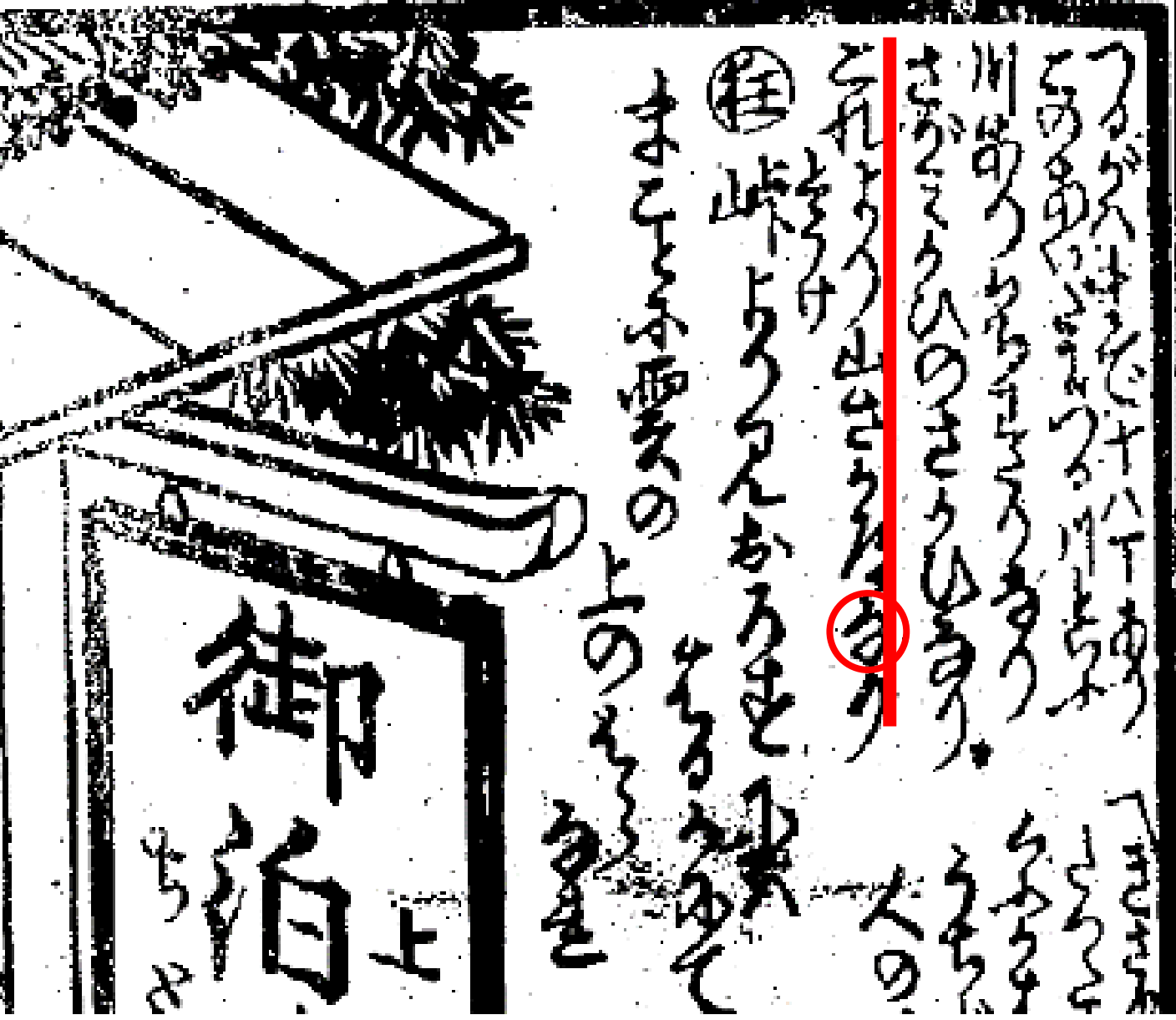


「かひ」は国名の「甲斐」ではないか、と考えます。

「甲斐」と境を接する「さが□」ですから「相模」で決まりですね。ただし「み」ではなく「ミ」が入ります（「三」のくずしです）。

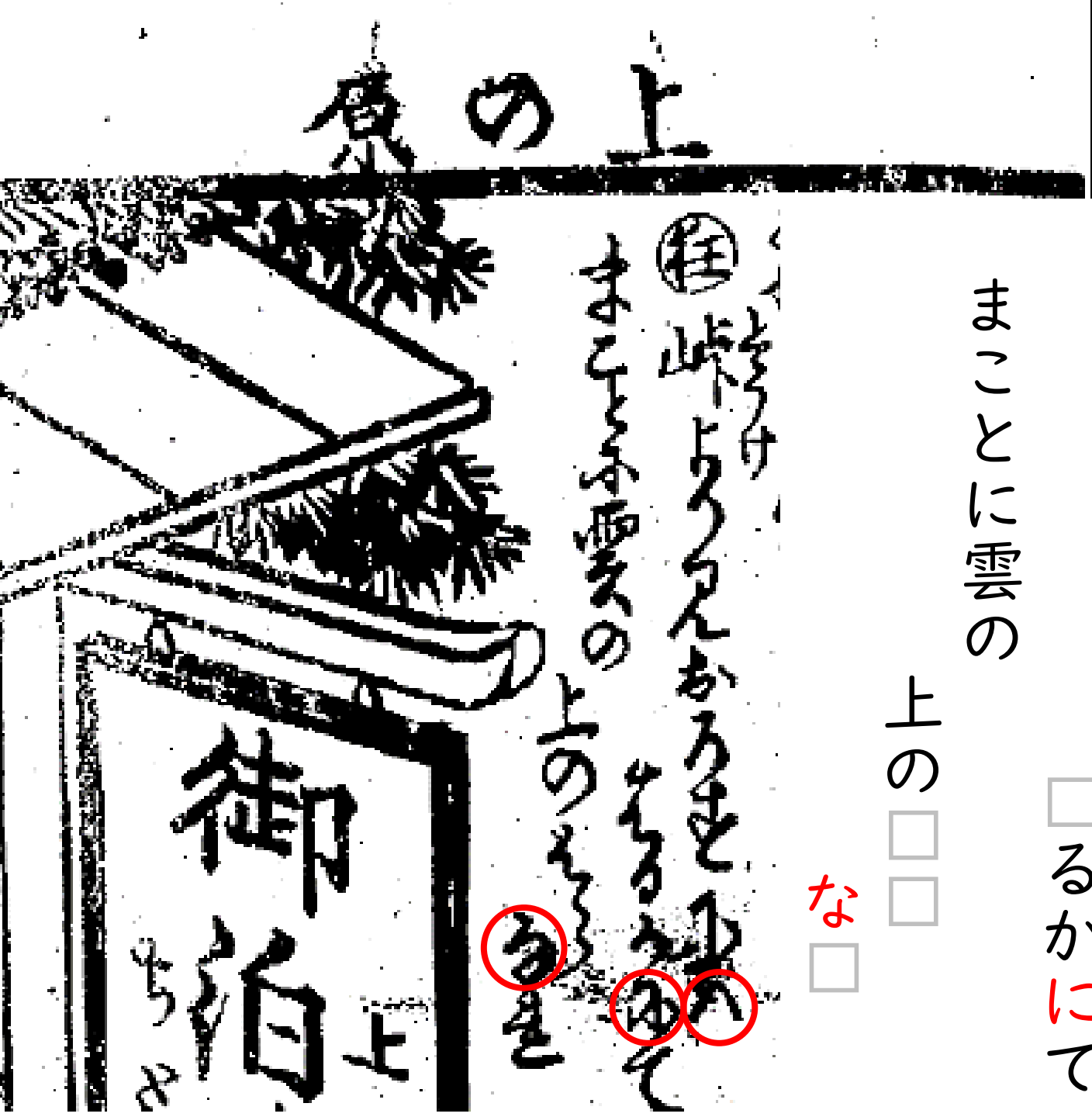
さがミかひのさかひなり

食の上



5行目は今までのところ
でほとんど読めています。
「なり」が読めれば判読完了です。

これより山さか道なり



食の上

6行目以降の狂歌の
部分はいっぺんにいき
ましょう。

まずこれまでのとこ
ろから「ハ」「に」
「な」が入りますね。

①狂 峠より見おろす下ハ

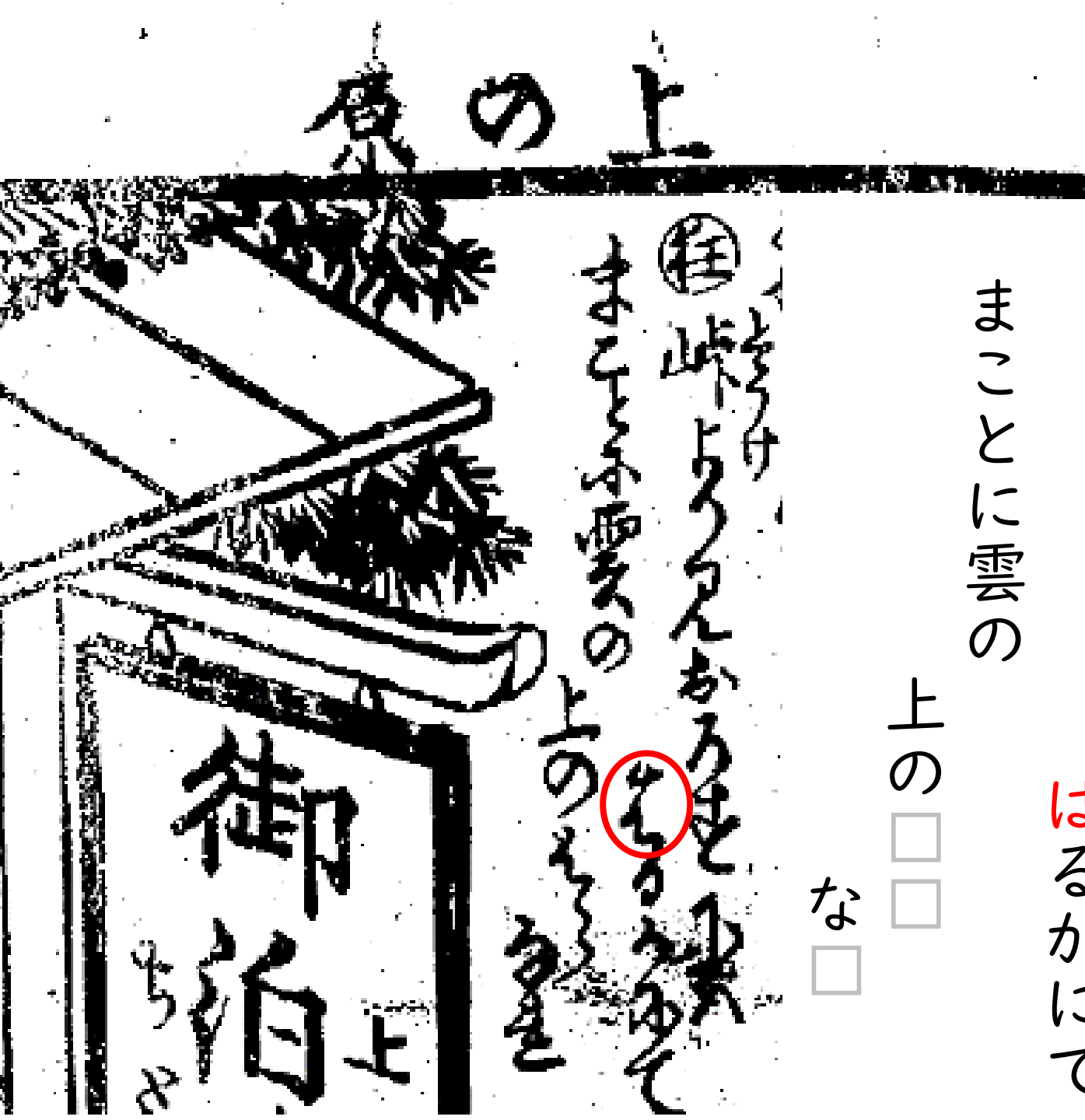
とうけ

まことに雲の

上の□□□

な□

□るかにて



まことに雲の

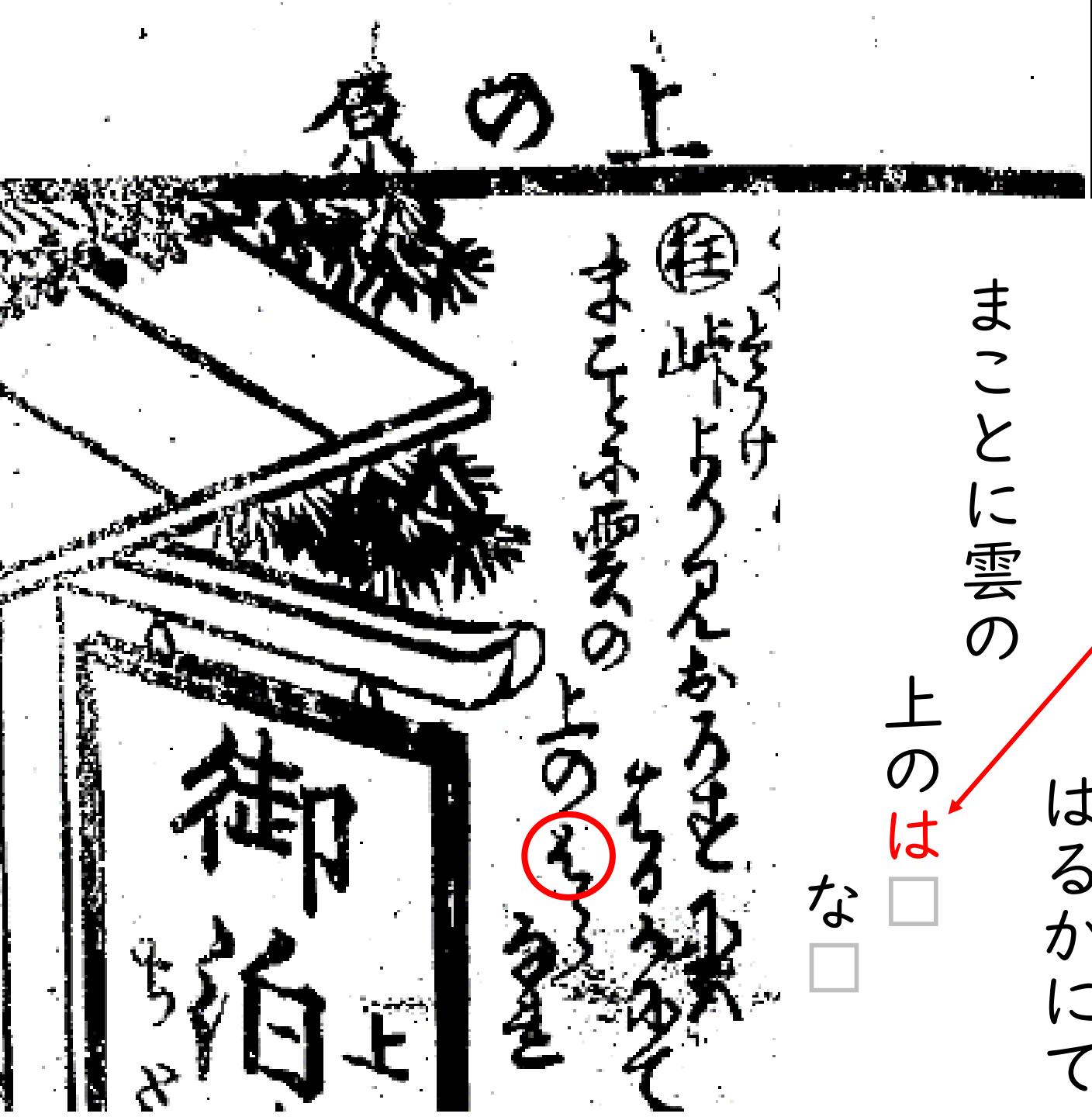
上の ☐ ☐

な ☐

① 狂 とうけ 峠より見おろす下ハ
はるかにて

これも現在のひらがなとは大きく異なるので慣れないと思います。「者」のくずしで「は」と読みます。

「者」は普通の(?)古文書でも助詞「は」として使う場合がありますね。くずし方を確認しておきましょう。



上

狂

山より見るも下ハ
まことふ雲の上の
もの

狂

峠より見おろす下ハ

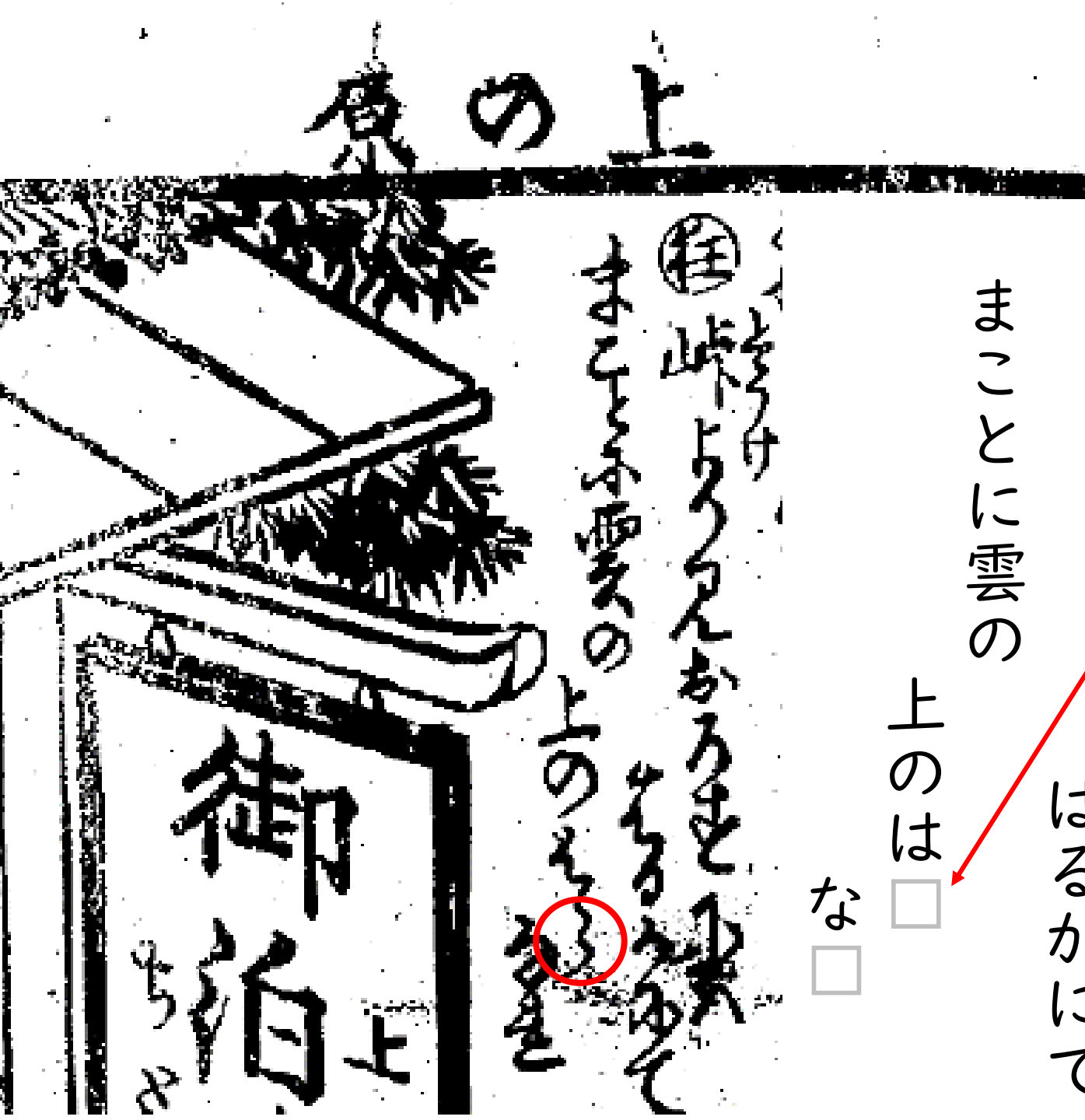
まことに雲の

上のは

な

はるかにて

ちなみにこれも「は」です。先ほどの「は」と形が違いますが、同じに見えますが、同じ「者」のくずしで、見た目の違いはくずし方によるものです。



上

狂

まことに雲の

上のは

な

まことに雲の

上のは

な

狂

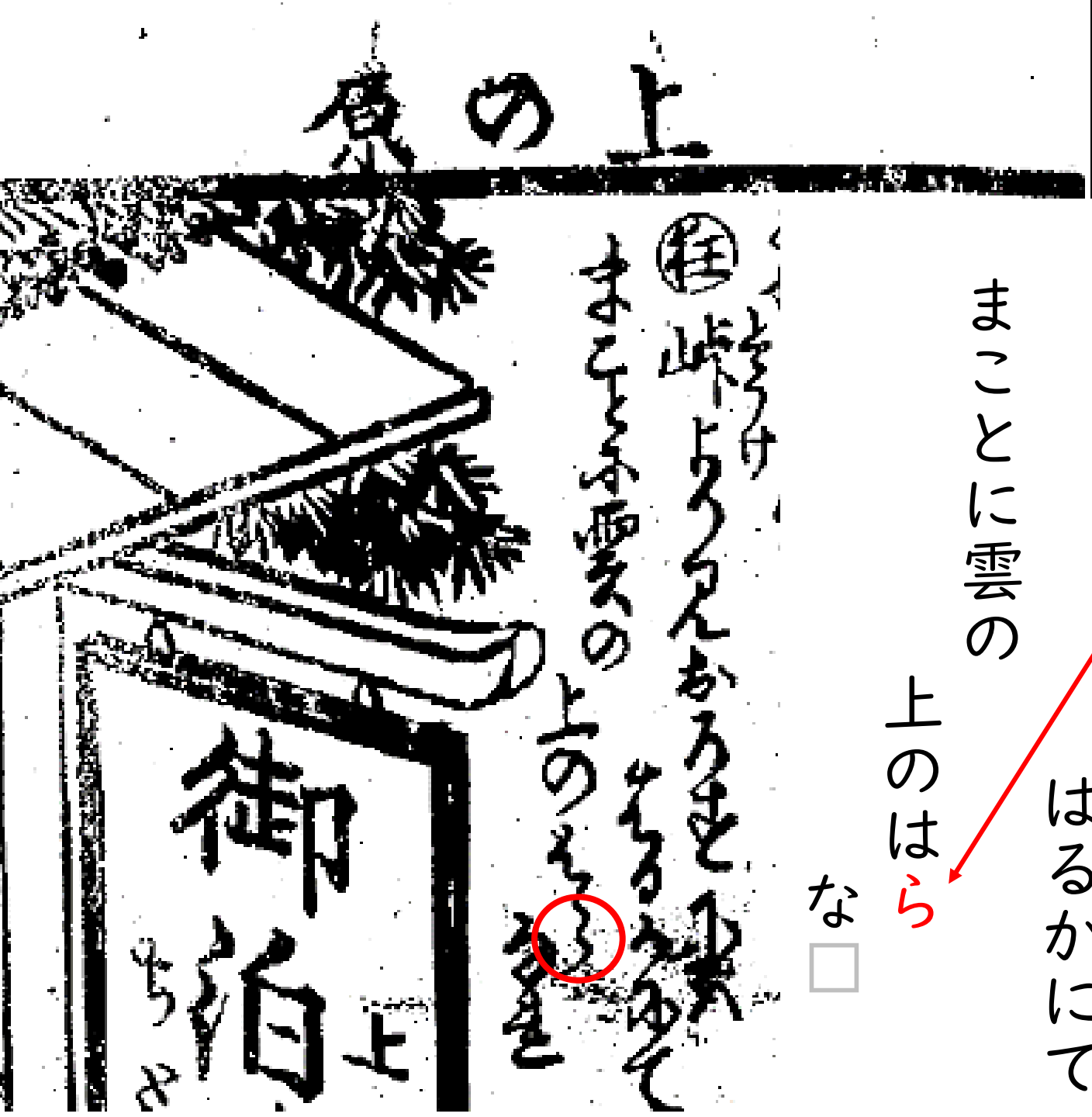
とうけ

峠より見おろす下ハ

はるかにて

ここは見た目からも
行けませんが、文脈から
考えてみましょう。

「峠より 見おろす下
は はるかにて まこと
に雲の 上のは□な□」
これが上野原宿の紹
介であることから…



①狂

とうけ

峠より見おろす下ハ

はるかにて

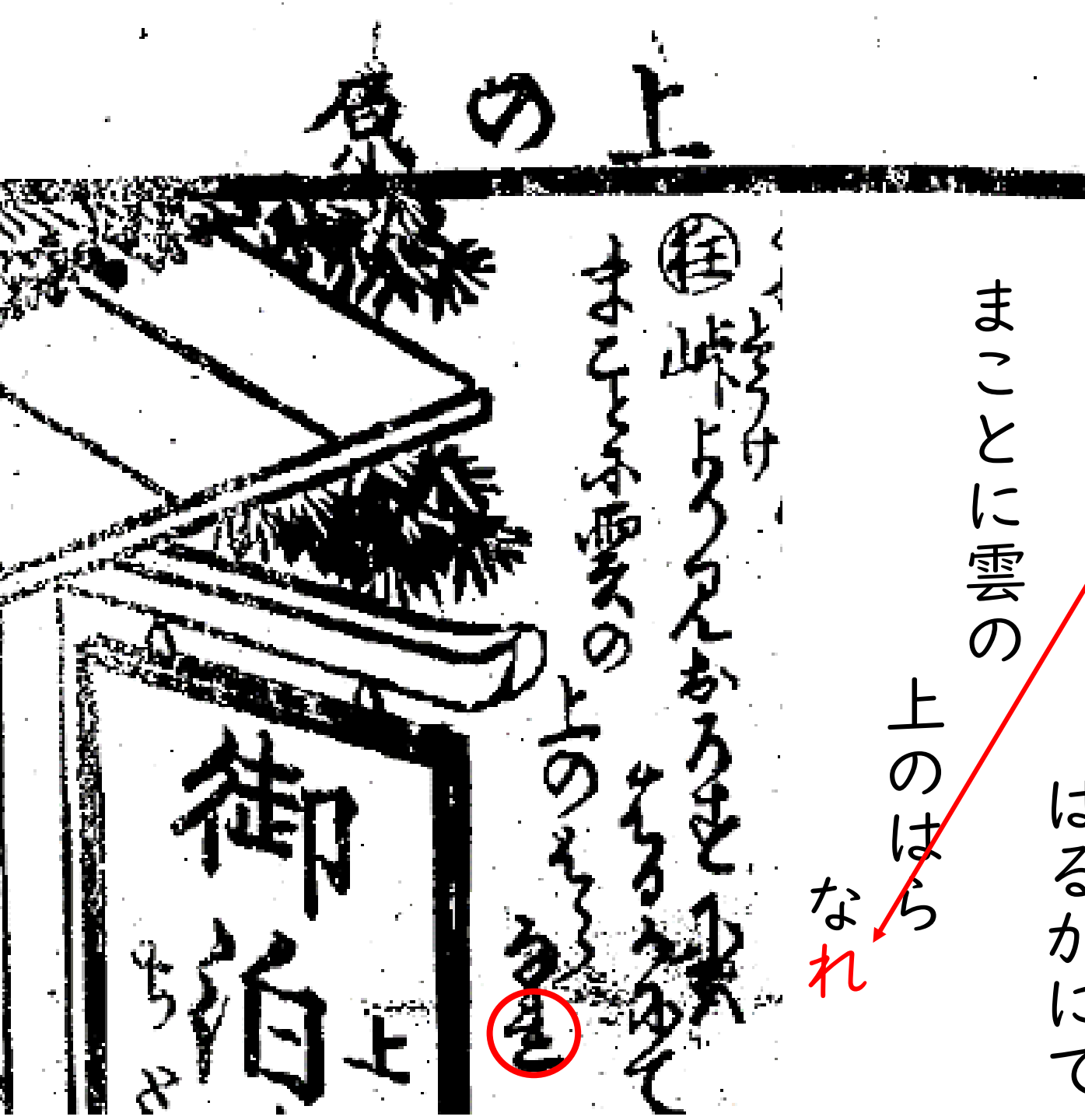
まことに雲の

上のはら

な

「ら」でよいでしょう。
「良」のくずしです。

「（雲の）上」と「上
（野原）」をかけてい
るのですね（あまり上
手とは言えませんが
…）。



上

狂

山より見おろす下ハ

まことに雲の

なれ

まことに雲の

上のはら

なれ

狂

峠より見おろす下ハ

とうけ

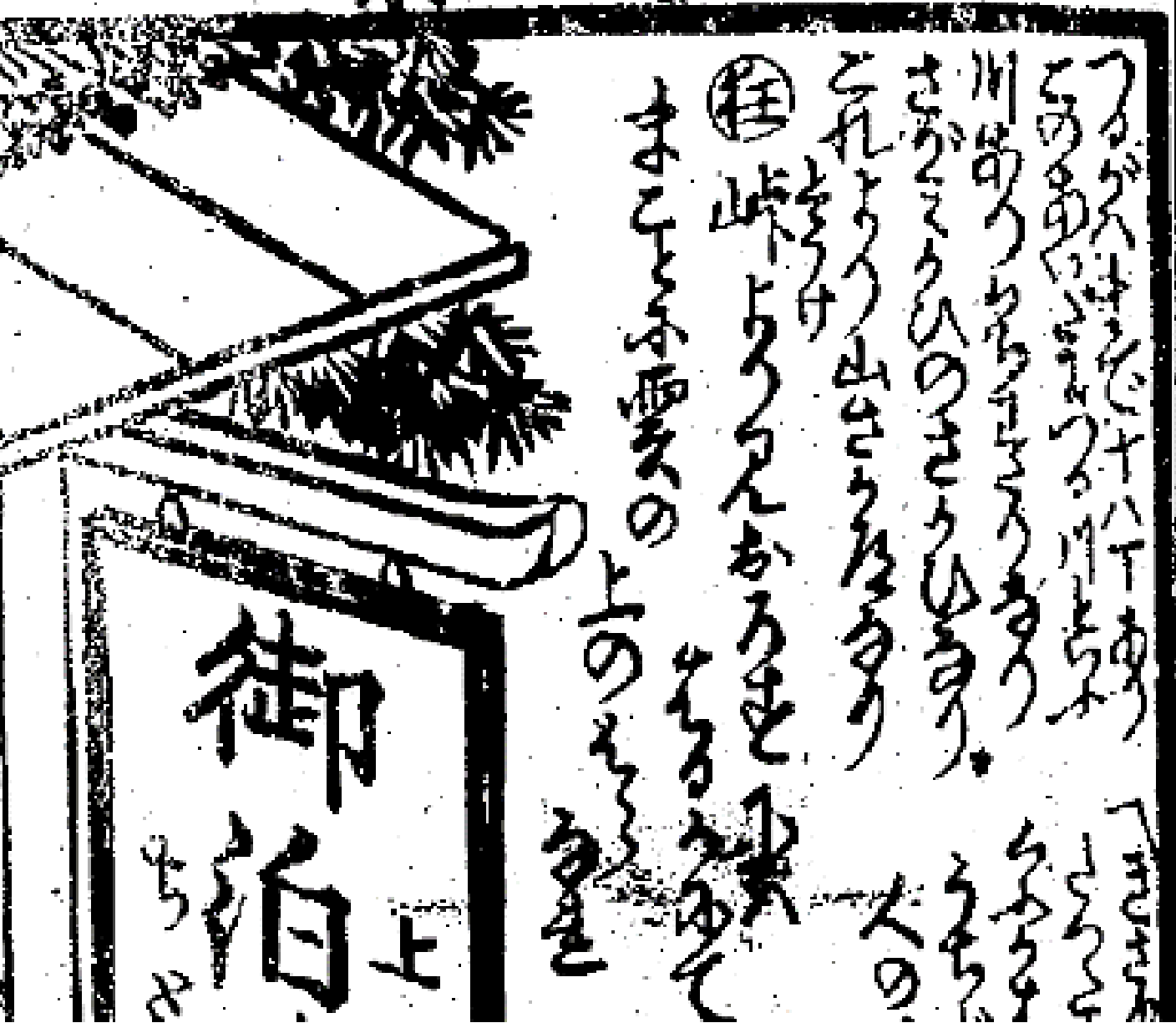
はるかにて

最後、これも文字の形からでも行けますが、狂歌の最後なので「なり」か「なれ」でしょう。

「り」か「れ」なら、「連」を使った「れ」の方がよさそうですね。

「れ」は「禮（礼）」や「連」がよく使われます。

食の上



ともかく写真の範囲は全部
解読できました。確認し
てみましょう。

原の上

つるがハまで十八丁あり
 このあいだにつる川といふ
 川ありかちわたりなり
 さがミかひのさかひなり
 これより山さか道なり
 とうけ

①狂 峠より見おろす下ハ

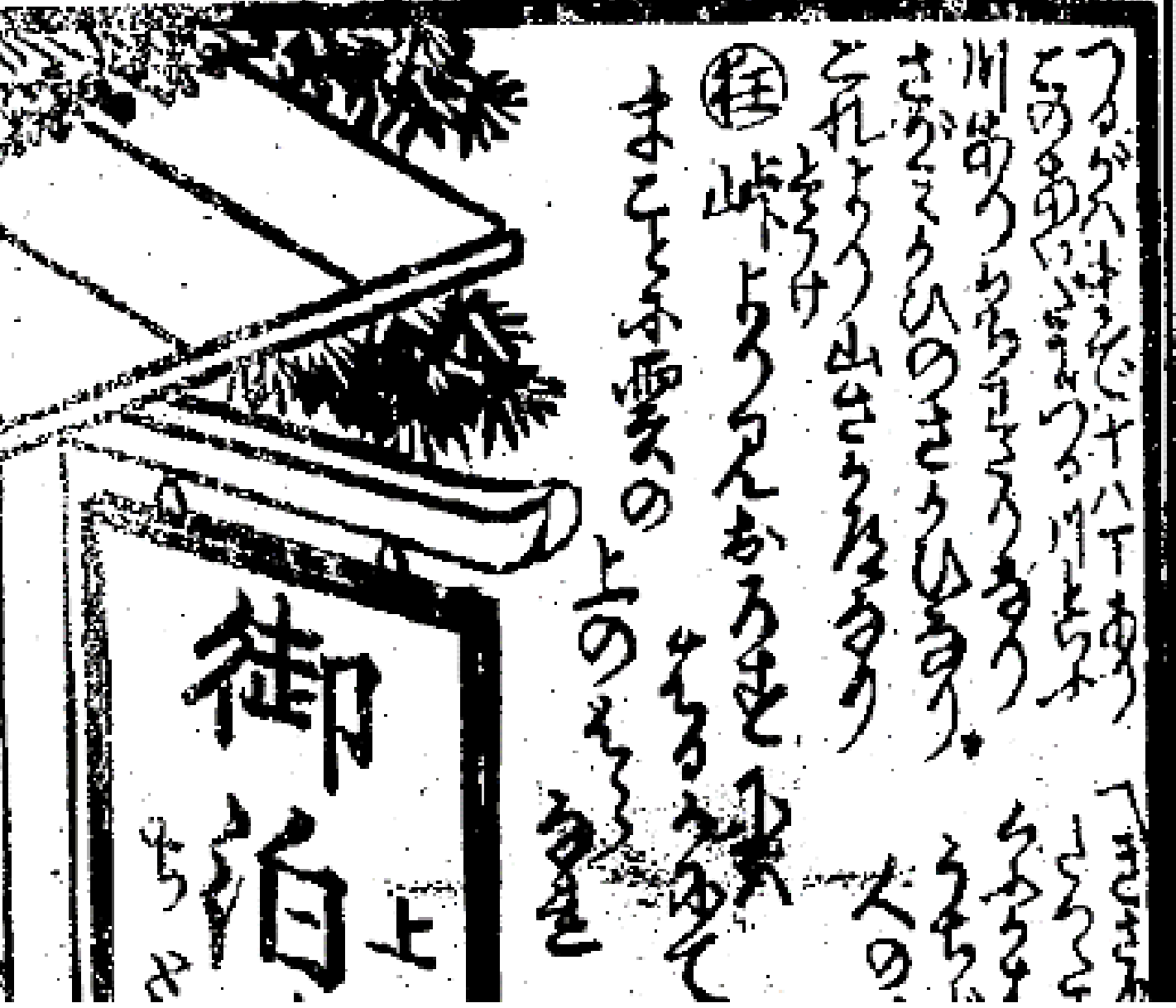
はるかにて

まことに雲の

上のはら

なれ

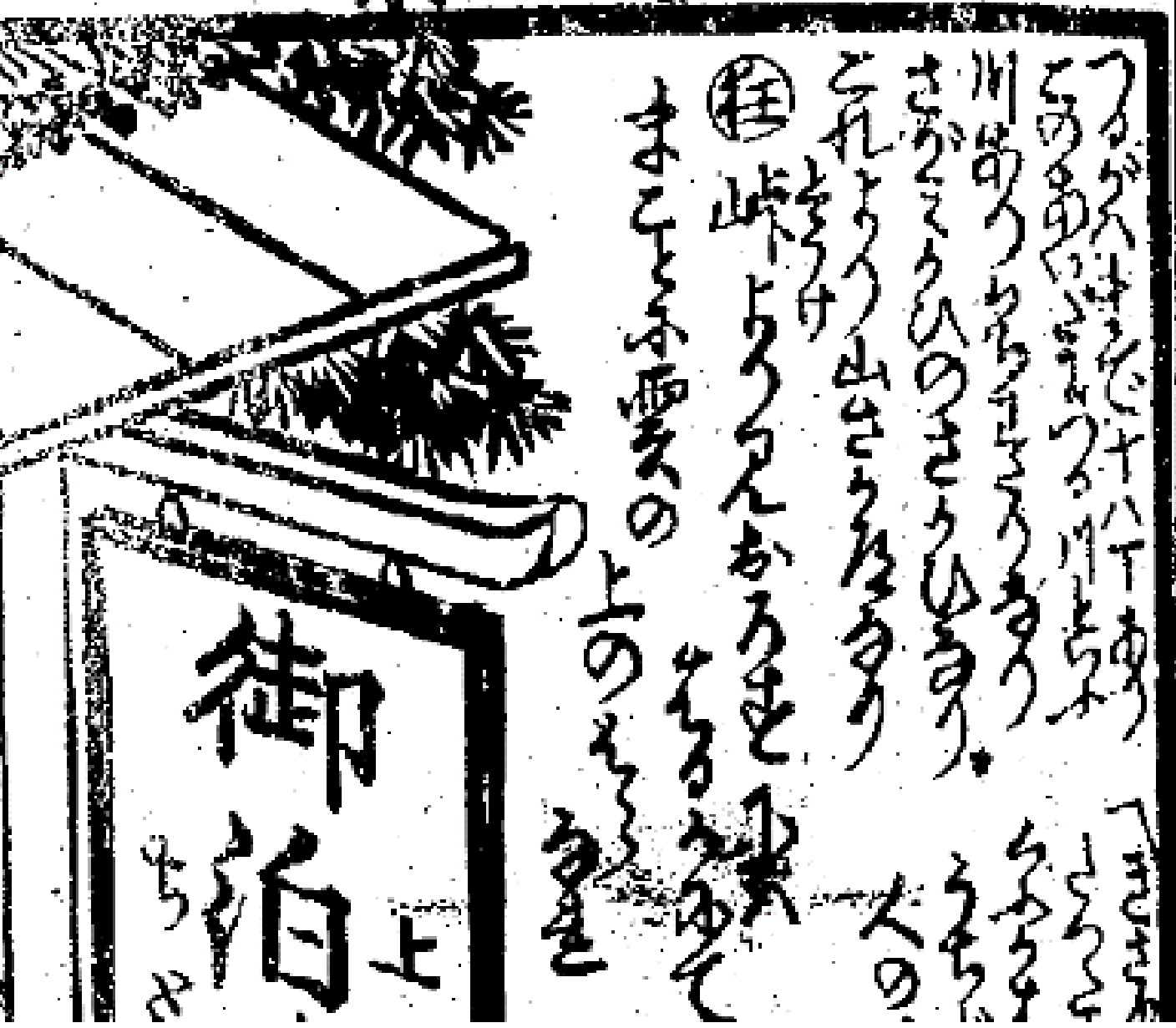
原の上



つるがハまで十八丁あり
 このあいだにつる川といふ
 川ありかちわたりなり
 さがミかひのさかひなり
 これより山さか道なり
 とうけ
 ①狂 峠より見おろす下ハ
 はるかにて
 まことに雲の
 上のはら
 なれ

御泊

食の上



読みやすく、適宜漢字に改めて、読点を入れてみましょう。こういう作業は文章の意味までわかっていないとできません。トレーニングですのでぜひやってみましょう。

原野上

鶴川まで十八丁あり、
 この間に鶴川という
 川あり、かちわたりなり、
 相模・甲斐の境なり、
 これより山坂道なり

とうげ

①狂 峠より見おろす下は

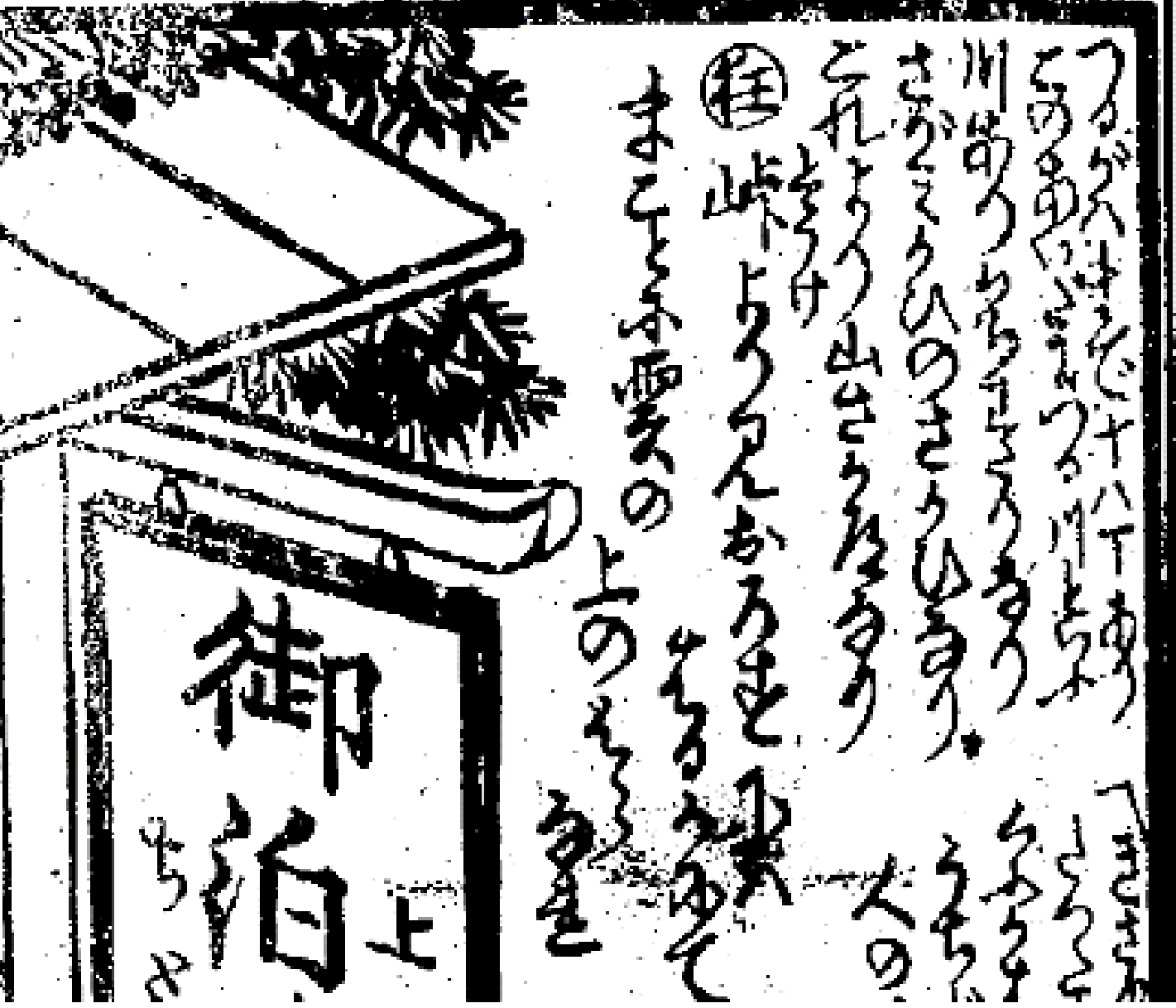
はるかにて

まことに雲の (上野原)

上のはら

なれ

原の上



つるがへすを十八丁あり
 この間に鶴川という
 川あり、かちわたりなり、
 相模・甲斐の境なり、
 これより山坂道なり

まことに雲の上の

御泊



次はここを読んでみましょう。
面長な男の発言です。

ほとんどはこれまで読んできた部分や現在のひらがなの知識で読めるのではないでしようか。このように、仮名文字はバリエーションが漢字に比べれば少ないので、1文字読めるようになると世界がぐっと広がります。

「きさ□ハよくくふお□□だ
たつた今くつてまた
くふかはらもミの
うちだそれも
人のぜに▲





きさ□ハよくくふお□□だ
たつた今くつてまた
くふかはらもミの
うちだそれも
人のぜに▲

この記号は「庵点（いおりてん）」といって、発言や歌謡の引用など、これ以降に続く文章が地の文章とは違うものであることを示しています。

ここではこれ以降の文章がこの男の発言であることを意味しています。かぎかっこみたくないものですね。



「きさ□ハよくくふお□□だ
たつた今くつてまた
くふかはらもミの
うちだそれも
人のぜに▲

ここでの最大のポイントは「た（だ）」の判読でしょう。同じ「多」をくずした「た」にもいくつかパターンがあります。辞典などで確認をしておきましょう。



「きさまハよくくふお
たつた今くつてまた
くふかはらもミの
うちだそれも
人のぜに▲
だ

これはちょっと縦長
になっていますが、
「満」のくずしの
「ま」です。「多」も
似たようにくずれるこ
とがありますが、「き
さた」では意味が通り
ませんね。



「きさまハよくくふおとこだ
たつた今くつてまた
くふかはらもミの
うちだそれも
人のぜに▲

切れ目がわかりずらいかもしれませんが、「と」と「こ」がつながっているように見えますね。

「と」は「止」、
「こ」は「己」のくずしです。現在のひらがなにも近いですね。

最後の記号は続きを示す記号で、同じ記号から始まる文章に続きます。

「きさまハよくくふおとこだ
たつた今くつてまた
くふかはらもミの
うちだそれも
人のぜに▲





▲から始まる部分を探すと、
ここにありました。続きはこちら
です。



ここも今までの知識である
程度読めるはずです。

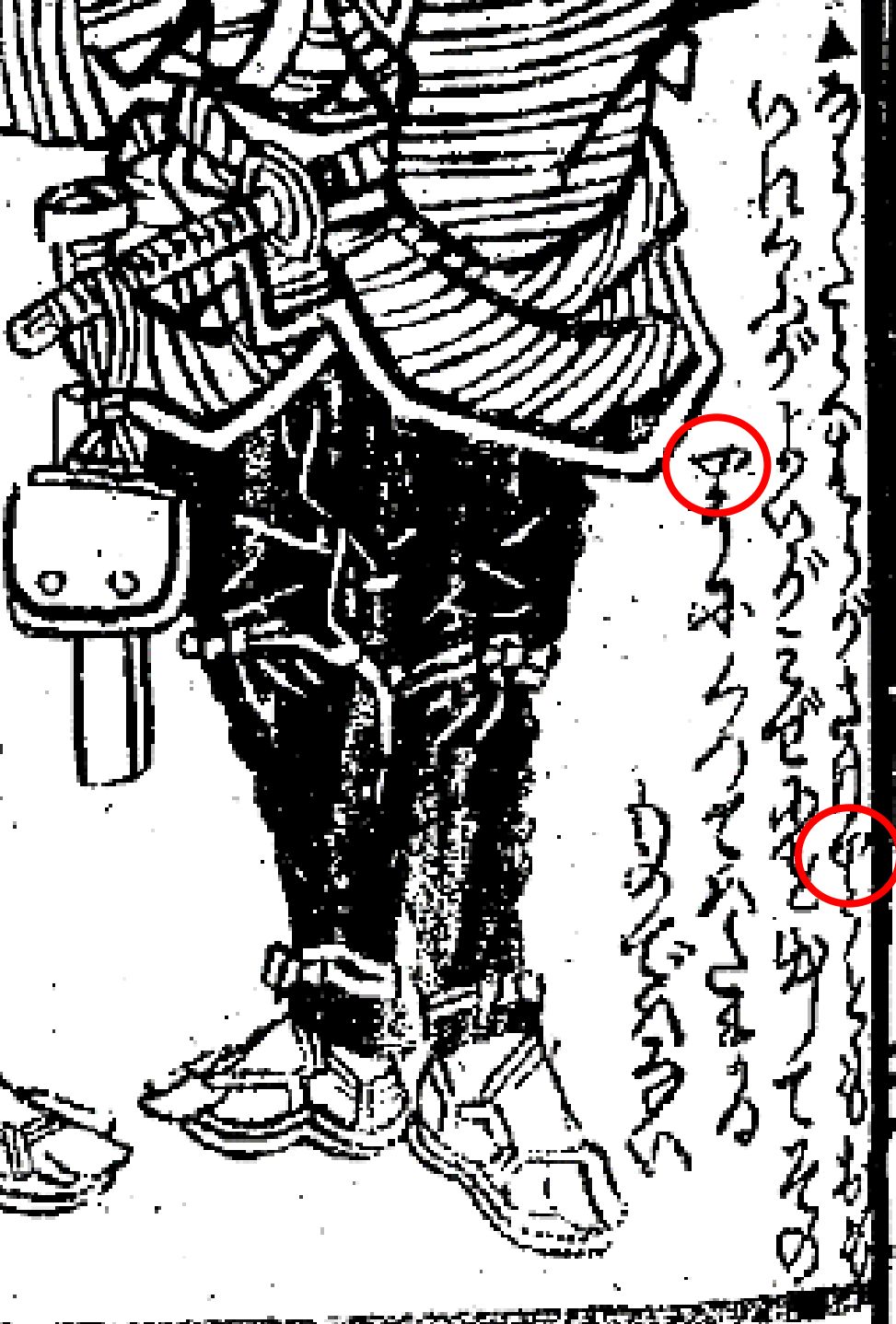
「ら」と「う」の区別です
が、文字の見た目ではほとん
ど区別できません。丸をつけ
た文字は「ら」か「う」の可
能性を考慮して読んでみて、
意味が通る方を採用します。

ここはこの時点では判断が
つきません。上の文字を読ん
でから推定しましょう。

▲ならたとへは^らがさけ^うともおも
いれくふがよいがミゼに^うを出してその

☐にくつてハたまる

ものでハない



▲ならたとへはらがさけ
いれくふがよいがミゼにを
出すしてその



にくつてハたまる

ものでハない



ならたとへはらがさけ

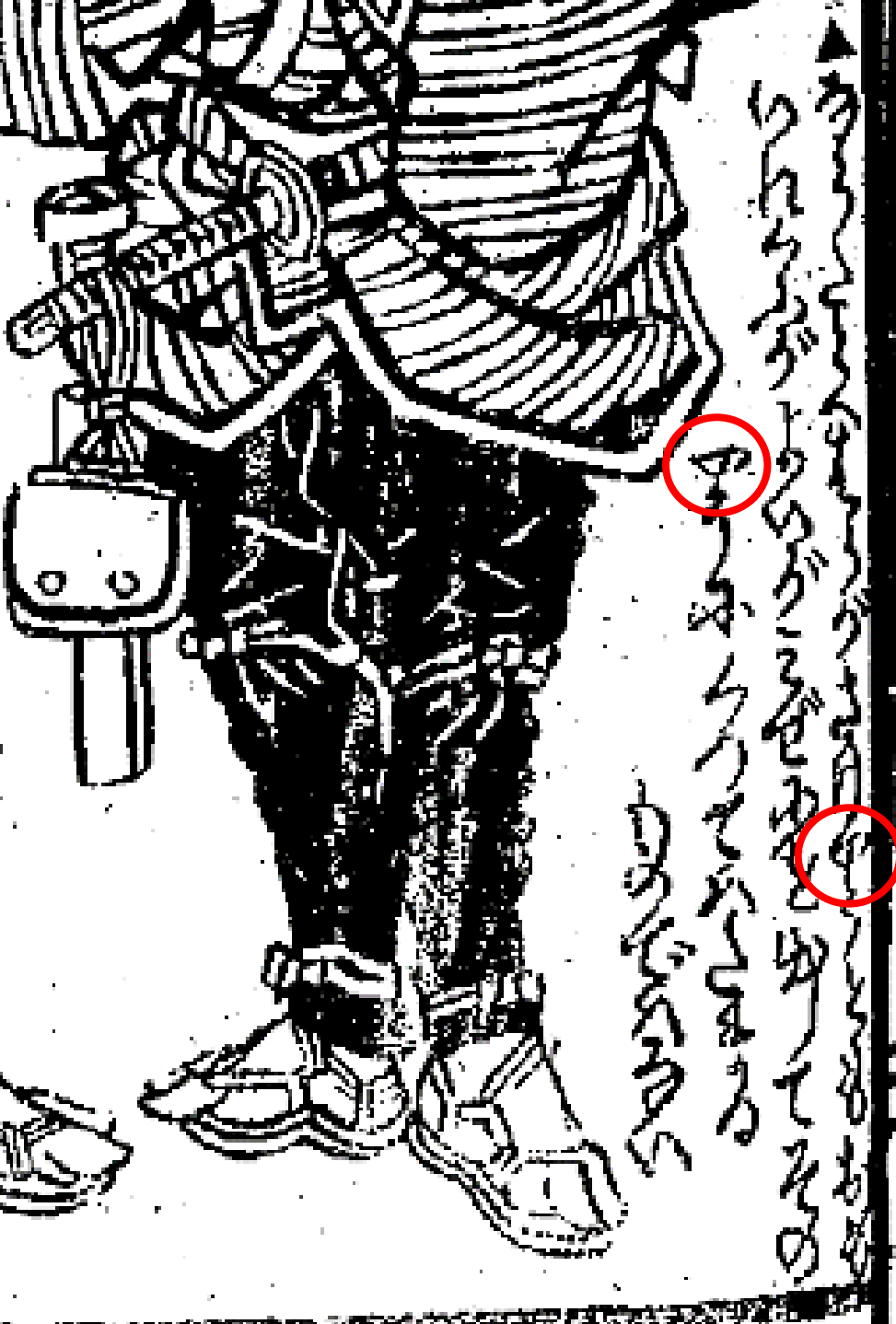


ともおも

ここは同じ文字ですね。

「ゆ」のようにも見えますが、
「也」のくずして「や」です。

「や」は他に「屋」、「夜」
なども頻出です。



▲ならたとへはらがさけやうともおも
いれくふがよいがミぜにを出してその
やうにくつてハたまる
ものでハない

「ら」か「う」か、判断を
保留していた文字に戻りま
しょう。上がいずれも「や」
であれば、「やら」よりは
「やう（よう）」の方がよい
でしょう。



一通り読めました。

なお「おもいれ」は聞き慣れない言葉かもしれませんが、辞書をひくといろいろな意味があります。その中に「思い切り」という意味もあるようなので、文意は通りますね。

▲ならたとへはらがさけやうともおも
いれくふがよいがミゼにを出してその

やうにくつてハたまる

ものでハない

面長の男の発言は左の通りです。これも先ほどのように、適宜漢字に改めて、読点を入れてみましょう。

「きさまハよくくふおとこだ
たつた今くつてまた
くふかはらもミの
うちだそれも
人のぜに」▲

▲ならたとへはらがさけやうともおも
いれくふがよいがミぜにを出してその
やうにくつてハたまる
ものでハない



「たった」や「食って」などの「っ」（促音）が普通の文字と同じ大ききさで書かれているあたりに、読みづらさを感じるかもしれません。

「貴様はよく食う男だ、
たった今食ってまた
食うか、腹も身の
うちだ、それも
人の銭▲

▲なら、たとへ腹が裂けようともおも
いれ食うがよいが、身銭を出してその
ように食ってはたまる
ものではない





看板の文字も読んでおきましょう。



御上の
泊りの
ちとせ
や宿原

二
うそ
んどんそば切

「そば切」の「そ」以外
は問題なく読めるのではない
でしょうか。「そ」は
「楚」のくずしです。今で
もそば屋さんでは、たまに
この文字が使われています
ね。



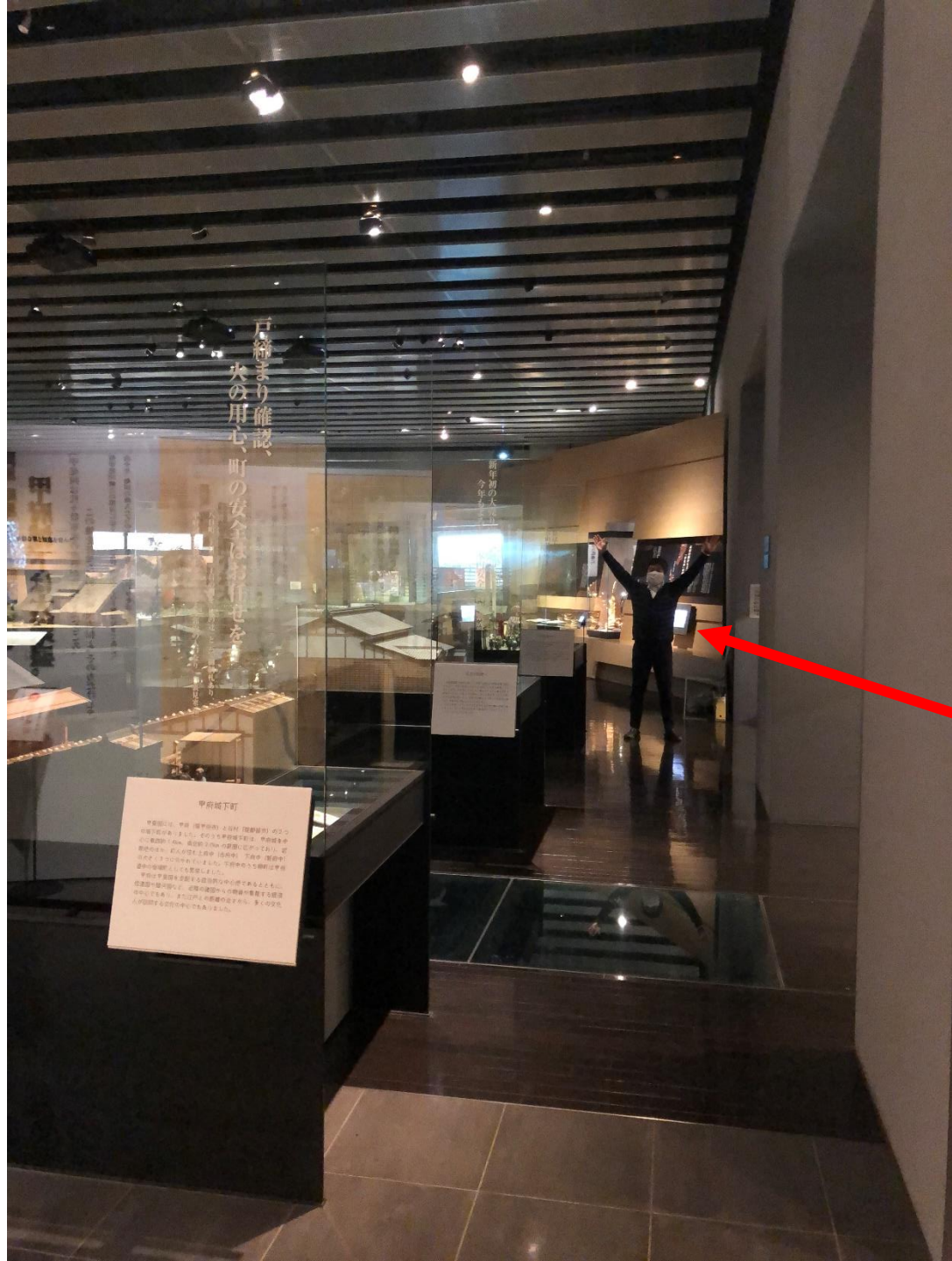
残る2か所は…宿題にします！
来週までに、是非チャレンジし
てみてくださいね。



これまで読んだ文字がきちんと読めれば大半は読めるはずです。あとは類推でなんとか…。答えはまた来週発表します。

今回読んだ『金草鞋十二編身延道中ノ記』は、常設展示室「城下町のにぎわい」コーナーで、12月14日（月）まで展示しています。

ここです。
ぜひ実物も見てくださいね。





それではまたお会いしましょう！